転生物語

GMS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生物語

【Ｎコード】
Ｎ４６０４Ｗ

【作者名】
ＧＭＳ

【あらすじ】
初めて書いたものです。
なので期待はしないでください。
そして、これは多少お気に入り作品に影響されてます。
そして内容としてはマヤの予言の通り滅びた後作者だったらどうするか？
というのを考えて書いています。どうか温かい目で読んでください。
ちなみに最低でも毎週土曜に更新予定です。

第1話　エンド・オブ・ザ・ワールド（前書き）

間違いなく下手ですが、楽しんでください。

第1話　エンド・オブ・ザ・ワールド

２０１１年１０月２８日　　人類は滅亡した。
というわけでおれたちは神様に文句を言いに来ている。
ちなみに筆頭は俺、石崎遊輝。
友達は生きているとき少ないほうだったがこんな理不尽な死がある
かという生きているときの知り合いというか学校のメンバー、〇〇
小学校、〇〇中学校で一緒だった同級生を集めて抗議に来てた。
どうしてこんなことになったのかというと……

１０時間前
「緊急速報、緊急速報
急に隕石がコースを変え地球に向かってきています。
衝突予想時刻は3時間後の午後3時です。
アメリカ政府は核ミサイルで粉砕しようとしましたが隕石が大き
すぎて破壊に失敗。
もう手段が残されていません。
この隕石の予測落下地点は太平洋の中心部で落ちたら地球の陸地
すべてを飲み込むような津波が起きると予測されています。
世界のビップたちはこの時のために作られた地下シェルターに避
難してますが、もうどのシェルターも満杯になってしまっています。
私たちは滅びゆくしかないのでしょうか。
……」
そしてあちこちのシェルターを家族とともに回って入れてくれな
いかとまわっていたが
時間が来てしまいお陀仏となってしまったというわけさ。
そして神様との面会

神「どうしたのだ、そんな血相を変えて」

こいつわかっていってるだろ。

「ふざけんな
どうして俺らが死なないいけないんだよ。
俺らは未来ある若者だったんだぞ。それに来てはいないが俺の母親だってあと２０年は生きてられたはずだ。
こいつらの両親だってそうだ。
なんで俺たちを殺したんだ。」

神「殺したとは失礼じゃの。しょうがないじゃろ、たまたま死ぬ運命だったんじゃから。」

こいつ本当に神か。ふざけてる。

「わかった死んだことはとやかく言わない。だがな、短い人生にされたんだ。
対価くらい払ってくれ。」

何か嫌な予感がするがしょがないきいてやるかの。

神「わかったワシにできることなら何でもしよう。」

「その言葉本当ですね。」

神「ああ神の名に誓おう。」

「では私たちの願いをかなえてください。
そうですね、（私たちの平均寿命－死んだときの年齢）÷１０の願

いをかなえてもらうというのはどうでしょう。」

「むむ、多すぎる気がするがいいじゃろう（これ以上うるさく言われたくないしの。）」

「では私は死んだとき15歳だったので平均を70にしましょう。
（70－15）÷10は5．5ですので5個願いをかなえてください。
余った0．5の願いは弟にかなえさせてやってください。
そうすれば6個弟に願いをかなえてもらえるので。」

神「わかった。」

「では5つの願いを言います。
1つ目　不老不死の命をください。年齢や姿は自分でなりたいと思った風に変化されられるようにしてください。」

神「不老不死か、してもいいがもしどの過ぎたことをしたら即刻地獄に落とされるぞ。
それでもいいのかの。」

「かまいません、2つ目の願いは
時空間移動能力をください。時間と空間つまり異世界に行ったり過去に戻ったりする力です。」

神「いいじゃろう」

「そして3つめその世界にあったアイテムを出せるポケットをください。」

神「いいじゃろう、ただし具体的にどういうものか思い浮かべないととりだせぬぞ。」

「わかりました。
そして４つめ遊戯王デュエルモンスターズのカードをアニメ・漫画・ゲームオリジナルも含めて絵柄・効果ごとに１０枚ずつください。
５つめは遊戯王Ｇ？の世界に転生させてください。日付は十代たち主人公と同じ年に受験できるように生まれさせてください。」

神「わかった、それでいいのだな。いきなりだが行くぞ。」

その瞬間光に包まれ俺は気絶した。

第1話　エンド・オブ・ザ・ワールド（後書き）

感想やどうすればもっとよくなるなどの意見お待ちしています。

第1回主人公プロフィール（前書き）

初期設定です

第1回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長　十代と同じくらい

体重　５０キロくらい

顔　　ふつう

好きなデッキ　ドラゴンデッキ　速攻展開デッキ　強奪デッキ

好きな人　性格がいいやつ　デッキの実験に手伝ってくれるやつ

嫌いな人　めんどくさいやつ　ナルシスト

特技　　フラグメイク【無意識】　読書

プロフィール　まず金の荒稼ぎのためにこの世界に
卒業したらどの世界に行くか検討中
性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。
そのうち神に新たなチート能力をもらおうと思っている。
前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖になっている。

第2話　新たなる始まり　VS名もなき試験官A（前書き）

第2話です

第2話　新たなる始まり　ＶＳ名もなき試験官Ａ

第2話　新たなる始まり
Ｓｉｄｅ　遊輝

痛ってえええぇーー
いったいなんなんだよ。
ってあれいくらなんでも俺小さくないか。
まさか、ってマジで赤ちゃんかよ。なんで赤ちゃんの時から意識あるの。
ま、いいか便利だし。一気に飛ばして9歳、俺に届け物が届くようになった来た。
送り主は天神尾、あの神様か。
一緒に手紙、「おぬしの望みのものじゃ。」みじかいな。
意味は分かったけど、よしデッキを作りまくって試してみるか。
ということで再び時は流れデュエルアカデミアの試験当日
筆記は9番か結構簡単だったんだけどなどこで間違えてんだろ。
遅刻？そんなの会場の近くに止まってたんだ、するわけないだろ。
さて問題はどのデッキを使うかか？
まあこれで行くか。シンクロ？エクシーズ？そんなの使うわけないだろ。
使っても闇のデュエルの時だけだな。
アニメではわからなかったが、1桁は順番が遅いらしい。
まあそんなことを考えているうちに俺の番か。
なんだ、クロノス教諭じゃなくて名もなき試験官Ａが相手か。
だが本気で叩きのめさせてもらう。

「成績が優秀だったようだが実力はどうかな、はからせてもらおう。」

「お願いします。」

「礼儀が正しいのはいいことだ。では始めるぞ。」

「「決闘（デュエル）」」

「先攻は私が貰う、ドロー！」

先手必勝とか、ズル！
まあ後攻で万々歳だけど
初期ライフ４０００だからすぐ終わるな。

「私はミノタウロスを攻撃表示で召喚！
さらにカードを2枚セットターンエンドだ」

そういえばソリッドビジョンで決闘（デュエル）するのは初めてだったな
思ったより綺麗だな。

だが貴様に次のターンは来ない。終わらせてもらおう。

「（完全にソリティアだな）俺のターン、ドロー、よしまず強欲な壺を発動。
2枚ドロー
そして手札から大嵐発動
フィールドの魔法・罠を全て破壊。」

「私の攻撃の無力化が
だが、もう1枚の伏せカードの効果発動
黄金の邪神像の効果により邪神トークンを特殊召喚だ。」

「では、次にライトニング・ボルテックスを発動手札の真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を墓地に送り試験官のモンスターを全て破壊。」

「なに、私のモンスターが全滅だと。」

「さらに死者蘇生発動、墓地の真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を特殊召喚。
さらに手札の真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）を特殊召喚。
そして速攻魔法発動、飛龍天舞。デッキからドラゴン族モンスターを４枚まで送り攻撃力をその枚数×３００ポイントアップする！
俺はデッキからドラゴン族モンスターを４枚墓地に送り、攻撃力を１２００ポインタアップさせる！
さらに手札の未来融合フューチャーフュージョンを発動。
Ｆ・Ｇ・Ｄを指定デッキからドラゴン族モンスターを５枚墓地に送る。
そしてレッドアイズ・ダークネスドラゴンは墓地のドラゴン族モンスター×３００ポイント攻撃力が上がる。
墓地のドラゴン族モンスターは１０枚よって３０００ポイントアップ。
真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）の攻撃力は２４００＋１２００＋３０００で６６００
いけ真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）　ダークネス・ギガ・フレイム。」

「ぐはぁぁーー、まさか１ターンキルをされるとは君は強いね。
お疲れ様、君の勝ちだ
結果は後日連絡される。」

「１ついいですか。」

「なにかね。」

「もし合格したらオシリスレッドに入れてください。」

「何、君だったらラーイエローに入れるぞ
それでもオシリスレッドに入るというのか。」

「はい、お願いします。」

そう言って去って行った。もちろん俺が。
それにしても弱いねぇー
1ターンキルの上、オーバーキルとか
本当に弱い。
手札が良すぎただけか。
でももうちょっといじめたかった。
ところで会場の皆が恐れるような、尊敬するようなまなざしを向けてくるのは気のせいか。

ま、いいやこれからの人生頑張ろう。
とりあえず、主人公である十代のデュエルまで待とう。

遅刻して遅れてきた十代のデュエルを見た感想は
チートドローをこの目で見れたな。
ありゃ運良すぎだろ。

そのあとはさっさと帰った。
面白くなかったし。

そして数日後、俺の元にデュエル・アカデミア合格の通知が来た

第2話　新たなる始まり　ＶＳ名もなき試験官Ａ（後書き）

なんというか試験管Ａ弱くしすぎた？

第3話　死者蘇生ではない切り札　ＶＳ万丈目　十代編（前書き）

前後編で書いてみました。

第3話　死者蘇生ではない切り札　ＶＳ万丈目　十代編

Ｓｉｄｅ遊輝
計画通り
オシリスレッドだ。
原作に介入しまくってやる。ふっふっふっふ

俺は今船でデュエルアカデミアに向かっている。
前世でも乗り物で酔ったことはなかったからこれぐらいは余裕なのだよ
なんてったて某山のぐにゃぐにゃ道で攻略本を手にゲームをできたくらいだからな

暇だったのでデッキを作っていた。
カードは時空間移動能力があるからいつでも取り出せる。
今作っているのはオジャ万丈目をぶちのめすためのデッキだ。
しかも時間をかけて傷ぶり、プライドを潰し
地獄の底に叩き落とせるようなデッキだ。
万丈目いわくドロップアウトボーイ、基十代が倒すだろうがな。

そんなことを考えているうちに到着した。
校長の話は無視。とにかく無視。
でもやってるうちにめんどくなったから仮病で抜け出そうとしたら
何か寒気がしたのでやっぱりやめた
いったいなんだったんだ。あの寒気は

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ神

さぼりは駄目じゃ、さぼりは
だがミスったのう
あのような失敗をしてしまうとはのう
時が来たらきやつに頼むかのう

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

入学式が終わりレッド寮に俺は来た
ちょうどよさそうじゃないか
これからの拠点に
接触を取っておくか主人公一味に

「おおーーい君」

「なんだああ」

「俺新入生の石崎遊輝っていうんだ
友達になってくれないか」

「いいぜ、それじゃあさ早速デュエルしようぜ」

本当にデュエルバカだな

「なんか失礼なこと言われた気がする」

「きのせいじゃないか（こいつ心読めたっけ）」

「それよりデュエｒ「ごめんそれは無理」ちぇ、なんでだよう」

「いま新しいデッキ作っててさ、それができたらデュエルしてやるからさ」

「わかった、だけど絶対だぞ」

あれこいつこんなに引き下がりやすい性格だっけま、いいや

「あ、そういえばそこのカイザーの弟は」

「なんでそれ知ってるんすか、あなたとは今はじめてあったのに」

「それは単純さ、俺は近いうちにカイザーに挑むそれだけだ」

俺はそれだけ言って部屋に向かった。確か二人部屋だけど一人だったけ
後ろでカイザーって何ソレオイシイノとか
あんな奴がお兄さんに勝てる訳ないっすとか聞こえた気がするけど無視
あ、よく考えたら俺って万丈目に呼ばれない可能性高くねえ

そう思ってた時期が僕にもありました
原作通り歓迎会、そして原作で十代に贈られたのとほぼ同じ内容の手紙いやビデオメール
そして行こうとしたとき十代と会い一緒に来ました。

どうせ途中でデュエル終わるはずだし

だがそうは問屋が卸さない
俺は昼間のうちに校長に許可を得たからな
そしてデュエル開始前
「十代受け取れ」
俺は2枚のカードを投げる
「このカードは？」
「お前のピンチを救うはずだ、デッキに入れてデュエルしてみろ」
「わかった、何だか知らないけどサンキューな」
「ドロップアウトボーイ、俺様をいつまでまたすきだ」
「もう済んだぜ、行くぞ万丈目」
「万丈目さんだ」
「「デュエル」」
原作と同じようにデュエルが進んでいく
そして、原作で死者蘇生を引いたところまできた
本来ならここでストップだが
校長がデュエルをこっそり観戦するという条件で許してくれた
「このカードは、遊輝
お前のカード使わせてもらうぜ

俺は魔法カードミラクルフュージョンを発動」

ここで引いたかさすが主人公流チートドロー
周りの観戦者がきれいってうるさいけど無視
そういえば校長どこで見てるんだろう。

「俺は墓地のＥ・ＨＥＲＯフレイムウイングマンとＥ・ＨＥＲＯスパークマンを除外し
新たなるＥ・ＨＥＲＯを召喚する
来い、Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フレア・ウイングマン」

「攻撃力２５００だと」

「十代そいつには攻撃力が上がる効果があるが
今はそんなの関係ないとどめを刺せ」

「物騒な言い方だな
いわれなくてもこれでとどめだ
シャイニンフ・フレア・ウイングマンで万丈目にダイレクトアタック
シャイニング・フレア・シュートおおぉぉ！」

「万丈目さんだあぁぁぁぁ」

次は俺か

「で、万丈目
俺とやるか。まけたばっかだけどな」

「今のはまぐれだ
俺が屑のオシリスレッドに負けるわけがない」

「ふーん
そうか、そんなに死にたいんだな
じゃあ少し、いやかーなーり頭冷やそうか」

某魔法少女と某緑色の電車ライダーのせりふをがったいさせたようなセリフだな

「ふざけるな、死ぬのは貴様だ」

「「デュエル」」

第3話　死者蘇生ではない切り札　ＶＳ万丈目　十代編（後書き）

次回をお楽しみに

次回　第４話　遊輝の新デッキ　ＶＳ万丈目　遊輝編

第４話　我流サイバー流　ＶＳ万丈目　遊輝編

Ｓｉｄｅ遊輝

「「デュエル」」

「先攻は俺様からだ
　俺はヘルソルジャーを攻撃表示で召喚
ターンエンドだ」

俺のターンか、だが

「俺のターンドロー　とその前に校長そろそろ出てきていいですよ」

「校長だって、どうゆうことだ貴様」

「俺たちも聞いてないぜ」

みんな驚いてる、それにしてもバカかこいつら

「それに関しては私から説明します。
実は昼……

回想　Ｓｉｄｅ校長

「夜、施設を借りたいと？」

「はい、不穏な噂を聞きまして」

「噂とゆうのは？」

「オシリスレッドの私たちが気に入らない一部のオベリスクブルーが私たちにデュエルを仕掛けようというものです。噂レベルですが気になるので本当にそうゆうことが起きた時貸してもらえるようにしてもらいたいのですが」

「引き下がってはもらえなそうですねわかりました、ただし二つ条件があります。」

「ありがとうございますそれでその条件とはなんですか？」

「一つ目はそのような事態になったとき連絡を必ずください二つ目はデュエルを観戦させてください」

「へ？連絡はともかく、観戦ですか？」

「はい、君の実力には目を見張るものがあると聞いていまして気になっていたのですよ。観戦していいですな（わくわく）」

ああ、楽しみだもし本当にあったらどのような素晴らしいデュエルが見れるのだろうか

「わかりましたただ私が呼ぶまで姿を現さないでくださいありがとうございます

では」

「ちょＴ」

回想終了
Ｓｉｄｅ遊輝

「とゆう訳です」

「校長先生がここにいる訳は分かったけど、でも遊輝
どうして最初は隠してんだ」

「なんとなく
あえていうなら見ての通りです」

「見ての通りって、あ」

「なぜ、ここに校長が」

万丈目は放心状態か
ま、いいやるか

「じゃ今度こそ俺のターンドロー
サイバー・ラーヴァを攻撃表示で召喚
そのあと手札を４枚セットしターンエンド」

「サイバーモンスターだと」

「どうして、遊輝が兄さんと同じサ」

「翔君、兄さんと同じって」

「あのようなサイバーモンスターは見たことがない
しかも彼のようなサイバー流の生徒は見たことがない」

上記のような声がしたので一言俺は答えた

「我流ですから♪」

いろいろ驚く声も聞こえるが無視

「だがそんな雑魚壁にもならん
攻撃力４００を攻撃表示だとなめるな
ヘルソルジャーで雑魚に攻撃
ヘルアタック」

「トラップ発動サイバー・サモン・ブラスターを2枚
さらにトラップ発動サイバー・シャドー・ガードナー、王宮のしきたり」

「さらに機械族モンスターが特殊召喚されたので2枚のサイバー・サモン・ブラスターの効果で６００ダメージ」

「っく、だが攻撃は通る」

馬鹿め

「破壊されたラーヴァの効果でダメージは受けない
さらにデッキのラーヴァを特殊召喚

６００ダメージもう一度食らいやがれ」

「っく、カードを1枚伏せターンエンドだ」

主人公補正でも入ったか

「命削りの宝札発動
効果で手札が5枚になるようにドロー
永続魔法前線基地を発動
効果で手札のYドラゴンヘッドを特殊召喚
サイバー・サモン・ブラスターの効果で６００ダメージ
残りは２２００か
次は？ヘッドキャノンを召喚
？ヘッドキャノンとYドラゴンヘッドを除外し？Yドラゴン・キャノンを
特殊召喚
もういっちょ６００ダメージ
ターンエンド」

っくっくっく
悔しそうな顔だ
何より校長の前で負けそうで絶望しｔ
危ない、危ない、危うく暗黒面に落ちそうだった

「お、おれのターンドロー
「その瞬間罠発動」
っく残り１０００
だが俺の勝ちだ
大嵐発動」

俺の王宮のしきたりと前線基地が破壊された
問題ないけど

「さらに、カードを2枚伏せターンエンド」

「俺のターンドロー
手札の強欲な壺発動
２枚ドロー
さらに次元誘爆を発動
？Ｙをデッキに戻しＹドラゴン・ヘッドと？・ヘッド・キャノン
を特殊召喚
６００ダメージ
まあ、出す必要はねえがＺメタル・キャタピラーを召喚
３体合体、ＸＹＺドラゴン・キャノンを特殊召喚
はい終わり
じゃまた、オ・ルボワール（ごきげんよう）」

そういって某怪盗のように去って行った

後日談だが、俺がレッドなんぞに2敗もといっていただしい
また、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆してやるか
基、嫌がらせデッキでのデュエルだが

第４話　我流サイバー流　ＶＳ万丈目　遊輝編（後書き）

今週は１話投稿です

第5話　主人公魔改造計画

Ｓｉｄｅ遊輝

「おおい十代いるか」

万丈目とのデュエルから数日後
俺は十代たちの部屋を訪ねた

「なんだ遊輝か、デュエルするのか
するなら早くしようぜ」

「アニキー、アニキみたいなデュエルバカはそうそういないっすよおで、遊輝君何しに来たんすか」

「おお、遊輝じゃないか、どうしたんだ今日は」

「今日はちょっと十代に話があってな」

俺はあのデュエル以降、十代たちと仲良くなった
いろいろと話しているうちに翔や隼人とも仲良くなっていた

「俺に？
やっぱデュエルか　するなら早くやろうぜ」

「いやいやそれもあるんだがほかにもあるんだよ
ちょっと部屋に来てくれないか」

「わかった、じゃその用事がおわったらデュエルしようぜ」

「わかった
じゃあ行こうぜ」

話が終わったので俺と十代は俺の部屋まで行く

「じゃあさっそくなんだが
お前のデッキのことだ」

「俺のデッキ？
それがどうしたんだ」

「いやちょっとな
お前最近強敵に勝ってはいるんだがかなりギリギリじゃないか
運よくいいタイミングでデッキが答えてカードが来てくれて
今は勝っているけどいつか絶対に勝たなくてはいけないデュエルを
するときも来るかもしれない
その時に備えてデッキの強化を一緒にしないかって話だよ
カードは俺のやるからさ」

「そうゆうことか
でも俺は今のままで十分だと思うんだけどな」

「おいおい
いつまでそのチートドローが続くのかわからないんだぞ」

「チートドローってなんだよ」

「それは置いといて
じゃあよっと」

「なんだそのでっかいケース
もしかしてそのケースの中身全部カードか？」

「その通り
これを使って十代のデッキをまか……ゲフンゲフン改造するぞ」

「なんか嫌なこと言いそうになってなかったか」

「気のせいだ
早速やるぞ」

危ない、危ない

「なんか言われた気がするんだけどなあ
まあ、遊輝がそこまで言うならやるか」

助かったあ

「じゃ、やるか
じゃあまずデッキを見せてくれ」

「わかった
これだけどどうだ」

「うーん
スタンダートなＥ・ＨＥＲＯデッキだな
だけどドロー系のカードとかいろいろ足りないな
例えば天よりの宝札これを入れるのはどうだ」

「天よりの宝札、すげえいい効果じゃねえか
サンキュー
ところでこのヒーローなんだ
エアーマン？見たことないけど効果はすごくつええな」

「デッキサーチ系もお前のデッキには足りないからなやるぜ
あとこれなんてどうだ
フォレストマン　デッキと墓地から毎ターン融合をサーチできるカードだ
おまけに守備力も高い」

「すげえ
こんなＥ・ＨＥＲＯがいたのか」

とこんな感じでデッキ改造が進んでいった

「ありがとな遊輝
お前のおかげでいいデッキが作れそうだぜ」

「なあに礼なんていらないさ
それより最後にこれ
最強クラスの融合で出せるＥ・ＨＥＲＯだ
出すのも簡単だしやるよ」

「え、いいのか
と言うかこいつら全部効果がえげつないうえに召喚が簡単じゃねえか
ほんとサンキューな」

「だから礼はいらないって
また今度デュエルしようぜ

お前のデッキ改造が終わったらな」

バタン
ドアを閉めた

「さあてこれからどうなるかな」

第６話　クロノスの策略　ＶＳ明日香　十代編（前書き）

魔改造十代ＶＳただの明日香

第6話　クロノスの策略　ＶＳ明日香　十代編

Ｓｉｄｅクロノス

シニョーラ明日香が質問にすらすら答えてるーーの
それに比べてシニョール翔はダメダメですーーの
やっぱりオシリスレッドはダメダメですーーの
それにしてもドロップアウトボーーイは生意気ですーの
よくもわたしに恥を書かせてくれました～のね
このままで済むとおもったら大間違いですーーの
口紅塗ってキスマークつけてこれで出来上がりーーの

「ぬほほほほ」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ翔

「初めて会った時からあなたのことが好きでした
今夜女子寮の裏で待ってます、天上院明日香」

やったああむふふふふふふ

夜

「まあ明日香様からのラブレターですって」

「うん、えへへ、ねえ」

「ばっかね、オベリスクブルーの女王明日香さんが
あんたなんかにラブレターなんて書くわけないでしょう」

「嘘じゃないよ、今夜女子寮の裏で待ってますって僕のロッカーに
ほら」

ガサガサと出して見せたら変な取り巻きにとられた

「私こんな汚い字書かないわ」

「オシリスレッドの殿方はそんなことすらわからないんですね」

「え、じゃいったい誰が」

「あらこれ宛名が遊城十代になっているわ」

「え、え、嘘お
ほんとだあぁ」

ええ、アニキあてえ

「偽のラブレターにつられて」
「のこのこやってくるなんて」
「おまけに間違いだし」

「おちこみそお」

「自業自得よ」

「ねえ」

「このことは学校側に報告しましょう」
「お風呂を除くなんて破廉恥極まりないわ」
「だからのぞいてないって」
「みなさんおそろいで何の騒ぎ」
「ああ」
おもい
「いえ、なんでもありませんわ
おさわがせして申し訳ありません」
「そう、ではみなさん早く部屋に戻っておやすみなさい」
「明日香さん」
「わたしにちょっと考えがあるの
誰かが遊城十代を痴漢に仕立てあげるために私の名をかたって呼び出そうとしたのね
」
Ｓｉｄｅａｕｔｏ
Ｓｉｄｅ明日香
面白いじゃない

いづれあいつとは一戦交えなければと思っていたのよ
それに同じ遊輝という名を持つあいつとも

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

丸藤翔は預かっているか

「十代急ぐぞ」

「ああ」

十代と俺は女子寮に言った

話を聞く限りクロノスが原作同様やっただしい
で、俺と十代が明日香とデュエルして二人とも買ったら解放する
か、やるか
とりあえず十代がさきにデュエルだ

船で十代と明日香が湖の真ん中に行った

「いくわよ」

「おおし、来い」

「「デュエル」」

「わたしのターンドロー
エトワールサイバー召喚」

痴女が現れた

「さらにリバースカードを伏せターンエンドよ」

「次は俺のターンだドロー
俺はＥ・ＨＥＲＯプリズマーを召喚
Ｅ・ＨＥＲＯプリズマーの効果発動
デッキのバブルマンを墓地に送る
さらに融合を発動
プリズマーと手札のクレイマンを融合
現れよＥ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」

あいつの効果いかに生かす

「さらにＲ－ライトジャスティス発動
その伏せカードを破壊するぜ」

「ドゥーブルパッセが」

「更にミラクル・フュージョンを発動
墓地のバブルマンとクレイマンを融合
現れよＥ・ＨＥＲＯガイア」

もう明日香の負けか
原作よりはるかにあっさり
そしてあっとゆう間にけたがついたな

「ガイアにはこのカードが融合召喚に成功した時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して

発動する。
このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスター1体の攻撃力を半分にし、
このカードの攻撃力はその数値分アップする。とゆう効果がある
十代、新しいカードのまわりはどうだ」

「すげえよく回るぜ
遊輝サンキューな」

「な、遊輝のカード
あの見たことがないカードばっかだと思ったらあなたのだったのね」

「そうだ、それよりお前の負けだ」

「おっとそうだったエトワール・サイバーの攻撃力を半分にする
その後６００ポイント攻撃力をアップさせるぜ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ　２５００
Ｅ・ＨＥＲＯガイア　２２００＋６００＝２８００

エトワールサイバー　１２００÷２＝６００

６００－２５００－２８００＝－４７００
４０００－４７００＝－７００

後半1ターンキルか

「やったな十代
次は俺が殺る」

「おいおかしな響きがしたぞ」

「きのせいだ
まってろ、すぐその痴女から助けてみせる」

「誰が痴女よ
ふざけないで」

「あんな露出魔みたいなモンスター使っておいて何言ってるんだ」

「っく」

「アニキ助かったす
ゆうきもがんばってくれっす」

「もちろんだ
さあやるぞ、痴女」

「だから、誰が痴女よ」

「だからお前だ
もう一回言わせるきか
この鬼畜女、あんな露出魔みたいなモンスター使っておいて何言ってるんだ」

「あれがサイバーガールよ
ああゆう見た目なんだからしょうがないでしょ」

「言い訳はいいわけ
デュエルだ痴女」

「いい加減にしなさい
痴女言うな」

「まあいいや
このとりやりも飽きてきたし」

「「デュエル」」

第6話　クロノスの策略　ＶＳ明日香　十代編（後書き）

次回　遊輝の攻め
使用デッキは戦士族中心かアンティークフォートレスです
どっちがいいか感想に書いてくれたら多かった方を使います

第7話　戦士対サイバー・ガール　VS明日香　遊輝編

「「デュエル」」

さて、この痴女どう滅ぼすか
ううん、よしリスペクトデュエル
あれで行こうかな
いや、めんどくさいし
速攻でつぶすか

「先攻は俺がもらう
俺のターンドロー（成程、この手札なら3ターンかな）
モンスターをセット
リバースカードを2枚セット
ターンエンド」

「私のターン、ドロー
（ここは一気につぶす）
融合発動
手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合し
サイバー・ブレイダーを召喚する！」

赤と灰色の痴女
なんだよ、この痴女使い
もしかしなくても、おもてではあんな風にふるまってるけど
露出狂とかやだなあなんでそんなやつとデュエルを」

「失礼な
私は露出狂じゃない」

「心を読まれた？」

「遊輝、途中から声に出てたぞ」

「あ、そうなんだ
どうでもいいけど」

「まあいいわ
サイバー・ブレイダーで伏せモンスターを攻撃」

馬鹿め、馬鹿め、馬鹿め
なんでそんな単純かね

「な、ビッグ・シールド・ガードナーですって
っく、５００ダメージ」

そう、ビッグ・シールド・ガードナーの守備力は２６００
サイバー・ブレーダーの攻撃力は２１００
よって５００の反射ダメージ

「っく、私はカードを2枚伏せターンエンド」

はい終わり

「俺のターンドロー
フォトン・ケルベロスを召喚
こいつの効果によってお前はこのターントラップを発動できない
俺もだけど」

「なんですって」

「そして、速攻召喚発動
ビッグ・シールド・ガードナーを生贄にユーフォロイドを召喚」

「ユーフォロイド、僕と同じロイド系のカード？」

「さらに、俺は超融合を発動
このカードの効果は手札を１枚捨てる。
自分または相手フィールド上から融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、
その融合モンスター１体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。
だ」

「それってどうゆうこと」

「こうゆうことだ
俺は自分フィールドのユーフォロイドと痴女のフィールドのサイバー・ブレイダーを融合
こい、ユーフォロイド・ファイター」

「な、私のサイバー・ブレイダーが
あと痴女っていうな」

「ユーフォロイド・ファイターの攻撃力と守備力は
素材にしたモンスターの合計だ
つまり２１００＋１２００で３３００」

「「「３３００だって（ですって）」」」

「はい終わり
ユーフォロイド・ファイターとフォトン・ケルベロスでダイレクトアタック」

３５００－３３００－１３００＝－１１００

「じゃあ、翔は返してもらうぜ
十代さきに帰るから、早く帰れよ」

「お、おう」

次はどんなデッキでデュエルしようかな

帰宅後、夢の中

「久しぶりじゃな」

「あ、神（笑）さんじゃないですか
何のようですか」

「（笑）はいら「早く要件言え」わかったから殺気を向けるのやめてくれんかの
では、いうが、その世界に紛れ込んだあるカードを手に入れてほしいのじゃ
見つけた後はどうするかはそっちの判断に任せる
自分で所持するのもいいし、わしにわたすのも構わん」

「分かりました

で、そのカードは？」

「光と闇の竜（ライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴン）じゃ
精霊が宿っている
そのカードの回収の理由はその精霊の力じゃ
力が強すぎてのお、マアトの羽と言えば分るかの」

「そうゆうことですか
光と闇の竜（ライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴン）その回収理由
は大体わかりました
では、そのカードは私があずかっていいんですね」

「わかった、ではな
そのカードは漫画で埋まっていたところにいる
頼むぞ」

次の日

俺は家を5時に出て光と闇の竜（ライト＆ａｍｐ；ダークネスドラ
ゴン）の回収に向かった

「たしかここっと」

掘ってみると、やっぱりあった

「ギャアアアアアオ」

光と闇の竜（ライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴン）の精霊が現れ
た、しかもなぜか暴れているし
わ、急に人型に

え、ブラック・ジャック？
縫い目ないけどブラック・ジャック？

「デュエルゥゥゥゥ」

え、デュエル？
え、もしかしてデュエルで勝たないといけないの？
まあ、勝てるだろうけどさ

「分かったデュエルだな
やるから落着け」

「デュエルゥゥゥゥゥ」「デュエル」

第7話　戦士対サイバー・ガール　ＶＳ明日香　遊輝編（後書き）

まさかのデュエル
光と闇の龍（ライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴン）ＶＳ遊輝

第8話　ドラゴン軍団との戦い　ＶＳ光と闇の竜（ライト&ａｍｐ;ダークネス）

今日は漫画のみで出たカードがかなりでます

第8話　ドラゴン軍団との戦い　VS光と闇の竜（ライト&ダークネス・ドラゴン）

Ｓｉｄｅ遊輝

「デュエルゥゥゥゥ」「デュエル」

「俺のターンから行くぜ
俺はＥ・ＨＥＲＯフォレストマンを守備表示で召喚
カードを2枚伏せてターンエンド」

「ワレ　タァァァァン
マホウ　ハツドォォォォ　コウリュウノキラメキ
テフダ　ドラゴン　２マイ　ステル
デッキ　ヒカリ　ドラゴン　ショウカァァァァン」

な、あいつはライトエンド・ドラゴン
確か、あいつはシンクロだったはず
そうか、漫画では効果モンスターだった
とゆうことは漫画万丈目デッキか

「レッド・ワイアーム　ショウカァァァァン
ライトエンド・ドラゴン　コウカ　ハツドォォォォ
コウシュ　５００サゲ　アイテモンスター　コウシュ　１５００サガル
ライトニングギャラクティカァァァァ」

っく、フォレストマンが

「レッド・ワイアーム　フォレストマン　コウゲキ」

「ヒーローバリア発動
効果により戦闘を無効化」

「ライトエンド・ドラゴン　コウゲキ
シャイニングブレスゥゥゥウ」

「ヒーロー・シグナル発動
フォレストマンは破壊されるが効果によりクレイマンを守備表示で
特殊召喚」

「カード　１マイ　セットォォォォ
ターンエンドォォォォ」

「俺のターンドロー
俺は強欲な壺を発動、２枚ドロー
俺は融合を発動
手札のスパークマンとフィールドのクレイマンを融合
来い、Ｅ・ＨＥＲＯサンダー・ジャイアント
手札を１枚捨てレッド・ワイアームを破壊」

「レッド・ワイアーム　ハカイ　プレイヤー　５００ダメージィィィィ」

「っく、ライトエンド・ドラゴンにサンダージャイアントで攻撃」

「トラップ　ハツドォォォォ
リュウノキリン　ジブンフィールド　ドラゴン　テフダ　モドス
ドウレベル　ドラゴン　テフダ　ショウカァァァァン
コイ　ダークエンド・ドラゴン」

「っく、攻撃をやめ、カードを2枚ターンエンド」

「ワレ　ターン　ドロー
ダークエンド・ドラゴン　コウカ　ハツドォォォォ
コウシュ　５００サゲ　サンダージャイアント　ハカイ
ダーククライシスゥゥゥゥ」

サンダージャイアントが

「サラニ　ゴウヨクナツボ　ハツドウ　２マイ　ドロー
マホウ　ハツドォォォォ　コウリュウノキラメキ
テフダ　ドラゴン　２マイ　ステル
デッキ　ヒカリ　ドラゴン　ショウカァァァァン」

まずい　ライトとダークが出た

「ダークエンド・ドラゴン　コウゲキ
ダークパプティズムゥゥゥゥ」

「ぐわぁぁぁぁ」

っく
４０００－２１００で残り１９００か
マズイ

「コレデ　トドメダァァァァ
ライトエンド・ドラゴン　コウゲキィィィィ
シャイニングブレスゥゥゥゥ」

「速攻魔法発動
ライトエンド・ドラゴンの元々の攻撃力をエンドフェイズ時まで半分になる。」

「ソレデモ　コウゲキ　トオル
ノコッタ　ライフ　ワズカ
オマエ　ナニ　デキル」

１９００－２６００÷２＝６００

「そんなことわからないぜ
俺のターンドロー
俺は命削りの宝札発動
効果で自分の手札が５枚になるよう、自分のデッキからカードをドローする」

「コノ　タイミング　ドロー？」

「ライトニングボルテックス発動
手札を１枚捨て、お前の場のモンスターをすべて破壊
Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン召喚
ミラクルフュージョンを発動、フィールドのフェザーマンと墓地のバーストレディを融合
来い、フレイム・ウィングマン
更に２枚目のミラクルヒュージョンを発動
フレイム・ウィングマンと墓地のスパークマンを融合
来い、シャイニング・フレア・ウィングマン
こいつは、攻撃力が、自分の墓地に存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚につき３００ポイントアップする。
墓地には３体のＥ・ＨＥＲＯ

よって攻撃力は３４００
更に伏せていた装備魔法発動
団結の力をシャイニング・フレア・ウィングマンに装備
これでシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は４２００
いけシャイニング・フレア・ウィングマン
シャイニング・シュート」

「ギャアァァァァ」

４０００－４２００＝－２００

っく、危なかった
それより、ブラックジャックが倒れた
と思ったらカードの中に入って行った
よし、持って帰るか

その日の放課後
光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）が起き俺はいきさつを話した
俺の正体
ここがお前の世界とは異世界だとゆうこと
お前の主は性格が全然違うこと
そして、この世界の遊城十代やハネクリボーのこと
そして

「お主が今日から我のマスターということでいいのだな」

「ああ、これからよろしく」

「ああ、よろしく頼むぞ新しきマスター

この世界のマスターのしもべになるのは我には無理だ」

「分かっている」

「では、人間体になっておこう
ドラゴンのまま、小さくなることもできるがマスターはどちらがいい」

「ドラゴンのまま小さくなっていてくれ」

「分かった、マスター」

そうゆうと
光と闇の竜（ライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴン）はそのままハネクリボーほどの大きさにしたようになった

「じゃあ、行くかライネス」

「ああ、マスター」

第8話　ドラゴン軍団との戦い　VS光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）

光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）の名前はライネスです。
これからのデッキでたまに出てきます。
感想待ってます。
それと出してほしい精霊・カードがあったら言ってください。
できる限り善処します。
これからも精霊はたまに増えます。
ここからはネタバレになるので少し間をあけます。

セブンスターズ編で最低3体精霊を増やします。

第9話　万丈目の逆襲　十代ＶＳ万丈目

Ｓｉｄｅ遊輝

「翔、十代は？」

「起きなかったからしょうがなくおいてきたっす」

「そうなんだなあ
俺たちも遅れそうだったからおいてきたんだなあ」

「そうなのか」

今日は月一テストの日
原作通りだと今頃

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ十代

「おおおぉ
遅刻だ、遅刻だ、遅刻だ」

「ううん」

「遅刻だ、遅刻だ、遅刻だ」

あの人

「ああ、俺こうゆうのに弱いんだよなあ」

「手伝うぜおばさん」

「遅刻しちゃうよ、今日はテストなんだろ」

「遅刻がなんだよ、困っているおばさんを見過ごせないぜ」

あ、あぶねえ

「おおおお、坊や」

「先の事なら何とかなるぜ、俺に任せろな、ははははは」

「すまないねえ」

そんなことねえぜ
とりあえず今はおばさんを手伝おう

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝
と、こんな感じだな
じゃあテストやるか

……

なんだこの問題
簡単すぎる

1問目　この学校のクラス
　　オシリスレッド・ラーイエロー・オベリスクブルー
　　この元となったカードたちのことを何という？

答えは三幻神だろ
ついでに言うならオシリスの天空龍・ラーの翼神龍・オベリスクの巨神兵だろ

2問目　デュエルには特殊な勝利条件をもたらすカードがあります
　　それを一つ答えなさい

答えは封印されしエクゾディア・ウィジャ板・終焉のカウントダウンとかだろ
封印されしエクゾディアはエクゾディアパーツがすべて手札にそろうことが条件
ウィジャ板は死のメッセージがすべてフィールドにそろうことが条件
終焉のカウントダウンは20ターン経過が条件
と有名だしなめてんのか

3問目　次のうちドラゴン族モンスターを選びなさい
　　Aマスクド・ドラゴン
　　Bクリボー
　　Cワタボン

いやいやいや
ドラゴンってもはや名前に入ってるし
どう考えてもAだろ

４問目　ブラックマジシャン・ガールは誰のデッキにしか入っていない？

一応俺も持っているけど
武藤遊戯だよなあ
もしかしてこの程度の問題なのかデュエルアカデミアの問題って

とこんな感じで問題を解いていったわけだ
そうすると
原作通り十代が入ってきて
原作通り万丈目と言い合いになって
原作通り空気と痴女にみられて
原作通りパックを買いに行って
原作通りクロノスが新パックを買い占めて
原作通りトメさんに翔と十代がパックもらって
違ったとこといえば遊輝、つまり俺も十代に聞かれて新しいのはいらないって答えたことくらいかな

そんでしばらく時間が飛んで

「えええ
なんで万丈目と俺がデュエルを」

「入学試験であれほどの成績を残した君と
オシリスレッドの生徒とはつりあいがとれないーノです
そこでシニョール万丈目こそが君の相手にふさわしいと判断いたしましたーノです
もちろん君が勝てばラーイエローに昇格するってことになりまーすですがいかがですーノ遊城十代君

この申し出受ける気になりますーの」

「で、本音は」

「それはシニョール万丈目にドロップアウトボーって何を言わせようとしているーノですシニョール石崎」

「っち」

「いいぜ
俺、いろんな奴とデュエルをやってみたい
どんな奴からの挑戦でもうけたいんだ！！」

「ならば、シニョール万丈目とのデュエルを受けるーノですね」

「よしこのまえのはまぐれだと証明してやる」

「「デュエル！！」」

「行くぜ万丈目！！」

「万丈目さんだ」

「俺の先行ドロー」

（クリクリー）

「ハネクリボーか
（最初から来てくれるとは心強いぜ

なら）
Ｅ・ＨＥＲＯクレイマンを守備表示で召喚
カードを2枚伏せるターンエンドだぜ」

「雑魚ぞろいの駄目ヒーローデッキめ
お前のもろさを見せてやる
俺のターンドロー」

ああ、オジャ万丈目
調子に乗ってる
まいっか、どうせ一夜の夢ほどはかない幻想なんだから

「（いきなりクロノス教頭からもらったレアカード）
俺はマジックカード打ち出の小槌を発動」

「何」

「このカードと手札の中のいらないカードをデッキに戻しシャッフルし新たにその枚数分ドローする
そして俺は」

「え、４枚もカードを取り換えるの？」

「自分の手札からいらないカードを捨て新たにカードを入れ替えることができれば
手札に好カードが入る確実が高くなる」

今のセリフは「え、４枚も……」が翔でその下が空気だ

「しかも打ち出の小槌は使い捨てのカードではない

何度もデッキに戻ることにより何度も俺の手中に入る
再び打ち出の小槌を発動
打ち出の小槌ともう1枚のカードをデッキに戻し再び2枚をドローする
いでよV(ヴィ)ータイガー・ジェット攻撃表示で召喚」

「更に手札から永続魔法前線基地を発動
ターンごとに一度手札からレベル4以下のモンスターを一体特殊召喚することができる
このターンW(ダブル)ーウィング・カタパルトを攻撃表示で特殊召喚
いでよW(ダブル)ーウィング・カタパルトそしてV(ヴィ)ータイガー・ジェットと融合」

うわ、名にこの旧型ロボットアニメ的合体
ふるいわあ

お、十代
こんなの仕掛けてたのかあいつもずいぶんガチデッキに近くなったもんだな

「俺のV(ヴィダブル)ーW(ダブル)ータイガー・カタパルトがっく、カードを1枚伏せてターンエンド」

あちこちから万丈目真面目にやれとかヤジが飛んでる

「俺のターンドロー
万丈目、また勝たせてもらうぜ

「V(ヴィダブル)ーW(ダブル)ータイガー・カタ「その瞬間トラップ発動奈落の落とし穴、そのモンスター除外してもらうぜ」なんだと」

大嵐発動、さらに苦渋の選択発動
俺が選ぶのはこの5枚だ」

E・HERO　スパークマン2枚とE・HERO　フェザーマン2枚
それにE・HERO　バーストレディ1枚

「E・HERO　バーストレディを手札に加えろ」

「さらに強欲なツボを発動2枚ドロー
天使の施し発動3枚ドロー手札を2枚捨てる
ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO　バーストレディ
とE・HERO　フェザーマンを除外しE・HERO（エレメンタルヒーロー）　フレイム・
ウィングマンを召喚
更にミラクルフュージョンを発動E・HERO（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィン
グマンとE・HERO　スパークマンを融合
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマンを召喚
効果により俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカー
ド1枚につき攻撃力を300ポイントアップ
そして墓地には3枚のE・HERO
攻撃力900アップだ」

「「「「「「「「「攻撃力3400！！！」」」」」」」」」

うるさい
その程度で騒ぎやがって

「そして手札からハネクリボーを召喚」

「「「「「「「「「かわいいーーーー！！」」」」」」」」」

うるさい

「命削りの宝札を発動
手札が5枚になるようにドロー
進化(しんか)する翼(つばさ)を発動
ハネクリボーと手札2枚を墓地に送り
ハネクリボーをハネクリボー　LV(レベル)10に進化
更に墓地に送ったカードにE・HEROと名のついたカードが1枚いたのでE・HERO(エレメンタルヒーロー)　シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は3700」

「「「「「「「「「「「「「「「攻撃力3700!!!」」」」」」」」」」」」」」」

「E・HERO(エレメンタルヒーロー)　シャイニング・フレア・ウィングマンで攻撃
シャイニング・シュートオオォォォォーーーーー」

「うわああぁぁぁぁーーー」

4000−3700＝300

「いくぜ相棒
ハネクリボー　LV(レベル)10で攻撃」

「うわあああ」

300−300＝0

「ガッチャ、楽しいデュエルだったぜ
あと、校長先生
俺はオシリスレッドが好きなんだ
ラーイエローにはならないぜ」

「そうですか
分かりました、では改めて勝者遊城十代」

「「「「「うおおおおおおおおおお」」」」」

で、十代戦が終わったわけだ
ちなみに俺はモブキャラと戦って勝ったぜ
もちろん圧勝
って俺は誰に話しているんだ？

第１０話　闇のデュエル（笑）　十代ＶＳタイタン

Ｓｉｄｅ遊輝

これはある男の話だ

この男は学生だった

いつものように学校に行った
いつものように授業を受けた

しかし用事があって帰るのが遅れてしまった

その男はしょうがなくいつもと違う道を通ることにした

それは公園の中を突っ切る道だ
その公園に入ったとき何かが変わった

周りに何もないはずなのに何か重圧感が

周りで風が吹いてなく

季節は夏なのに背筋に寒気が

何よりも見えてる光景がおかしい

「いったいなんなんだ、これは
なんなんだよ」

男が見たものそれは

いくつもの死体の山と
それを上から見下している男

男は驚いた
そして男が顔を向けた時更に驚いた
だが驚いたのは一瞬
すぐに気絶をしてしまった

男が見た男の顔は

男自身だった

あとで分かった話だが
その公園は昔の死刑場の跡地の上に作られたらしい
そしてそこで死刑執行を男の先祖がしていたそうだ

だからかもしれない
あんな死体の山を見たのは

「で、どうしてそんなに震えている
この程度の話の一つや二つ、誰でも知っているだろう」

今俺らがしているのは
ちょっとしたゲームだ
カードの束からカードを引いて
そのカードのモンスターのレベルと同じだけ怖い話をするというもの
あれら、タイタン戦前のヤツだ
え、なんでそんなこと覚えているって
転生者歴が長いんだから記憶もあいまいになってるんじゃないかだって

まあ普通はな
実はライネスの時の話だ
ライネスっていうのはライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴンの俺の
相棒の精霊だ
この小説内での出番はまだろくにないがいつも仲良くしている
この世界の十代やハネクリボーとも仲良くなったみたいだ
まあ、そのことは置いておいて
あの時ライネスがこの世界に来てしまった理由が原因だ
どうやらあの神（笑）がやらかしただしい
それで俺はさらなる褒美の一つや二つあってもいいんじゃないかと
思ったわけだ
そして髪（誤字に非ず）の近くにいた天使たちも俺の意見に納得し
てくれて
嫌がる紙（誤字に非ず）を調ｋ、じゃなくて肉体Ｇ、じゃなくてご
うｍ、じゃなくてＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしたわけだ
具体的に言うとアイアンメイデンとか電気椅子とかギザギザの板の
上で正座させて石を乗っけていくやつとか火あぶりとか拷問車輪と
か運命の輪とか人間サンドバックとかｅｔｃ
ま、天使さんの方が思い切りやってたけど
ラジエルさんとか最後に行くときはもうどこぞの悪役見たく
わあああああは、は、は、はとかそんな感じで馬鹿笑いしていたわけで
ほんとストレスたまっていたんだなラジエルさん
ご愁傷様ですって思ったりして
少し脱線したけど
それで新たな能力をもらったわけだ
それは転生前のものを含むすべての記憶の絶対記憶
今後一瞬でも見たものを完全に覚える瞬間記憶能力
いくら覚えても要領に余りができる圧倒的な脳の容量
そして覚えたものの中から必要な記憶を引き出す星の本棚の縮小版
みたいな能力

これらの能力をもらった
今まで話さなかったのは使う機会がなかった
それだけだ
ちなみにこんなにもらえたのは天使さんのおかげ
具体的には言わない
バイ●ハ〇ー●もめじゃない位グロかった
言えるのはそれだけだ

「そんなことないっすよ
その話マジで怖いっす
むやみに人に話さない方がいいっすよ遊輝君
呪われるっス」

「そうなんだなあ
その話はやばいんだなあ」

「ああ、さすがの俺もビビったぜ」

「そうか、今考えたんだが」

「「「は!?」」」

とそんな話をしていると

「おやおや、なんだか楽しそうなことをしてるようですにゃー?」

出た、大徳寺基アムナエル
今思えばテレビでなんでこんな都合がいい時に出てきたのか不思議に思う

「どれどれー？　っと……これはどういうルールなんですかにゃー？」

「えっと、山の中から一枚引いて、そのモンスターカードのレベルに応じた怪談をするんです。」

と、いつの間にか翔が説明をしていた

「じゃあ私も――にゃ？」

「「「「おおっ！？」」」」

レベル１２、《Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）》を引き

原作通り廃寮の話を先生がし

原作通り俺がいることを除けば廃寮に行くことになった

時は流れ

次の日の夜

「うおおおぉぉ、すっげえ……」

「ひぃ……アニキぃ、やめとこうよ探検なんて……もし呪われちゃったりしたらどうするのさ！」

「そ、そうなんだな十代。や、やめておいたほうが、い、いいと、思うんだな」

すると痴女が来た

「あ、痴女だ」

「誰が痴女よ
あなたたちは何をしているの
この廃寮は立ち入り禁止よ？」

「あ、アニキ、立ち入り禁止だって。じゃあ本当にやめといたほうがいいよ～……」

「俺はどっちでもいいと思うけどな」

「何言ってるんすか
立ち入り禁止っすよ」

「そうなんだなあ
怖いのは嫌なんだなあ
それに立ち入り禁止だしやっぱり行くべきじゃないと思うんだなあ」

「別にいいじゃないか
犯罪はばれなきゃ成立しないって言葉もあるし」

「「それは犯罪者の理屈っす（理屈なんだなあ）」」

と、俺らが話していると

「じゃあ明日香は、そんな立ち入り禁止の寮の前で何してたんだよ」

「私は……」

「兄が、ここで行方不明になったの
いつか帰ってくるんじゃないかって……だから、こうして花を飾

ってるの」

「行方不明だって……！？」

「それなら、こうしよう。俺たちは、その手がかりを探すために、あの廃寮へ行く。
遊びじゃなく、捜索なら立ち入り禁止の場所に入ったって、そう文句も出てこないと思うけど……？」

「ダメよ。クロノス先生がこのことを知ったら、目の仇にされてる十代は、
きっと何らかの処分を喰らうことになるわ」

「……よく言うじゃないか。『バレなきゃ犯罪は成立しない』って」

「アニキも！？」

と話しているとと
原作通り明日香があきらめた
原作通り廃寮に入る
原作通り１０ＪＯＩＮと書かれた天上院吹雪の写真を見つける
原作通りエトワール・サイバーのカードを見つける
原作通りタイタンとデュエルする場所に行った
原作通り十代とタイタンがデュエルすることになった
んだが
今の十代ならタイタンなんて瞬殺だろう

「「デュエル」」

「先手を取らせてもらおう、ドロー
私はインフェルノクインデーモンを攻撃表示で召喚」

「デーモンデッキか」

「このカードがフィールドに存在するとき
デーモンと名のついたモンスター一体の攻撃力を１０００ポイント
アップする」

「え」

「ってことは」

デーモンがうなりをあげ攻撃力を上げる

「確かにデーモンデッキは強力なデッキ
だが場のモンスターを維持するためにスタンバイフェイズごとにラ
イフを払い続けるというでっかい代償がつくぜ」

十代、それはフラグだ
まあ、今の十代には関係ないか

「ふっふっふ、代償だと？
そんなものは必要ないのだよ、このカードの前ではな
フィールド魔法発動」

まぶしいな
演出はもうちょっと考えてくれ

「なんだ？」

いい趣味してるな
このフィールド魔法
翔たちはうろたえてるな

「さしずめ地獄の一丁目とでも言っておこうか
私はフィールド魔法　万魔殿（パンディモニウム）ー悪魔の巣窟ーを発動した」

「パンディモニウム？」

「そうこのカードにより
デーモンデッキを維持するコストは発生せず
デーモンと名のついたモンスターは戦闘以外で破壊されたとき
転生する能力を得るのだよ
さあ、お前のターンだ
おっとこの娘が気になるようならお前の目に入らぬようにしてやる」

赤い骨のようなものが出てきて
痴女の入った棺桶を沈めた

「明日香！！」

「汚いぞ」

「卑怯者」

「なんとでもいえ、これが闇のゲームだ
なんならお前たちも消してやろうか！！」

「いやこれでいい」

「「え」」

「十代が本気になった
昔の十代だったらきつかったかもしれないが今の十代ならどうだ？」

「成程、今のアニキなら」

「俺はだんだん相手がかわいそうになってきたんだなあ」

「俺が勝てばいいんだ、ドロー
俺は大嵐を発動」

「なに！
私の《万魔殿（パンディモニウム）ー悪魔の巣窟ー》があ」

「さらに苦渋の選択を発動
俺が選ぶのはこの５枚だ」

万丈目戦と同じＥ・ＨＥＲＯ　スパークマン２枚とＥ・ＨＥＲＯ
フェザーマン２枚
それにＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディ１枚

「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディを手札に加えろぉ」

「２枚目の苦渋の選択を発動
今度はこの５枚だ」

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ワイルドマン２枚
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フォレストマン２枚

E・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマン1枚

「E・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマンを手札に加えろぉ」

「3枚目の苦渋の選択を発動
最後はこの5枚だ」

E・HERO（エレメンタルヒーロー） バブルマン3枚
E・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマン2枚
これはまさか俺が考えた十代が使用している中で最も凶悪なあのコンボか？

「しつこいぞおE・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマンを手札に加えろぉ」

「俺は融合を発動
手札のE・HERO（エレメンタルヒーロー） バーストレディとE・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマン
そしてE・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマンを融合
来いV・HERO（ヴィジョンヒーロー） トリニティー」

あ、決まった

「このカードが融合召喚に成功したターン、
このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になるぜ
代わりにダイレクトアタックはできないけどな
だけど、さらに命削りの宝札発動
5枚ドロー
更に強欲な壺を発動する
2枚ドロー
今度は天使の施し発動3枚ドローし2枚墓地に送る
手札抹殺を発動

7枚の手札を捨て7枚ドロー
手札のE・HERO（エレメンタルヒーロー） エッジマンをE・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマンの効果で生贄なしで召喚
更に二重召喚（デュアルサモン）を発動
2体目のE・HERO（エレメンタルヒーロー） エッジマンを2枚目のE・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマンの効果で生贄なしで召喚
ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO バーストレディとE・HERO フェザーマンを除外しE・HERO（エレメンタルヒーロー） フレイム・ウィングマンを召喚
更に2枚目のミラクルフュージョンを発動E・HERO（エレメンタルヒーロー） フレイム・ウィングマンとE・HERO スパークマンを融合
E・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマンを召喚
効果により俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき攻撃力を300ポイントアップ
墓地には22枚のE・HERO
攻撃力6600ポイントアップだ
そして2枚目の命削りの宝札発動を発動
手札が5枚になるようにドロー
3枚の一族（いちぞく）の結束（けっそく）を発動
このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだよって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ
更に団結の力2枚をE・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマンに装備
攻撃力6400ポイントアップ」

場を整理するとE・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマン
2500＋6600＋2400＋6400＝17900

E・HERO（エレメンタルヒーロー）　エッジマン×2
2600+2400=5000
V・HERO（ヴィジョンヒーロー）　トリニティー
2500×2+2400=7400

「な、な」

ああ、タイタンビビってる

「くらえ
俺のヒーローたち
全員で攻撃だ」

4000−（1900−7400）=−1400
−1400−5000×2=−11400
−11400−17900=−29300

わ、すごい
原作とは離れすぎ
十代のデッキなんて1枚も残ってないぜ

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああ」

すごい悲鳴

「ご愁傷様っす」

「ご愁傷様なんだなあ」

「明日香は返してもらうぜ」

あ、逃げた

「待て」

な、これは
今はデュエル中じゃないぞ
なんで足元のウィジャの目が光っているんだ

第１０話　闇のデュエル（笑）　十代ＶＳタイタン（後書き）

今回十代が使ったデッキのコンセプトは
墓地にカードを送りまくってＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力を上げるというものです。
はっきり言って十代だからここまでまわる。

第１１話　闇のデュエル　ＶＳ闇より深き深淵よりいでし者（前書き）

注意　アスラクラインではありません。

第１１話　闇のデュエル　ＶＳ闇より深き深淵よりいでし者

Ｓｉｄｅ遊輝

何故ウィジャの目が光っているんだ
最初に俺が思ったことはそれだった
その後気づいた時には行動を俺は起こしていた

「翔！！隼人！！十代！！
早く逃げろ！！
こいつはタイタンの偽モンの闇じゃない
本物だ、取り込まれるぞ！！」

「「「どういうことっすか（なんだなあ）（だ）」」」

そんなこといってるうちに俺と十代
そしてタイタンが闇に取り込まれてしまった

「な、なんだ一体？」

「こ、これは……何が起こったのだぁ？」

「闇だ
おそらくさっきのデュエルが原因だろ」

「なんだとぉ」

「ところで遊輝はなんでそんなことを知っているんだ？」

「本物の闇のデュエルをしたことがあるからだ！！」

「なんだと
闇のデュエルは実在したのか。」

「ああ、おそらくそのうち闇が俺らを
あ、危ない」

謎のバケモンがタイタンに襲い掛かってきたのを俺が助けた

「気をつけろ
こいつら俺らを食う気だぞ、一か所に集まるんだ」

「分かった」

近寄ってくる闇をハネクリボーが追い払っていく
しかし力がやはり足りない

「ライネス、頼む」

「分かったマスター」

そういうとライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴンのライネスが現れる

「ドラゴン！？」

「俺の相棒の精霊だ
十代は真の姿を見るのは初めてだったな」

「ああ、こんなにでかかったのか」

そんなこんなで闇から逃げているとたくさんの闇が一か所に集まっていた

「なんなんだ
一か所に集まっていくぞ」

「なんだぁ
黒いのが固まっていくぞ」

黒いのが固まっていき
人のか

な、あれは
そんな馬鹿な

「デュエル」

「デュエルをしろというのか
ならおれがやる」

「遊輝」「小僧」「マスター」

「心配するな
絶対に負けない
それに勝たないと帰れそうもないし」

「分かった、気をつけろよ」

「もちろんだ

デュエル」

相手が闇なら遠慮することはない
まがい物とはいえ力がこもっているこのカードを使うぞ
相手の姿がドーマなのも気になるしな

「私のターンドロー
私はフィールド魔法オレイカルコスの結界を発動」

オレイカルコスの結界だと
そんな馬鹿な
なんであのカードが、いや一つ心当たりがあるな
あのバカ神がああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああ
なんてミスしてくれたんだ
ヤバい
これは本格的にいかなくては

「オレイカルコス・ミラーを発動
手札のレベル４オレイカルコス・ギガースを２枚墓地に送り
ミラーナイト・コーリングをデッキより特殊召喚
ミラーナイト・コーリングの効果により
ミラーナイトトークンを４体特殊召喚
さらにミラーナイトトークンに銀の盾カウンターを乗せる
ターンエンド」

ミラーナイト・コーリング　攻撃力０＋５００＝５００
ミラーナイトトークン×４　攻撃力０＋５００＝５００

「なんて高速展開だ

遊輝がんばれ」

「頼むぞ小僧」

「遊輝と呼んでくれタイタン」

「わかった、頼むぞぉ遊輝」

「もちろんだ
俺のターンドロー
エルフの剣士(けんし)を召喚
そしてライフを１０００ポイント払いレジェンド・オブ・ハートを発動」

「レジェンド・オブ・ハートだと
きさま名もなき龍に選ばれたものか」

「知らない！
レジェンド・オブ・ハートの効果によりデッキから「ティマイオスの眼」「クリティウスの牙」
「ヘルモスの爪」をそれぞれ1枚ずつゲームから除外しデッキの「ティマイオス」「クリティウス」
「ヘルモス」をそれぞれ1体ずつ特殊召喚」

「なんだこのモンスタぁーたちは
見たことがないぞ」

「精霊は感じないが強い力を感じる」

「マスターこのカードは」

「細かいことは気にするな
速攻召喚発動
手札の幻獣王ガゼルを召喚
更に命削りの宝札を発動手札が5枚になるようにドロー
2枚目の速攻召喚を発動
2体目の幻獣王ガゼルを召喚
3枚目の速攻召喚を発動
2体の幻獣王ガゼルを生贄にブラック・マジシャンを召喚」

現れる黒衣の魔術師
十代とタイタンはブラック・マジシャンの登場に驚いている

「「ブラック・マジシャン!!」」

「更に強欲な壺発動2枚ドロー
師弟（してい）の絆（きずな）を発動
デッキからブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚」

今度現れたのは黒衣の魔術師ブラック・マジシャンの弟子
ブラック・マジシャン・ガール

「「ブラック・マジシャン・ガール!!」」

「ブラック・マジシャン・ガールは遊戯さんのデッキにしか入っていないはず
遊輝はなんで持ってるんだ」

「デッキに入れてるのか遊戯さんしかいないだけだろ
世界に1枚じゃブルーアイズや神並みのレア度だぞ」

「それもそう……なのか？」

「まあいい、さらに２枚目の命削りの宝札を発動
ティマイオスの　眼　（まなこ）を発動
効果によりブラック・マジシャン・ガールを墓地に送り
来い、　竜騎士　（りゅうきし）　ブラック・マジシャン・ガール」

ブラック・マジシャン・ガールは進化し
ティマイオスに乗った鎧を着たブラック・マジシャン・ガール
竜騎士　（りゅうきし）　ブラック・マジシャン・ガールが現れる

「なんなんだぁ
あのカードたちはぁあんなカード見たことないぞぉ」

「なぜ、お前なんかが名もなき三龍を従えているのだ
しかも世界に１枚しかないはずなのに」

「いっとくがコピーじゃないぜ」

一度整理してみよう
自分の場
竜騎士　（りゅうきし）　ブラック・マジシャン・ガール　攻２６００　守１７００
ブラック・マジシャン　攻２５００　守２１００
ティマイオス　攻２８００　守１８００
クリティウス　攻２８００　守１８００
ヘルモス　攻２８００　守１８００

「ライトニングボルテックスを発動
手札を1枚捨てミラーナイトトークン4体とミラーナイト・コーリングを破壊」

「だが、ミラーナイトトークン4体は鏡の盾カウンターを1個取り除くことで
破壊を免れる」

「なら、2枚目のライトニングボルテックスを発動
今度こそミラーナイトトークンを破壊」

「なんだと」

十代たちも唖然としている

「これが遊輝の本気？
うおーーーすげえたたかいてえぜ
ここでたら遊輝デュエルだぞ」

「分かったよ
だがこのデッキを含むいくつかのデッキは闇のデュエル専用だからな
俺のメインデッキとだ」

「おまえらぁ
少しは場所を考えろぉ
いい加減私もおこるぞぉお」

「わあったよ、ヘルモスの効果でデッキのモンスターを3枚除外
このターン3回攻撃ができるようになる
行くぞ止めだ

全員で攻撃ぃいいいいいいいいいいいい」

４０００－２６００＝１４００
１４００－２５００＝－１１００
－１１００－２８００＝－３９００
－３９００－２８００＝－６７００
－６７００－２８００－２８００－２８００＝－１５１００

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

ドーマの形をしたものは砕け散り
そこに光が差し込んだ

「マスターあそこが外につながっています
急いでください」

「行くぞ十代、タイタン」

「ああ、わかった」「分かったぞぉ」

そして俺たちは闇の中から脱出した

そのあとのことは
だいたいの形を話そう

まず翔と隼人に説明をした
半信半疑だったが中で起きたことを信じてくれた
理由は十代の説得と俺のブラック・マジシャン・ガールのカードだ
次に目覚めた明日香にも説明した

その際タイタンが明日香に土下座をしているのがシュールだった
そのあとはタイタンと話し合い
タイタンが似非闇のデュエリストをやめること
次にその技術を生かし別の仕事に就くことで見逃すことが決定した
のだが

「何故私はここにいるのだぁ
石崎遊輝」

そう今、タイタンは俺の部屋にいる

「頼みがあってな
実は前からカードをオークションに出そうと思っていたのだが
出し方を知らなくてな
教えてもらおうと思って
あ、そうそう
お前の住居をよーいしてやったぞ
校長を脅したらレッド寮の近くにぼったて小屋を作ってくれた
好きに使っていいぞ」

「ありがたい
礼を言わせてもらおう
だがいいのか私なんかをかくまうような真似をして」

「何を勘違いしているのか知らないが
俺はお前を利用しているんだぞ
代わりに情報屋となってくれないか
周りの情報を得るためのパイプがほしいんだ
もちろん金を払うぞ」

「分かった
そういうことにしておこう」

「では頼むぞ」

これで最初にここに来た目的
いや、この世界に来た目的が達成できる
金儲けというな

第１１話　闇のデュエル　ＶＳ闇より深き深淵よりいでし者（後書き）

《オレイカルコスの　結界　（けっかい）》効果
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
自分フィールド上のモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。
また、自分フィールド上の魔法・罠カードゾーンはモンスターカードゾーンとしても扱い、
自分は魔法・罠カードゾーンにモンスターカードを召喚、特殊召喚する事ができる。
自分フィールド上のモンスターカードゾーンと魔法・罠カードゾーンにモンスターカードが存在する場合、
相手はモンスターカードゾーンのモンスターを攻撃対象に選ばなければならない。
このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。

《オレイカルコス・ミラー》効果
儀式魔法
「ミラーナイト・コーリング」の降臨に必要。
手札かフィールドから、レベルが６以上になるようカードをリリースしなければならない。
このカードはデッキから「ミラーナイト・コーリング」を自分フィールド上に
儀式召喚扱いとして特殊召喚する事ができる。

《オレイカルコス・ギガース》効果
効果モンスター
レベル４／地属性／岩石族／攻撃力４００／守備力４００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
このカードのコントローラーはドローフェイズをスキップする。

このカードが破壊され墓地へ送られた場合、このカードを特殊召喚する。
その後、攻撃力を５００ポイントをアップする。
《ミラーナイト・コーリング》効果
儀式・効果モンスター
レベル６／光属性／機械族／攻撃力０／守備力０
「オレイカルコス・ミラー」により降臨。
このカードが特殊召喚に成功した時、「ミラーナイトトークン」（機械族・光・星１・攻／守０）４体を自分フィールド上に特殊召喚する。
「ミラーナイトトークン」が特殊召喚に成功した時、鏡の盾カウンターを１個乗せる。
「ミラーナイトトークン」の攻撃力は、ダメージ計算時このカードと戦闘を行う相手モンスターと同じ攻撃力になる。
「ミラーナイトトークン」がフィールドを離れる場合、代わりに鏡の盾カウンターを１個取り除く。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「ミラーナイトトークン」に乗っている鏡の盾カウンターが取り除かれた時、
そのトークンに鏡の盾カウンターを１個乗せる。
《レジェンド・オブ・ハート》効果
通常魔法
１０００ライフポイントを支払い、自分フィールド上の戦士族モンスター１体をリリースして発動する。
デッキ・手札・墓地から「ティマイオスの眼」「クリティウスの牙」「ヘルモスの爪」をそれぞれ１枚ずつゲームから除外する。
その後、デッキまたは手札から「ティマイオス」「クリティウス」「ヘルモス」をそれぞれ１体ずつ特殊召喚する。
それらのモンスターが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在する

「オレイカルコス」と名のつくフィールド魔法カードを全て破壊する。
この効果は「魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない」の効果を持つ
「オレイカルコス」と名のつくフィールド魔法カードを与える。
《ティマイオス》効果
効果モンスター
レベル８／光属性／戦士族／攻撃力２８００／守備力１８００
このカードは通常召喚できない。
「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。
このカードは表側表示で存在する限り、自分のメインフェイズ時に墓地に存在する
効果モンスターを１体選択してゲームから除外する。
このカードの効果はエンドフェイズ時までゲームから除外した効果モンスターの効果を得る。
《クリティウス》効果
効果モンスター
レベル８／光属性／戦士族／攻撃力２８００／守備力１８００
このカードは通常召喚できない。
「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。
このカードが表側表示で存在する限り、墓地に存在する
通常罠またはカウンター罠のカードを１枚選択してゲームから除外する。
このカードの効果は効果処理終了までゲームから除外した通常罠またはカウンター罠のカードの効果を得る
《ヘルモス》効果
効果モンスター
レベル８／光属性／戦士族／攻撃力２８００／守備力１８００
このカードは通常召喚できない。
「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

このカードが表側表示で存在する限り、自分のデッキからモンスターカードを3枚ゲームから除外する事で、
このターンのバトルフェイズ中に3回の攻撃を行う事ができる。
《師弟（してい）の絆（きずな）》効果
通常魔法
自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が
表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
自分のデッキ・手札から「ブラック・マジシャン・ガール」1体を
表側守備表示で特殊召喚する。
《ティマイオスの眼（まなこ）》効果
通常魔法
自分フィールド上から融合モンスターカードに決められた
融合素材モンスター1体を墓地に送り、
その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。
また、自分フィールド上に「オレイカルコスの結界」が存在する場合、
このカードは発動する事ができない。
《竜騎士（りゅうきし）ブラック・マジシャン・ガール》効果
融合・効果モンスター
レベル7／闇属性／ドラゴン族／攻撃力2600／守備力1700
このカードは「ティマイオスの眼」の効果で
「ブラック・マジシャン・ガール」1体を墓地へ送った場合のみ、
エクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
手札を1枚捨てる事で、相手フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

第2回主人公プロフィール（前書き）

フラグメイカーのはずなのに
まだフラグを立てていない理由判明

第2回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長　十代と同じくらい

体重　５０キロくらい

顔　　ふつう

好きなデッキ　ドラゴンデッキ　速攻展開デッキ　強奪デッキ　サイバーデッキ

好きな人　性格がいいやつ　デッキの実験に手伝ってくれるやつ

十代

嫌いな人　めんどくさいやつ　ナルシスト　馬鹿神

特技　　フラグメイク【無意識】　読書

プロフィール　まず金の荒稼ぎのためにこの世界に
卒業したらどの世界に行くか検討中
性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。
前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖になっている。
最近十代との友情に芽生え前よりもデュエルが好きになってきている
いつも面倒をかける馬鹿神が嫌い
だが、そのたびに天使とともに折檻して新しい能力

をもらっている
拷問だが

能力値　（新規）

フラグメイカーレベル　１⇒４

チートドローレベル　１⇒２５　ただしキレると測定不能に

デッキ構築レベル　１⇒２０

マッドサイエンティストレベル　１⇒５

魔力　１⇒５

気　１⇒５

レベル１は非表示

能力　（新規）

不老不死　特殊な不老不死で肉体年齢を任意で変化できる
神様曰くやりすぎると地獄に即刻落とされる

第１話参照

時空間移動能力　時間と空間を超える能力
時間を超える能力は過去・未来に行ける
空間を超える能力はドラえもんのどこでもドア強化版

二つを合わせることで異世界に行ける

４次元ポケット改　ドラえもんの４次元ポケットみたくなんでも出せるポケット
神様がいろいろ入れてる
ただしその世界にあったものしか取り出せない

第１０話参照

絶対記憶能力　転生前の記憶を含むあらゆる記憶を絶対に忘れなくなる能力
ただし覚えすぎるとオーバーヒートする

瞬間記憶能力　一瞬でも見たものを完全に覚える能力
光の速さでも見れば覚える

圧倒的な脳の容量　この世のすべてを覚えても潰えない脳の容量
これのおかげで絶対記憶能力のオーバーヒートが起こらない

地球（ほし）の本棚（弱）　地球の本棚の縮小版
自分がおぼえているものの中から必要な知識を引き出す能力
地球の本棚と違い問題などの答えなどを問題を考えるだけで
知識を呼び出せる

描写をしないが第１１話の件で神を天使とともに折檻して手に入れた能力

魂容量１０倍　自分の本来の魂の容量を１０倍ほどに増やす
これによりより強い力を入手可能に

限界点突破　鍛え続けることで限界なく際限なく強くなる能力

魔力＋気　ネギまの一般魔法先生並みの魔力と気を使えるよ
うになった

普通はあまり上がらないが限界点突破により魔力
を使えば使うほど
気を使えば使うほど最大値が上がる

ダイオラマ魔法球生成　自分の望むダイオラマ魔法球を作る能力
例としては
中では年を取らない１時間が１日になる別荘
トリコの食材が出てくる別荘
いろいろな武道を手ほどきしてくれるロボ
がいる別荘など

第2回主人公プロフィール（後書き）

主人公がチートになっていく気がする今日このころ
もちろんあのバカ神がこれで止まりはしません
何をするかはネタバレなので言いはしませんが

ちなみに十代のチートドローレベルも上がっています
原作ではレベル現時点で１７くらいだとすればすでに３５くらいです

ちなみにレベルは俺の主観です

第１２話　制裁デュエル　十代＆ａｍｐ；遊輝ＶＳ迷宮兄弟

Ｓｉｄｅ遊輝

「ここを開けろ！ここを開けるんだ！」

来たか
だがトラップ発動
盗聴器＋テープレコーダー
こいつらによりこの頭のいかれたアカデミア倫理委員会の犯罪まがいの言動を証拠として残せるのだ
ちなみにこれはダイオラマ魔法球生成（第２回主人公プロフィール参照）で作った
［諜報活動にピッタリな魔法球］の中に入ったらなぜかあった
便利だなあ
これで［あらゆる呪いの解除が可能な魔法球］とか作ったら何が入っているんだか

「断る！！
俺は不審者を家に入れる趣味はない」

もちろんすでにテープレコーダーはオンだ
このいかれた野郎どもはおそらく次の発言で自滅する

「私たちはアカデミア倫理委員会だ！！
速やかに開けないとこのドアをダイナマイトで爆破する！！」

はいまず１つ犯罪発言もらいました
ありがとうございます

「分かりました！出ますよ、出ます」
でたら校長室に呼ばれ言いたい放題言われた

「で、制裁デュエルですか
それはいいですけどここからは俺のターンだ
まずはこれを聞け」

『私はここのクロノスという教員に雇われたぁ
遊城十代という小僧を潰してくれとなぁ』

校長たちの顔が青くなっている

「次はこれだ」

『私たちはアカデミア倫理委員会だ！！
速やかに開けないとこのドアをダイナマイトで爆破する！！』

また青くなった
いや青を通り越して白色になっている

「アカデミアの大人は法律を知らないのか
どう聞いてもクロノス教員は今はいい人だが少し前は悪い奴だった
タイタンに十代を潰せと言ってるようにしか聞こえんかったが」

「捏造だ！！」「捏造なのーね」

「じゃあ本人に来てもらうか
今この学園にいるぞ

校長は分かっているようだがな
次にアカデミア倫理委員会の発言だ
アカデミア倫理委員会は爆発物取締法というのを知らんのか
それにこれは脅迫だろう
よって制裁デュエルに一つくらい提案をしてもいいだろう
それで＋－０だ
条件はこちらで選んだ代表2名とそちらが選んだデュエリストでデュエル
もし、奇跡的に、百億分の一にもこちらが負けたら俺、十代、翔は退学
勝ったら、クロノス教員の給料の９０％を3か月間俺、十代、翔に渡す
以上だ
反論は認めない
もし約束を破るようだったら海馬コーポレーションにさっきの音声を送り
世界中のマスコミにも送る
では俺は帰る
ちなみに代表者は俺と十代だ
強い奴をよこさないと5ターン目に終わるぞ
さらばだ」

後ろで騒いでた全員を置いて
寮に帰った
その後

「おい十代
デッキ調整のためにデュエルだ」と言ってデュエルしたり
翔のトラウマの話を聞いて十代とカイザー（笑）がデュエルをしたり
原作イベントが起きて制裁デュエルの日になった

「相手は、あのデュエルキング、武藤遊戯と戦ったことのある伝説のデュエリストナノーネ。」

あ、そうかい
あのハゲ二人か

「我ら流浪の番人」

「迷宮兄弟」

「お主達に恨みはないが…」

「故あり、対戦する」

「我らを倒さねば…」

「道は開けん！」

「「いざ、勝負！」」

雑魚め

「では、両者
位置について」

二人でデッキを合わせている
二人ともＥ・ＨＥＲＯ　デッキだ
しかも俺のデッキにはＥ・ＨＥＲＯ　と対をなす奴らもデッキに入れている

そう悪魔のＨＥＲＯ、　Ｅ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）　だ
くっくっく
あがいてくれよ
闇　（やみ）の　守護神　（しゅごしん）－ダーク・ガーディアンを出せたらとっておきを見せてやるからな

「タッグパートナーへの助言は禁止なのーね、パートナーのフィールドと墓地も自分のフィールドと墓地として扱えるーの、両チームライフポイントは８０００なのーね、では！！」

「「「「デュエル！！！！」」」」

「俺のターンドロー
ダーク・フュージョンを発動
手札のＥ・ＨＥＲＯ　フェザーマンとＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディィを
暗黒融合
来いＥ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）　インフェルノ・ウィング
更にミラクルフュージョンを発動
墓地のＥ・ＨＥＲＯ　フェザーマンとＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディィを
融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェニックスガイ
リバースカードを１枚セットターンエンドだ」

なんだあのＨＥＲＯは
すげえ禍々しいぞ
それに暗黒融合って
などなどとうるさいが十代は気にしていない
実は俺の正体を告知からこの日までに話したからだ

その時いくつかのカードを見せた
だから十代とは本気でデュエルができるし
真の俺のデッキのいくつかをつかえる

「私のターン、ドロー！」

迷って頭に書いている方

それだけか

「私は地雷蜘蛛を召喚
私はこれでターンエンドだ」

「行くぜ、俺のターン！ドロー！」

始まる魔改造十代による悪夢のレクイエム
悪夢のパーティー
悪夢のダンス
もうだれにも止められない

「強欲な壺を発動
２枚ドロー
更に融合発動
手札のＥ・ＨＥＲＯ　フェザーマンとＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディを
融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン
更に２枚目の融合を発動するぜ
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマンとＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンを融合

来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマン
更にミラクルフュージョンを発動
遊輝のＥ・ＨＥＲＯ　フェニックスガイと墓地のＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンを融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フェニックスガイ」

すげえ、あんな強そうな融合モンスターが3体も
迷宮兄弟びびってねえか
あの二人強すぎる
なんだ、あの引きの良さ
俺にも分けてほしいぜ
とか聞こえる
それにしてもなんで観客がいるんだ？

「命削りの宝札を発動
手札が5枚になるようにドロー
更にカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

宮って書いている方

「私のターン、ドロー！」

「私はカイザー・シーホースを召喚」

「更に魔法カード、生け贄人形を発動
自分の場のモンスター1体を生贄にすることで手札からレベル7のモンスターを特殊召喚する
私は兄者の場の地雷蜘蛛を生贄に手札から風魔神ーヒューガを特殊召喚」

「すまぬ、兄者」

「いいや、お前のためならば犠牲にともなろう」

「だが、それでは私の気がすまない
私は兄者を対象に魔法カード、闇の使命者を発動」

「カード名を1枚選択、そのカードが相手のデッキに入っていれば、
相手はそのカードを手札に加える
私が選択するのは雷魔神ーサンガ」

「ふふふ、ありがたい
勿論、我がデッキに雷魔神ーサンガは私のデッキに入っている」

せこいよな、これって
絶対に入ってるに決まってんじゃん

「私はこれでターンエンド。」

「俺のターンドロー
俺は命削りの宝札を発動
5枚ドロー」

「やるのか遊輝」

「ああ、十代
あいつらのカードを利用しつくして潰す」

「ははははは」

十代に苦笑いされるとは
なんかやな感じ

「俺はＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマンを召喚
更に速攻召喚発動
２体目のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマンを召喚
そして前のターンに伏せておいた超融合を発動
超融合の効果は
手札を１枚捨てる。
自分または相手フィールド上から融合モンスターカードに
よって決められたモンスターを墓地へ送り、
その融合モンスター１体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発
動する事はできない。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）だ
俺は俺のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマンと貴様のカイザー・シーホースを
超融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｔｈｅ（ザ）　シャイニング
更に２枚目の超融合を発動
俺は俺のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマンと貴様の風魔神ーヒューガを
超融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマンと
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フェニックスガイは
自分の墓地に存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた
カード１枚につき攻撃力を３００ポイントアップという効果を共に
持っている
墓地のＥ・ＨＥＲＯは６枚
攻撃力１８００ポイントアップ
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　Ｔｈｅ（ザ）　シャイニングは

ゲームから除外されている
自分の「E・HERO」と名のついたモンスターの数×300ポイントアップするという効果を持っている
除外されているE・HEROは4枚
攻撃力1200ポイントアップ」

ここで場を整理しよう

E・HERO(エレメンタルヒーロー) The(ザ) シャイニング
攻撃力 2600＋1200＝3800
E－HERO(イービルヒーロー) インフェルノ・ウィング
攻撃力 2100
E・HERO(エレメンタルヒーロー) Great(グレイト) TORNADO(トルネード)
攻撃力 2800
E・HERO(エレメンタルヒーロー) シャイニング・フェニックスガイ
攻撃力 2500＋1800＝4300
E・HERO(エレメンタルヒーロー) シャイニング・フレア・ウィングマン
攻撃力 2500＋1800＝4300

「いけ
全弾発射(フルバースト)ォオオオオオオオ」

「「グわああ」」

8000−3800＝4200
4200−2100＝2100

２１００－２８００＝－７００
－７００－４３００＝－５０００
－５０００－４３００＝－９３００

「では校長
さらばです
もう二度とあのようなことしないように言っといてください
そして、課題の追加とかはしないでくれよ」

それだけ言うと俺は帰った
十代からそのあとのことを聞くと
課題がなかった以外原作と変わらなかった

第１２話　制裁デュエル　十代＆ａｍｐ；遊輝ＶＳ迷宮兄弟（後書き）

ということで
十代と遊輝の二人による蹂躙の話でした
もうこのペアに勝てるペアはほとんどいないんじゃないか？
これが魔改造とチートの力だ
わあっはっはっはっ
なんてね

第１３話　冬休み前の決闘　ＶＳ十代　第１戦　罪と光炎

Ｓｉｄｅ遊輝

制裁デュエル後のことを簡潔に話そう
三沢と万丈目のデュエルは原作通りだった
ＳＡＬのイベントはすでに研究所を海馬さんに匿名でちくって消しておいたからなし
以上だ
短いって
だってこれから
原作とは違う激戦をしまくるんだから
今、俺と十代はダイオラマ魔法球の中にいる
ちなみにこの魔法球はダイオラマ魔法球生成で［デュエルにピッタリな魔法球］を作ってできたものだ

「十代デュエルしないか」

「いいぜ、やろう
それにしても珍しいな、お前からデュエルしようだなんて
どうかしたか」

実は十代に話してから十代が
老化しないし時間の流れが違うなんて便利な場所夢みたいじゃねえかデュエルしまくれるし
とか言ってよく来て俺とデュエルするようになっていた

「実はな冬休みに出かけようと思うんだよ異世界に
ほら、俺不老不死だから何年も出てもばれないだろ、時間操作もで

きるし
だからしばらく出て行って修行しようと思うんだ
ってことで出ていく前に何戦もしてから修行に行こうかと」

「そういうことか
分かったぜ、とりあえず何戦するんだ？」

「１０戦でどうだ」

「じゃあさっそくやろうぜ」

「「デュエル」」

「俺のターンからだ、ドロー！
俺はフィールド魔法　Ｓｉｎ（シン）　Ｗｏｒｌｄ（ワールド）［ＯＣＧ版］を発動
更に手札のＳｉｎ（シン）　サイバー・エンド・ドラゴン［映画版］の効果を発動
エクストラデッキのサイバー・エンド・ドラゴンを墓地に送り特殊召喚
更に手札の死者蘇生を発動
墓地のサイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚
レベル１０サイバー・エンド・ドラゴンと
レベル１０Ｓｉｎ（シン）　サイバー・エンド・ドラゴン［映画版］をオーバーレイ
２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築
エクシーズ召喚　超弩級砲塔列車グスタフ・マックス」

ゼアルで勘違いで遊馬を襲った神月アンナが使ったチート級エクシーズ
効果がヤバい

「げ、そいつかよ」

「超弩級砲塔列車グスタフ・マックスの効果を発動
オーバーレイユニットを1つ取り除き2000ダメージを与える」

4000－2000＝2000

「っく」

「リバースカードを3枚伏せターンエンド」

「俺のターン、ドロー
俺は天使の施しを発動
3枚ドローし手札を2枚捨てる
さらに融合を発動
手札のE・HERO　フェザーマンとE・HERO　バーストレディを融合
来いE・HERO(エレメンタルヒーロー)　フレイム・ウィングマン
更に2枚目の融合を発動するぜ
E・HERO(エレメンタルヒーロー)　フレイム・ウィングマンと手札のE・HERO　スパークマンを融合
来いE・HERO(エレメンタルヒーロー)　シャイニング・フレア・ウィングマン」

普通ならヤバいが

「甘い！！
速攻魔法Sin（シン）　Cross　（クロス）を発動
効果により墓地のSin(シン)　サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚
更にトラップ発動　Sin(シン)　Claw(クロウ)　Stream(ストリーム)

このカードは自分フィールド上に「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターが
表側表示で存在する場合に発動する事ができる
効果によりＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマンを破壊」

だけど今の十代なら

「なら強欲な壺を発動
２枚ドロー
更にミラクルフュージョンを発動
墓地のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマンとＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンを融合
再び現れろ
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマン」

やっぱり

「Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマンは墓地のＥ・ＨＥＲＯと名のついたカード１枚につき攻撃力を３００ポイントアップする
俺の墓地には２体のＥ・ＨＥＲＯがいる
よって攻撃力３１００
いけＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマンで攻撃
シャイニング・シュート」

だが防ぐ

「トラップ発動
くず鉄のカカシを発動

攻撃を防ぐ」

「そいつかあ
ならカードを1枚伏せターンエンド」

「Sin（シン） サイバー・エンド・ドラゴンはSin （シン） Cross （クロス）の効果で除外される
俺のターンドロー
超弩級砲塔列車グスタフ・マックスの効果を発動
オーバーレイユニットを1つ取り除き2000ダメージを与える」

「そうはさせないぜ
地獄の扉越し銃を発動
ダメージはお前に受けてもらうぜ」

4000－2000＝2000

「やっぱりそれか
強欲なカケラを発動
ターンエンド」

「俺のターンドロー
俺も強欲なカケラを発動してターンエンドだ」

「俺のターンドロー
強欲なカケラに強欲カウンターを1つ乗せる
カードを伏せターンエンドだ」

「俺のターンドロー
強欲なカケラに強欲カウンターを1つ乗せるぜ

更に壺の中の魔導書を発動
３枚ドロー」

「俺も３枚ドロー」

「Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマンを召喚
超融合を発動
手札を１枚捨て
俺のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマンと遊輝の超弩級砲塔列車グスタフ・マックスを
超融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ガイア」

「っち」

「２体のモンスターで攻撃だ」

「手札の速攻のカカシを墓地に捨て効果を発動
戦闘を無効化」

「ならターンエンドだ」

「俺のターンドロー
強欲（ごうよく）なカケラに強欲カウンターを１つ乗せる
強欲（ごうよく）なカケラを墓地に送り２枚ドロー
更に手札のＳｉｎ（シン）　真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）［ＯＣＧ版］の効果を発動
デッキの真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を除外し
特殊召喚
更に可変機獣（かへんきじゅう）　ガンナードラゴンを妥協召喚
レベル７可変機獣（かへんきじゅう）　ガンナードラゴンとレベル７Ｓｉｎ（シン）　真紅眼の

黒竜［ＯＣＧ版］（レッドアイズ・ブラックドラゴン）をオーバーレイ
２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築
エクシーズ召喚
来い　Ｎｏ．１１ビッグ・アイ
更にトラップ、闇次元の開放を発動
効果により除外されている真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を特殊召喚
二重召喚を発動
２体目の可変機獣（かへんきじゅう）　ガンナードラゴンを妥協召喚
レベル７真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）とレベル７可変機獣（かへんきじゅう）　ガンナードラゴンをオーバーレイ
２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築
エクシーズ召喚
来い　Ｎｏ．１１ビッグ・アイ
２体のビッグ・アイの効果をそれぞれ発動
エクシーズ素材をそれぞれ１つ取り除き
相手のモンスターのコントロールを得る
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　シャイニング・フレア・ウィングマンと
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ガイアのコントロールを得る
いけ２体でダイレクトアタック」

２０００－２５００＝－５００
－５００－２２００＝－２７００

「くっそお、負けたぁ」

「そういうなって
俺もかなり危なかったぜ
じゃあ少し休憩してから次のデュエルをしようぜ」

「次は俺が勝つぜ」

「いや、今度も俺が勝たせてもらう」

これ以降はいい合いなのでカットします（作者）

第１３話　冬休み前の決闘　ＶＳ十代　第１戦　罪と光炎（後書き）

《　Ｓｉｎ　（シン）　Ｃｒｏｓｓ　（クロス）》効果
速攻魔法
自分の墓地に存在する「Ｓｉｎ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを召喚条件を無視して自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

チートドローどうしが戦うと大変なことに
ちなみに十代には未来どんなことがあるかは話していません
なので未来に出てくる１点物のレアカードだとそうゆうカードを使うとき言っています
最後にこの世界ではといって

第1回アンケート

今回はアンケートを取りたいと思います

アンケートの項目は

遊輝のパーティーに入る精霊の募集です

項目は

1つ目　ナンバー1　スターダスト・ドラゴン

2つ目　ナンバー2　No.39希望皇ホープ

3つ目　ナンバー3　可変機獣ガンナードラゴン

4つ目　ナンバー4　E－HERO（イービルヒーロー）　インフェルノ・ウィング

5つ目　ナンバー5　その他

最も多かった意見を採用します

締め切りは12月1日です

その他に意見が入ったときは項目を追加します

途中経過は後書きにて報告します

第１４話　冬休み前の決闘　ＶＳ十代　第２戦　究極　第３戦　暗黒と神鳴（前）

魔を切り裂く神鳴流
なんてね

第１４話　冬休み前の決闘　ＶＳ十代　第２戦　究極　第３戦　暗黒と神鳴

Ｓｉｄｅ遊輝

「十代そろそろ２戦目やろう」

俺の映画ＯＣＧ混合Ｓｉｎデッキと十代のシャイニング・フレア・ウイングマン主体のＥ・ＨＥＲＯデッキの激戦から数分後

「よおし今度は勝つぞ
遊輝、デュエルだ」

「「デュエル」」

「今度は俺のターンからだ
融合を発動するぜ
手札のＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンとＥ・ＨＥＲＯ　クレイマンを融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　サンダー・ジャイアント［ＯＣＧ版］
さらに２枚目の融合を発動するぜ
手札のＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンとＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ネクロダークマンを融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ダーク・ブライトマン
俺はカードを１枚伏せターンエンドだ」

「俺のターンドロー」

え、これ何？

「俺は苦渋の選択を発動
俺が選ぶのはこいつらだ」

封印(ふういん)されしエクゾディア
封印されし者の右足
封印されし者の左足
封印されし者の右腕
封印されし者の左腕

「え、まじかよ
そのデッキって」

「分かってる
言いたいことは分かる
でも適当に選んだらこのデッキだったんだ
すまん
本当にすまん」

「分かったよ遊輝
とりあえず封印されし者の左腕を選ぶぜ……ｏｒｚ」

「死者転生を発動手札を1枚捨て
封印(ふういん)されしエクゾディアを手札に
カードを2枚伏せターンエンド」

「おれ「トラップ発動補充要員
封印されし者の右足と封印されし者の左足と封印されし者の右腕を
墓地から手札に
俺の勝ち」やっぱり
そのデッキはお願いだからもう使わないでくれ

頼むから使わないでくれ
もうそのデッキとはやりたくない
エクゾディア怖い」

ああ、十代が壊れるぅううううう

「分かったから十代
頼むキャラ崩壊しないでくれ」

それから約1時間後

「デュエルやろうぜ」

あれから頑張って説得したら
何とか復活しました

「今度は俺のターンから行くぜ
俺のターンドロー
俺は手札抹殺を発動
手札を5枚捨て5枚ドロー」

「俺も手札を5枚捨て5枚ドローするぜ」

「更に墓地に送られた
2枚の暗黒界の狩人　ブラウと暗黒界の軍神　シルバの効果を発動
2枚の暗黒界の狩人　ブラウで2枚ドロー
更に暗黒界の軍神　シルバの効果でこのカードをフィールドに特殊召喚
暗黒界の門を発動する
更に効果を発動

墓地の暗黒界の狩人　ブラウを除外し手札の暗黒界の武神　ゴルドを墓地に送る
1枚ドロー
墓地に送られた暗黒界の武神　ゴルドの効果を発動
このカードをフィールドに特殊召喚
レベル5暗黒界の軍神　シルバとレベル5暗黒界の武神　ゴルドをオーバーレイ
2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築
エクシーズ召喚　燃え上がれ　Ｎｏ．６１　ヴォルカザウルス
更に2枚目の手札抹殺を発動
5枚捨て5枚ドロー
捨てられた2枚目の暗黒界の軍神　シルバと暗黒界の武神　ゴルドを特殊召喚
更に強欲な壺を発動
2枚ドローする
カードを4枚伏せターンエンド」

「俺のターンドロー
大嵐を発動するぜ
魔法・トラップをすべて破壊」

「そうはさせない
マジック・ジャマーを発動
手札を1枚捨て効果を無効化」

「なら2枚目の大嵐を発動するぜ
今度こそ破壊だ」

「ならば、こちらもだ
2枚目のマジック・ジャマーを発動」

「3度目の正直だ
3枚目の大嵐を発動するぜ」

「十代がそんな言葉を知ってるとは驚いたな
っち、その大嵐は無効化できないな」

「失礼だな
俺だってこれくらい知ってるつうの
俺は苦渋の選択を発動するぜ
選択するのはこの5枚だ」

E・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマン3枚
E・HERO クレイマン1枚
E・HERO エッジマン1枚

どれ選んでも同じだろ

「E・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマンを選ぶ」

「命削りの宝札を発動するぜ
手札が5枚になるようにドロー
融合を発動
手札のE・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマンとE・HERO フェザーマン
それにE・HERO（エレメンタルヒーロー） バブルマンを融合
来いE・HERO（エレメンタルヒーロー） テンペスター
更に2枚目の命削りの宝札を発動するぜ
手札が5枚になるようにドロー
更にミラクルフュージョンを発動
墓地のE・HERO スパークマンとE・HERO エッジマンを

融合
来いE・HERO（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン
更に2枚目のミラクルフュージョンを発動するぜ
墓地のE・HERO　スパークマンとE・HERO　クレイマンを
融合
来いE・HERO（エレメンタルヒーロー）　サンダー・ジャイアント［アニメ版］
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　サンダー・ジャイアント［アニメ版］の効果を発動
暗黒界の軍神　シルバを破壊
いけヴェイパー・スパーク」

「シルバが」

「最後のミラクルフュージョンを発動
墓地のE・HERO　スパークマンとE・HERO（エレメンタルヒーロー）　ネクロダーク
マンを融合
来いE・HERO（エレメンタルヒーロー）　ダーク・ブライトマン
更にE・HERO（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマンの効果を発動
手札を2枚捨て暗黒界の武神　ゴルドとNo．61　ヴォルカザウ
ルスを破壊
とどめだ
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　テンペスター　カオス・テンペスト
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン　ヴァイススパーク
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　サンダー・ジャイアント［アニメ版］　ボルティッ
ク・サンダー
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ダーク・ブライトマン　ダークフラッシュ」

４０００－２８００＝１２００
１２００－２６００＝－１４００
－１４００－２４００＝－３８００
－３８００－２０００＝－５８００

「つよ
プラズマヴァイスマンつよ
負けたあああああああああああああ」

「よっしゃーーーー
今度は勝ったぜ
ガッチャいいデュエルだったぜ」

「次は俺が勝つ」

「いや今度も俺が勝つ」

以後言い合いなのでカットします（作者）

第１４話　冬休み前の決闘　ＶＳ十代　第２戦　究極　第３戦　暗黒と神鳴（後）
アンケート募集中

第１５話　冬休み前の決闘　ＶＳ十代　第４戦　究極再び　第５戦　龍とＥ

Ｓｉｄｅ遊輝

「「デュエル」」

「さっきのはマジでキレた
十代、手加減できん
いくぞ！！！！
俺のターァアアーーーーーーーン！！！
ドロォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「やば、マジで怒らせちまった
こりゃ心のじゅ「何言ってる、黙れ
王立魔法図書館を召喚
二重召喚発動発動
王立魔法図書館にカウンターが乗る
鉄の騎士ギア・フリード召喚
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
王立魔法図書館の効果で３個の魔力カウンターを取り除き１枚ドロー（１回目）

蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロー（2回目）
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロー（3回目）
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロー（4回目）
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードに装備
王立魔法図書館にカウンターが乗る
蝶の短剣―エルマ―をギア・フリードの効果で破壊
蝶の短剣―エルマ―の効果で蝶の短剣―エルマ―を手札に
王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロー（5回目）……」

その後27回目でエクゾディアがそろい俺は勝った
そしたら十代にこんな提案をされた

「あのさ、さすがに１０戦疲れるし
次で最後にしないか？」

まさかデュエルバカの十代がこんなこと言うとは思っていなかったが
宇宙意思（作者）が１０個もＥ・ＨＥＲＯデッキが思いつくかぁあ
あああと言ってた気がしたので
了解した
なんか最近コメディになってる気がする
とまあメタ発言はここまでにして
５戦目が最終戦になりました
お互いのメインデッキでデュエルです

「「デュエル」」

「俺のターンドロー
光竜の煌きを発動手札のドラゴンを2枚墓地に送り
デッキから光属性のドラゴン1体を特殊召喚する
来いライトエンド・ドラゴン
更に墓地の
光属性　銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）と
闇属性　真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を除外し
手札からライトパルサー・ドラゴンを特殊召喚
命削りの宝札を発動
リバースカードを1枚伏せターンエンド」

「俺のターン
ドロー
融合を発動
Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマンとＥ・ＨＥＲＯ　エッジマンを融合
来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン

E・HERO（エレメンタルヒーロー）プラズマヴァイスマンの効果を発動
手札を2枚捨てライトエンド・ドラゴンとライトパルサー・ドラゴンを破壊」

「ならそのとき
トラップ発動
竜の輝鱗
自分フィールド上のドラゴン1体を手札に戻す
俺はライトエンド・ドラゴンを手札に戻す
そして手札から別の同レベルのドラゴンを特殊召喚する！
光と闇は表裏一体だ！現れろ闇の龍！！
ダークエンド・ドラゴン」

分かる人にはわかる
パクリ

（さあ誰のパクリでしょう
第8話を見ればわかるとおもうよ）作者

何か電波が
まあいい続きだ

「ならおれは最後の手札を捨て
ダークエンド・ドラゴンを破壊
E・HERO（エレメンタルヒーロー）プラズマヴァイスマンで攻撃
ヴァイススパーク」

4000－2600＝1400

「十代

手札事故でも起こしたか？」

（いや、遊輝よ
それでも十分いい手札だと思うぞ）作者

また電波が
なんだ今日は
妙に電波が多い

「そうなんだよ
ドローカードが来なくてさ
ポツリ（なんで融合2枚とバブルシャッフルなんだよ）」

（それでも1ターン目から融合できてる時点で十分です）作者

「うん？
今変な電波が？」

「お前もか
今日は変な日だ」

「まあいいや
ターンエンド」

「俺のターンドロー
墓地のライトパルサー・ドラゴンの効果を発動手札のドラゴン族の
光属性モンスターと闇属性モンスターを1枚ずつ墓地に捨て
墓地より特殊召喚する
戻ってこいライトパルサー・ドラゴン
更に手札のダークフレア・ドラゴンの効果発動

墓地の光属性　青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）と
闇属性　ダークエンド・ドラゴンを除外
闇の炎よ舞い上がれ　来いダークフレア・ドラゴン
さらに死者蘇生を発動
光と闇を象徴せし竜よ
真理の力を持ちここに現れろ
来い光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）
初めてだなお前の力を使うのはライネス」

「そうだなマスター
何気に我の登場回数も少ないし
使用も初めてだ」

「メタ発言をするな
行くぞ十代
光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）
E・HERO（エレメンタルヒーロー）プラズマヴァイスマンに攻撃
シャイニングブレス
ライトパルサー・ドラゴンとダークフレア・ドラゴンは十代にダイレクトアタック
パルスストリーム　フレア・オブ・ダークネス」

４０００－（２８００－２６００）＝３８００
３８００－２５００＝１３００
１３００－２４００＝－１１００

「はあ負けたあああ
でもガッチャいい勝負だったぜ」

「そうだな

じゃあ外に出るか」

数日後

「じゃ、十代俺は行くぜ」

「じゃあな
帰ってきたらデュエルだ」

「ああ、もちろんだ」

そういうと俺は前の空間を歪め
中に入って行った

第１５話　冬休み前の決闘　ＶＳ十代　第４戦　究極再び　第５戦　龍とＥ（後

しまった
何故か強烈なギャグ回になってしまった
どうしてこうなった
すいません
１０連戦は無理でした

第１６話　帰ってきた男　ＶＳ人造人間（じんぞうにんげん）－サイコ・ショッ

Ｓｉｄｅ十代

冬休みに入って
生徒のほとんどが家に帰っちまった
おかげで島はガラガラ
でもさ、俺たち居残り組には最高の環境だぜ
いつでもどこでもデュエルがやり放題
これで遊輝がいればなあ
もっと楽しかったんだけど
あいつとはダイオラマ魔法球ってやつで毎日あってるけど
やっぱり４人で話したいよな

「ううん」

「俺はクレイマンを攻撃表示で召喚」

翔の場にはサイクロイドとジャイロイド
周りにいるのはデュエル中の翔と餅を焼いては食ってる隼人と大徳寺先生

パン

「フニャァアアア」

「クレイマンで攻撃」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ三人称

十代と翔がデュエルしていたその頃
別の場所
高寺というオベリスク・ブルーの生徒は走っていた

「はぁはぁはぁはぁ
助けてぇぇぇえええええ」

その男は隼人と大徳寺が餅を食べている頃
オシリスレッド寮の前まで来た

「へぇへぇ」

「だ、だれかぁ」

ガチャアアン

「は」

「ああ」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ十代

ガチャアアン

「は」

な、なんだ

「何いいい」

俺らはデュエルを中止した

「なんだ、いったいどうしたんだ」

俺は倒れている男に近づいて話しかけた

「サ、サイコ・ショッカーが」

「サイコ・ショッカーがどうした？」

サイコ・ショッカー？

「僕をおいかけて」

「え、なにわけのわからないことを言ってるんだ？」

まさか

「君は確かオベリスク・ブルーの高寺君だにゃ」

「大徳寺先生

先生なら、デュエルの精霊を研究している大徳寺先生ならきっとわかってくださいますね」

やっぱり

「デュエルの精霊」

「わあ、落ち着くのだにゃ高寺君
最初から話してみるのだにゃ」

「は、はい
あれはまだ冬休みに入る前の事でした
僕たち高寺オカルトブラザーズは」

「高寺オカルトブラザーズ？」

「同じオベリスク・ブルーの向田と井坂で組んだ
デュエルのオカルト面を研究するグループなんです
特に僕らはデュエルの起源ともいえる
精霊を研究していました
そしてあの日
僕らは今までの研究の成果を試そうと
精霊を呼び出すことにしたのです
ウィジャ板を使って」

「3体の生贄をささげろ
さすれば我は蘇える
そう文字は語りました」

「いけませんね
デュエルの精霊と心霊学を一緒にしてはダメなんだにゃあ」

「で、高寺君たちはなんて答えたの」

「分かりましたって」

おいおい

「えええ」

「カードの生贄だと思ったんだよ
それなのに」

「え、まさ…か」

「次の日
メンバーの一人向田の姿が見えなくなってしまったんだ
そして次の日には井坂が
二人とも生贄にされてしまったんだ」

ヤバくないか

「ええ（ぶるぶる）」

念のために

「冬休みだから実家に帰ったんだろ」

「二人の家にも電話したよ
でも、まだかえってないって」

「うーん」

「僕は恐ろしくなって

今日のフェリーで帰ろうとしたんです
そうしたら
船の上に
あれは確かにサイコ・ショッカー」

サイコ・ショッカーの精霊

カチャン

なんだ電気が消えた
翔たちも悲鳴を上げてる

「翔、隼人しがみつくな
おめぇえええ」

「落ち着くのだにゃ」

「お、お前は」

あの黒い男
高寺を抱えてる

「サイコ・ショッカー！！」

「あ、まて」

「待ってアニキ」

「十だぁい」

「十代君！！」

その後俺らは奴を追いかけて
送電施設についたんだ

「気を付けるにゃ
ここは島全体に電気を送る送電施設にゃ
高圧電流が」

「あ、高寺！」

走りかけていくと急に電撃が走った

「わあ」

チーーーン

ビリビリという電気の音とともに
サイコ・ショッカーが出てきた

翔たちもそれぞれ驚いてる

「先生
精霊はいるって教えてたじゃないですか」

「み、み、みたのは初めてなんだにゃ」

「おい、サイコ・ショッカー
高寺たちを返せ！！」

「そんなに蘇えりたけりゃ
俺を生贄にしろ」

「十代！」

「アニキ！」

「成程、君から発生するパワーはほかの者の並ではないな」

「しゃべったあ」

「3体目の生贄には君の方がふさわしいかもしれん」

「だが条件があるぜ
俺とデュエルしろ！！
お前が勝ったら俺は生贄になる
だが、俺が勝ったら高寺と後の二人を返せ」

「いいでしょう！！
おもしろい、君を生贄として召喚して見せましょう」

ビリビリ

「わが生贄よ
君はもう逃げられん」

「生贄じゃねえ
俺はオシリス・レッドの十代だ！」

「「デュエ「神鳴流奥義　斬空閃」「ドカアアアアアン」なんだ」

」

急に大きな音がしたと思ったら土埃がたっていた
その土埃が晴れてくると

「そのデュエル、俺が受けよう」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

サイコ・ショッカーのイベントがあったこと忘れてた
完全記憶能力？
覚えてても思い出そうとしないと無駄なの
ヤバい始まる

「神鳴流奥義　斬空閃（しんめいりゅうおうぎ　ざんくうせん）」

土ぼこりがたっちまった

「そのデュエル、俺が受けよう」

「「「「遊輝（君）？！」」」」

「なんだこのパワーは
私が１０回復活してもおつりがくるぞ」

「十代、このデュエル俺がもらう
おいサイコ・ショッカー
条件変更だ

俺が負けたら十代と俺の魂をくれてやる
だが、俺が勝ったらその3人を返し俺の手下になれ」

「遊輝、このデュエルはお「いいな、十代」あ、ああ（ヤバい、遊輝はマジだ）」

「そういうことだサイコ・ショッカー
後ろで騒いでるやつは無視してデュエルだ」

「いいでしょう
君も生贄にして見せましょう」

「契約完了だ
この契約は破られることはない」

俺はネギま世界で手に入れたマジックアイテムを使用した

「ついでだ
デス・デストロイ・デス・クライシス大気よ水よ白霧となれ
彼の者らに一時の安息を
眠りの霧」

俺、十代、サイコ・ショッカー以外が眠った

「遊輝、何をしたんだ」

「心配するな眠らせただけだ
魔法でな」

「魔法か

君は面白いものを使うようだ」

「行くぞ」

「「デュエル」」

「先攻は私
ドロー」

半透明のカードがサイコ・ショッカーの前に出てくる
一体どういう仕組み？

「私は怨念のキラードールを攻撃表示で召喚」

怨念のキラードールの攻撃力は１６００か

「手札から永続魔法エクトプラズマーを発動
互いのプレイヤーは自分のターンのエンドフェイズ
自分のモンスターを生贄に捧げることで
その攻撃力の半分のダメージを相手に与えることができる」

怨念のキラードールから白い魂みたいなものが出てきて俺にあたった
少し痛いな
でも、あのときの京都での修行に比べりゃあ

４０００－８００＝３２００

「遊輝！！」

「ターンエンドだ」

「俺のターンドロー
融合を発動
手札のブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーを融合
来い超魔導剣士（ちょうまどうけんし）ーブラック・パラディン
伏せカードくらい伏せろや
超魔導剣士（ちょうまどうけんし）ーブラック・パラディンで攻撃
超魔導無影斬（ちょうまどうむえいざん）
更に速攻魔法融合解除発動
来いブラック・マジシャン　バスター・ブレイダー
2体で攻撃
ブラック・マジシャン　ブラックマジック
バスター・ブレイダー　神鳴流奥義（しんめいりゅうおうぎ）　斬魔剣（ざんまけん）　弐の太刀」
4000ー2900＝1100
1100ー2500＝ー1400
ー1400ー2600＝ー4000

「もう1度言う
伏せカードくらい伏せろやああああああああああああ」

「ぎゃあああ」

アニメの時と爆発しようとする

「そうはさせるか
罰ゲーム発動」

罰ゲームでサイコ・ショッカーの魂をカードに封印し爆発を止める

「遊輝、サイコ・ショッカー
弱かったな」

「ああ、十代
とりあえず少しあそこで寝てる3人を記憶操作するから寝てろ【眠りの霧】」

「な、なんだ、急にねむ……」

パタン

眠った十代とさっきの3人の記憶をアニメのデュエルと同じようにいじり
人造人間(じんぞうにんげん)ーサイコ・ショッカーの描かれた罰ゲームのカードをダイオラマ魔法球の中に持っていった
その後中で解放した消えかけた人造人間(じんぞうにんげん)ーサイコ・ショッカーを俺の魔力と気で形を整え復活させた
まあ、普段は精霊化してないときついくらいにだけど
その後
何故か人造人間(じんぞうにんげん)ーサイコ・ショッカーは俺をマスターというように俺には従順?になったのは別の話

その次のフェリーの日
翔たちに帰ったことにするため帰り
十代たちは
十代たちは原作通りのことがあったと話していた

第16話　帰ってきた男　VS人造人間（じんぞうにんげん）ーサイコ・ショッカー

遊輝が作るダイオラマ魔法球はすべて転送装置でつながってます

なんとあの人造人間（じんぞうにんげん）ーサイコ・ショッカーを仲間にしました
本編でその後が語られなかった人造人間（じんぞうにんげん）ーサイコ・ショッカー
精霊界に還ったのか、消滅したのかわからなかった
あの人造人間（じんぞうにんげん）ーサイコ・ショッカー
タイタン助けてる人は多少はいたけどこっちは書かれることさえ珍しかったから
書いてみました
めちゃくちゃフラグがたってますがこのフラグの回収は遥か先です

よく考えると
人造人間（じんぞうにんげん）ーサイコ・ショッカー
めちゃくちゃ弱くね
だって伏せカードの1枚も伏せないとか

第1回遊輝パーティー紹介

遊輝のパーティーもしくは準パーティーの紹介です

名前：ライネス

種族：デュエルモンスターズの精霊

性別：♂

姿：人間形態ではブラックジャック
　普段は小龍形態
　小龍形態とは本来の姿のままハネクリボーほどの大きさに変化した姿
　本来の姿は光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）

使用デッキ：漫画版万丈目デッキをもとに強化した光と闇のデッキがメイン
　サブは遊輝と同じように大量に作っているがおもにドラゴンデッキ

好きなもの：遊輝・漫画版万丈目・十代・同族（デュエルモンスターズの精霊）・遊輝の仲間

嫌いなもの：アニメ版万丈目・遊輝に敵対するもの・遊輝の嫌いなもの

特徴：神のミスのせいでこの世界に来た
　今は遊輝のことを心から信用している

能力：飛翔能力　ドラゴンなので飛べる
　　ネギま世界にて魔法を勉強しそれと兼用することで燃費が上がった

　ネギま魔法　ネギまの魔法
　　存在そのものが精霊なのが理由か相性がよく魔法の効率がいい
　　ラテン語のものも使えるが遊輝が現存する魔法を
　　改良して日本語にしたものを使っている
　　得意属性は光・雷・闇・影
　　始動キーはライト・オブ・ダーク・ライトネス

　神鳴流　遊輝とともに習った
　　レベルは斬魔剣　二の太刀を打て本家より強い

　ブレス　ドラゴンのブレス
　　ネギま世界やゼロ魔世界のドラゴンのものを参考にエレメントブレスを打てるように

能力値：チートドローレベル　１⇒６２　参考　ユベル戦のアモンが１００レベル

　デッキ構築レベル　１⇒５６　参考　リアルな俺らのデッキ構築レベルが５０くらい

　魔力　１⇒７２　参考　ネギまの一般魔法

先生レベル５

気　　１⇒６８　参考　ネギまの一般魔法

先生レベル５

剣術　　１⇒８５　参考　ネギまの桜咲刹那

（修学旅行時）レベル２０くらい

ブレス　　１⇒１００

仮契約者：遊輝

血による契約

この契約により遊輝の持つ全能力使用可能（神様を脅しました）

仮契約カード

称号：光と闇を司るもの

アーティファクト：破滅の光と優しさの闇

（破滅の光は巨大な砲撃≪形状はバズーカ≫優しさの闇

完全回復・呪いの解除≪形状は指輪≫念じると切り替え可能）

徳性：信頼

方位：北

色調：白と黒

星辰性：月

服：ブラックジャックの来ていたやつ

名前：サイコ

種族：デュエルモンスターズの精霊

性別：♂

姿：アニメで出てきた黒いコートに包帯で顔を隠している姿
　普段はそのままサイコ・ショッカー

使用デッキ：サイコショッカー中心のロックバーンがメイン
　サブは遊輝と同じように大量に持っているがロックバーンがほとんど

好きなもの：遊輝・同族（デュエルモンスターズの精霊）・遊輝の仲間・電気

嫌いなもの：遊輝に敵対するもの・遊輝の嫌いなもの・ライネス

特徴：アニメ通り十代とデュエルしそうなところを割り込んできた
遊輝に負けた
　その後遊輝によって復活をさせられた

能力：飛翔能力　精霊なので使える
　ライネスにおさわったネギま魔法で燃費も上がった
　ネギま魔法　ラテン語のものも使えるが遊輝が現存する魔法を改良して日本語にしたものを使っている
　得意属性は闇・氷・雷・影
　始動キーはサイコ・サイバー・サイコ・サバイヴ

サイバー・エナジー・ショット　サイコ・ショッカーの技

能力値：チートドローレベル　１⇒３７

デッキ構築レベル　１⇒６３

マッドサイエンティストレベル　１⇒３６

魔力　１⇒５１

気　１⇒４２

仮契約者：遊輝

血による契約

この契約により遊輝の持つ全能力使用可能（神様を脅しました）

仮契約カード

称号：最悪の頭脳

アーティファクト：電脳増幅器（魔力・気を上げる、頭脳の強化≪形状は電脳増幅器≫）

徳性：信仰

方位：南

色調：紫

星辰性：冥王星

服：アニメで来ていた黒いコート

第1回遊輝パーティー紹介（後書き）

かなりチートです。
仮契約とはいってもこの世界じゃ当分役に立ちません。

第１７話　精霊対決　ライネスＶＳサイコ

Ｓｉｄｅ遊輝

影分身から報告が届いた
何故に影分身？という疑問があるかもしれないので説明しよう
冬休みに修行に行っていたが実際の時間にすると１００年を超す
その際まず修行チートである影分身を覚えるためにナルトの世界に行ったのだ
そこにいた神デモ隊（神様にマヤのことでデモをする軍隊）第１２番隊第２副隊長の金坂春真というナルトの世界に転生した同志に教わった
ちなみに神デモ隊は俺を元帥とし３０の部隊それに一人ずつ隊長がいてさらにその下に１０人ずつ副隊長がいる
その副隊長の下に１０人ずつの部下がいるという軍隊風のチームだ
ただ隊長や元帥といってもえらいわけでなくまとめるための形だけのリーダーだ
つまり横のつながりだ
神デモ隊のネーミングセンスは気にしないでくれ
まあそんなわけで影分身をできる訳だ
どうしてそんなことを覚えたかはやはり元帥として形だけだったとしてもまとめていたから力をつけ同志たちのように強くなり仲間を助けられる存在になりたいから
もう一つ、遊戯王の世界でもリアリストはいる
それに精霊の世界に行ったとき対策だ
あのデュエルゾンビとかデスリングとかに対処できるように
では、説明はここまでにして報告を見てみるか

報告

ナルト世界より

風遁　螺旋丸
風遁　螺旋手裏剣
風遁　大突破
水遁　水龍弾
口寄せの術
を使用可能になった

報告終了

報告を読んで俺が分身を解除すれば新たな術を使えるようになるそうだ
ということで早速分身を入れ替えた
実は俺と同じ転生者を見つけたら分身を置いて神鳴流以外はほとんどいないでさっさと次のとこ行ったからな
とはいえ時々戻してダイオラマ魔法球の中で特訓しまくったから１００年くらいたってしまったんだが
まあ報告はここまでにして特訓だ
今、ライネスとサイコが向かい合っている
サイコというのは例の人造人間（じんぞうにんげん）ーサイコ・ショッカーの愛称だ
ライネスと俺とサイコで決めたんだが
最初にライネスが
「マスター、ショッカーというのはどうだろう」
という発言でサイコが
「私は悪の秘密結社のメンバーではない
君は少し失礼じゃないか」
という風に答えて仲が悪くなったのだ
とはいえライネスは面白がっているだけのようだが

そこで訓練という形で
ライネスとサイコが戦うことになった

「ではデュエル開始」

俺がデュエル開始のコールをする
ちなみにここは当然だがダイオラマ魔法球の中だ

「「デュエル」」

「私のターンドロー
私は人造人間（じんぞうにんげん）サイコ・リターナーを攻撃表示で召喚」
出てきたのは小さい黄色いサイコ・ショッカーだ
攻撃力は６００

「更に私は手札から二重召喚を発動
このターン私は2度の通常召喚ができる
私はサイコ・リターナーを生贄に私自身を召喚する」
出てきたサイコ・ショッカー
といってもホログラムで自分自身出てないけど
やっぱり痛いんだろうな、攻撃当たると

「更に速攻召喚を発動
サニー・ピクシーを召喚」

似合わねえ
すっげえええ似合わねえ
マジで似合わねえ

サイコ・ショッカーが
あのサイコ・ショッカーが
サニー・ピクシー？
あの妖精？

「手札から命削りの宝札を発動
手札が５枚になるようにドローする
更に魔法使い族の里を発動
このカードは自分フィールドに魔法使い族がいるとき相手プレイヤーは魔法カードを使えなくする
これで君の魔法・トラップは封じた
君はどうするターンエンドだ」

これ圧倒的不利な状態かな

「我のターン、ドロー
我は手札のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する
更に我は手札のＴＨＥ（ザ）　トリッキーを手札を１枚捨て特殊召喚する
サイバー・ドラゴンとＴＨＥ（ザ）　トリッキーを生贄に
来い　闇を司る我が半身
ダークエンド・ドラゴン
ダークエンド・ドラゴンの効果を発動する
２回攻守を５００ポイント下げ
サイコ・ショッカーとサニー・ピクシーを破壊する
我が半身よ、いけ
ダーククライシス
更に強欲な壺を我は発動する
２枚ドロー
天使の施しを発動する
３枚ドローし２枚捨てる

我は流転の宝札を発動する
2枚ドロー
更に光竜の煌きを発動する
手札のドラゴンを2枚墓地に送りデッキから光属性のドラゴンを特殊召喚する
来い　光を司る我が半身
ライトエンド・ドラゴン
更に墓地の光属性　サイバー・ドラゴンと
闇属性　真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を除外し
来い　鋭き光の竜ライトパルサー・ドラゴン
更に我は命削りの宝札を発動する
手札が5枚になるようにドローする
墓地の光属性　銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）と
闇属性　レベル・スティーラーを除外し
来い　熱き闇の竜ダークフレア・ドラゴン」

絶景だな
ドラゴン4体が降臨している
それに比べサイコは調子に乗って伏せカードを伏せないんじゃなかった的な顔をしている

「速攻召喚を発動
2体の我が半身を生贄に
我自身を召喚」

サイコの時も言ったが
ホログラムで自分自身出てないけど
やっぱり痛いんだろうな、攻撃当たると

「我を含む3体の竜でアタック

ライトパルサー・ドラゴン　パルスストリーム
ダークフレア・ドラゴン　フレア・オブ・ダークネス
そして我自身の攻撃
闇の吹雪（ニウイス・テンペスターズ・オブスクランス）」

４０００－２５００＝１５００
１５００－２４００＝－９００
－９００－２８００＝－３７００

ピーーーーーーーーー

俺は笛を鳴らした

「勝負あり
勝者ライネス
それとサイコ、お前は伏せカードを伏せろ」

「これからは気を付けますよマスター」

「またデュエルしてやるぞサイコ」

「いいでしょう
調子に乗っていると次は負けますよ
ライネス先輩」

「お前らやめろ
とりあえずデュエルの訓練終わり
俺は学校行くからこれからネギま魔法の訓練をサイコにつけておいてくれライネス」

「分かったマスター
安心して言ってきてくれ」

この時俺は知らなかった
今日があのウザい、十代曰くさわやか部長との初の邂逅の日だった
ことを

第17話　精霊対決　ライネスVSサイコ（後書き）

はい、最後のので分かるように次回はさわやか部長が来ます

第１８話　さわやか部長との邂逅　ＶＳ綾小路ミツル　十代編（前書き）

今まで最長になってしまった。
あの熱血馬鹿（ナルシスト）のセリフ長すぎる。

第１８話　さわやか部長との邂逅　ＶＳ綾小路ミツル　十代編

Ｓｉｄｅ遊輝

「今日の体育はテニスを行いまーす」

何故テニス？
まさか今日があの熱血馬鹿（ナルシスト）との邂逅の日か？
いや違ってくれ
朝の特訓を見てから来たがあんなのと会いたくない
ただでさえストレスがたまってるんだ
暴走しちまう
まあ、サイコを仲間にできてよかったけど
ライネスもからかわなければいいんだが

「「「「「「「「「はーい」」」」」」」」」

クラス全員がはーいって
小学生か？
そういう俺は無視してるが

そしてテニスが始まった

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ十代

「ったく、テニスがデュエルと何の関係があるんだよ」

翔なんてへっぴり腰で返してるぜ

「鮎川先生も
本当はバレーボールがやりたかったそうですわ」

ボールが打ち返されてきた
いや、バレーボールも関係ないだろ

「どっちも同じだよ」

そういって俺はジャンプして打ち返したって

「やべ、よけろ明日香」

当たりそうになったところを謎の人影が出てきて打ち返したって誰だあいつ
しかもクロノス先生の方にってあっぶつかった

「明日香さーん!
お怪我はありませんでしたか」

さっきの男が明日香の方向いた

「大丈夫?
怪我しなかったかい?」

なんかさわやかって感じだ
というか後ろの二人、目がハートになってるけどいったいどうしたんだ?

「いえ、大丈夫です
助けていただいてありがとうございました」

「（オベリスク・ブルーの天上院明日香君かあ）」

「あのまだ何か？」

「え、いやあはははははは、失敬失敬
知らなかったよ、我がオベリスク・ブルーに君みたいな美しい人が
いたなんて」

「あの」

「え、うわ、あはははは
ちょっとキザだったかな、忘れてください
はは、はははははははは
いやあ青春青春」

なんか変なの

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

なんだよあのジャンピングスマッシュ
十代って本当に人間なのか？
俺が言えるこっちゃないけどさ
魔法使えるし、気使えるし、忍術使えるし
いや、でもおかしい

なんだあの十代の身体能力は
しかも本当に今日が熱血馬鹿と書いてナルシストと読む綾小路ミツルとの邂逅の日だったとは
ああむかつく
殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい
あの熱血馬鹿（ナルシスト）を狩りたい
そんなこと考えてると俺の方にボールが飛んできた

「隙あり！！」

相手が調子に乗っている

「隙無しだ！
いくぞ、秘剣ツバメ返し」

本来この技は
一瞬で三つの斬撃を飛ばし敵に攻撃する技だが
テニスで現在俺が使ってるのは
３つの衝撃波でテニスボールの軌道を無茶苦茶にしながら相手に打ち込むという技だ
その技が決まったと思ったその時
テニスコートの外にいたモブ女子Ａに向かっていった

「キャアア」

するとあの熱血馬鹿（ナルシスト）がやってきて打ち返したのが
あ、またクロノスに
あいつ絶対狙っているだろ
それからしばらくして授業が終わった後
保健室にクロノスに謝りに行ったのだが

「「どうもすいませんでした
ごめんなさい」」

「ごめんで済むならポリスはいらないーのね」

謝ったらこんなこと言ってきた
まあ、俺は棒読みだったけど

「でや、シニョーラ鮎川、もっと優しくお願いしますのーね」

「十代君も遊輝君もわざと出なかったのですし
その辺で許してあげてはどうですか？
クロノス先生」

ありがとう鮎川先生
あなたはいい人だ

「ノンノンノーン
それではまるーで出しっぱなしーのビールではありませんーか」

「うう？？」

鮎川先生も意味がわからないようだ
隣の十代の頭の上にも？が浮いている

「なまぬるいーの」

ダジャレかよ
鮎川先生もひいてるぞ

「ああ」

「ダジャレかよ（ー――ー）」

十代も言ってるよ

「ぐぱ

何か言いましたか、ドロップアウトボーイズ」

「つうか、直接ボールあてたの俺じゃないし」

確かに

「俺も直接当ててないし」

「だまるのーね

この期に及んで他人のせいにするなんーて

よろしい、罰として我が名門テニス部ーの一日体験入部するのーです」

「なんだそれ、無茶苦茶だろ」

「まったくだ、なんのつながりがあって」

「出ないと単位は上げませんーのよ」

職権乱用！！

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ三人称

その頃明日香たち

「明日香さーん」

「分かりましたわ、あの殿方の正体が」

「大声出さないでよ、恥ずかしい
まるでわたしが調べろって言ったみたいじゃない」

周りの生徒は明日香たち3人に目を向ける
といっても二人ほどしかいないのだが

「でもお」

「興味わきますわよ」

明日香の取り巻き
ジュンコとももえが言うには名前は綾小路ミツル
綾小路モーターズの御曹司だしい
ただのナルシストだが
デュエルの腕もあのカイザー（笑）に負けるとも劣らないらしい

「だから興味ないってば」

明日香は一切興味を持たなかったが

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

「てや、えい」

今十代に熱血馬鹿（ナルシスト）が打ち込んでいる

「はあはあ、テニス部部長ってこいつの事だったのか
しっかしこりゃあきついぜ」

女子からボールを渡されている熱血馬鹿（ナルシスト）

「ったくクロノスのヤツ覚えてろよ
うわあ」

十代の頭にボールが当たった

「大丈夫か、十代」

「立て！立つんだ遊城十代君！
これくらいでくじけちゃいけない
今頑張らないでどうするんだ！
今日という日は今日しかないんだぞ！」

何を当たり前のことを
というか十代の事も知りもしないで

「あたりまえじゃないか、なんなんだこの暑苦しい奴は」

「そし「先輩、十代は疲れてきてる、俺が交代する」む、わかった
君がそこまでやりたいというのならやらせてやろう

あと５０球やってもらおうとおもっていいたが
さっきの続きだがね明日という字は明るい日と書くのだ
……」

俺は無視しいつの間にか来ていた翔たちの話を聞く

「あの部長さわやか笑顔で言うこと芝居がかっているよね」

「ていうか意味不明なんだけど」

「いいんですわ、顔がよければ」

おいももえ、お前はそれでいいのか

「４８・４９、もうめんどくせえ
くらえ秘剣ツバメ返し」

なんてやってると

「え、あら、明日香様」

「へ、明日香君！（キラーン）」

うえ
気持ちわる
何こいつ

「やあ、明日香君、うれしいなあ
僕に会いに……う」

ざまあみろ
無視されてやんの

「ねえちょっと話があるんだけど」

「「え？」」

俺と十代はそう答えた

「さっき大徳寺先生から聞いたんだけど
万丈目君を見つけたって人がいたらしいの」

「万丈目？どこにいたんだ」

「それは本当か？痴女」

「痴女じゃないわよ
それが……」

俺らが話しているところをにらんでくる熱血馬鹿（ナルシスト）
しかも言ってる内容逆切れだろ

「離れたまえ明日香君！！」

「うん？」

「え？」

「は？」

上から十代、明日香、俺の反応だ

「あまりこういうことは言いたくないが……」

「オベリスク・ブルーの妖精ってうえ、いやかも」

翔、お前が考えていることは多分違う

「それに君は明日香君のことを痴女だなんてバカにして……」

というか目が赤い
何処の戦闘民族だよ
すげえナルシスト発言してるし

「ちょっとまて、あんたなんか勘違えしてないか？俺とこいつは別に「いまさら言い訳とは見苦しいぞ十代君！！」

いや、あんたの方が見苦しいから

「いや、だから「明日香君をこいつ呼ばわりか……十代君僕とデュエルだ」

「人の話を聞け」

まったくだ

「君もデュエリストならここは潔くデュエルで決着をつけようじゃないか」

「だから決着ってなんのだよ」

「ズバリ勝った方が明日香君のフィアンセになるのだ」

おいおい、勝手に決めて

「ちょっと待って何よそれ」

ももえはともかくジュンコと翔は呆れてるし

「そこの関係ないって顔をしている君もだ」

「え、俺？」

「君も明日香君を痴女だなんてバカにして
僕が制裁をしてやろう」

って感じでまず十代と熱血馬鹿（ナルシスト）のデュエルだけじゃなく俺と熱血馬鹿（ナルシスト）のデュエルもすることになった

「勝負だ、十代君！」

「おお、望むところだ！」

「「デュエル！！」」

始まった

「明日香様を巡って二人の殿方がデュエルだなんて、素敵すぎます！！」

「馬鹿馬鹿しい、付き合いきれないわ」……

女子三人組がしゃべっているが
明日香は熱血馬鹿のデュエルの腕以外には本気で興味なさそうだ

「そんなことねえよ、ただのバーンだ」

「え、そうなの？」

「そうだ痴女
ただバーンで勝ってるだけ
普通の強い奴とあまり変わらん」

「痴女っていうな
でもそうなの、完全に興味なくなったわ
でもどうしてそんなこと知っているの」

「禁則事項だ」

「あ、そう」

「僕のターンドロー
先手必勝、マジックカードサービスエースだ」

「いきなりマジックカードかよ」

お前が言うか

「このカードはね

僕が選んだカードの種類が何かを君があてるギャンブルカードさ
マジックか？トラップか？はたまたモンスターか？
見事あてることができればＯＫ
だがもし間違えたら十代君、君は１５００ポイントのダメージを食らうことになる」

いや、なぜそのカードが禁止カードにならん
効果が強力すぎるだろ

「面白いじゃんか（よおし）」

ガイヤがガヤガヤ言ってる

「おいおい、まさかカードを透視しようなんて言うんじゃないんだろうね」

「そうだけど」

「おいおい十代君そんなことできるわけないだろ」

「それもそうだな
じゃあ魔法だ」

「ファイナルアンサー？」

「いややっぱりやめる
モンスターだ、モンスターカード」

「本当にモンスターでいいのかい？」

「ああモンスターだ」

「運がいいね、僕が選んだカードはモンスターカードの神聖なる球体だ
僕は神聖なる球体を墓地に送る
僕はモンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンドだよ」

「俺のターンドロー
シールドクラッシュを発動するぜ
その伏せモンスターを破壊
更に苦渋の選択を発動
俺が選ぶのはこの5枚だ」

E・HERO スパークマン2枚とE・HERO フェザーマン2枚
それにE・HERO バーストレディ1枚

「E・HERO バーストレディを手札に加えたまえ」

「2枚目の苦渋の選択を発動
今度はこの5枚だ」

E・HERO（エレメンタルヒーロー） ワイルドマン2枚
E・HERO（エレメンタルヒーロー） フォレストマン2枚
E・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマン1枚

「E・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマンを手札に加えたまえ」

「3枚目の苦渋の選択を発動
最後はこの5枚だ」

E・HERO（エレメンタルヒーロー） バブルマン3枚
E・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマン2枚

「E・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマンを手札に加えたまえ」

「俺は融合を発動
手札のE・HERO（エレメンタルヒーロー） バーストレディとE・HERO（エレメンタルヒーロー） クレイマン
そしてE・HERO（エレメンタルヒーロー） ネクロダークマンを融合
来いV・HERO（ヴィジョンヒーロー） トリニティー」

あ、決まった
ってこれタイタンの時と同じじゃね

「このカードが融合召喚に成功したターン、
このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になるぜ
代わりにダイレクトアタックはできないけどな
だけど、さらに命削りの宝札発動
5枚ドロー
ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO（エレメンタルヒーロー） バーストレディ
とE・HERO（エレメンタルヒーロー） フェザーマンを除外
来い、E・HERO（エレメンタルヒーロー） フレイム・ウィングマン
更に2枚目のミラクルフュージョンを発動E・HERO（エレメンタルヒーロー） フレイム・
ウィングマンとE・HERO（エレメンタルヒーロー） スパークマンを融合
来い、E・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマン
3枚の一族（いちぞく）の結束（けっそく）を発動
このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が
1種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する
その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだ
よって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ

E・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマンは俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき攻撃力を300ポイントアップ
墓地には12枚のE・HERO
攻撃力3600ポイントアップだ」

場を整理すると
E・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマン
2500＋2400＋3600＝8500
V・HERO（ヴィジョンヒーロー） トリニティー
2500×2＋2400＝7400

「V・HERO（ヴィジョンヒーロー） トリニティーはダイレクトアタックができないけどE・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマンはできるいけE・HERO（エレメンタルヒーロー） シャイニング・フレア・ウィングマン
シャイニング・シュート」

4000－8500＝－4500

「な、いっただろ」

「ええ」

「僕が負けるなんて」

目が涙目になってるし

「いやでもまだだ
遊輝君、君への制裁が僕には残っている
遊輝君デュエルだ」

持ち直したよ
折れてくれればいいのに
まあいい

「ならば貴様の魂（ライフ）狩らせてもらおうか」

「「デュエル」」

第１８話　さわやか部長との邂逅　ＶＳ綾小路ミツル　十代編（後書き）

《サービスエース》効果
通常魔法
自分の手札からこのカード以外のカードを1枚選択し、相手にそのカードの種類を当てさせる。
当たった場合はそのカードを破壊する。
ハズレの場合はそのカードをゲームから除外し、相手に１５００ポイントのダメージを与える。

第１９話　熱血馬鹿（ナルシスト）狩り　ＶＳ綾小路ミツル　遊輝編

Ｓｉｄｅ遊輝

「いやでもまだだ
遊輝君、君への制裁が僕には残っている
遊輝君デュエルだ」

「ならば貴様の魂狩（ライフ）らせてもらおうか」

「「デュエル」」

という感じで始まりました
社長の言葉を借りるなら
強靭！無敵！最強！　粉砕！玉砕！大喝采！！
まさにそのようなデュエルにしようではないか
否！
この熱血馬鹿（ナルシスト）を合法的に殺れるのだ
社長の名言じゃあ生温い
惨殺！抹殺！大虐殺！！
くらいの気で行かせてもらおう

「俺のターンドロー
融合を発動
手札の２体の銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）［ＯＣＧ版］を融合
来い　ツイン・フォトン・リザード
ツイン・フォトン・リザードは２体のフォトンと名のついたモンスターで融合召喚ができる
そしてこのカードをリリー・・・生贄にすることでこのカードの融

合召喚に使用した
融合素材モンスターを一組墓地から特殊召喚できる
俺はツイン・フォトン・リザードを生贄に
来い　銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）［ＯＣＧ版］」

俺のフィールドに二つの十字架のようなものが現れる
それを俺が投げると
十字架のようなものの姿が変わり
銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）になっていった

「攻撃力３０００が2体だと」

「さらに俺は手札を1枚伏せターンエンドだ
さあ、貴様のターンだ
屑は屑らしく踊って見せろや」

「なんか遊輝君の様子おかしくないっすか」

「確かにおかしいわね」

「いや、あれは遊輝が切れてるからだぜ
あの状態になったらあいつはもう自重しねえ」

「アニキ、詳しいっすね
なんでそんなに詳しいんすか」

「何度もあの状態見たからな」

「ええ、僕ずっとアニキと一緒にいるけど今日初めてみたっすよ
あんな状態の遊輝君」

「それはなんていうんだっけ？
あ、そうそうあいつみたいに言うと禁則事項ってやつだ」

「ハルヒ？」

翔たちがなんか言ってるが気にしねえ
こいつを殺して潰して晒して消して潰すくらいの勢いでこいつの傲慢（プライド）を潰してやる

「ぼ、僕のターンドロー
僕はマジックカード　サービスエースを発動するよ」

そいつか
貴様は自滅の道を歩きな

「効果はさっき説明したけどもう一度言うよ
このカードはね
僕が選んだカードの種類が何かを君があてるギャンブルカードさ
マジックか？トラップか？はたまたモンスターか？
見事あてることができればＯＫ
だがもし間違えたら遊輝君、君は１５００ポイントのダメージを食らうことになる」

それは一部の場合を除いてな

「では俺はトラップを選ぶ」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「残念外れだよ
このカードはモンスターカードの神聖なる球体だ」

またかよ

「君に１５００「地獄(じごく)の扉越(とびらご)し銃(じゅう)」を発動
そのダメージ貴様に受けてもらおう」なんだと、ぐわあああああ」

４０００－１５００＝２５００

ざまあみろ

「僕はモンスターをセットしてカードを1枚伏せてターンエンドだ」

このターンで終わらせよう

「俺のターンドロー
天よりの宝札［アニメ版］を発動
お互い手札が6枚になるようにドローだ」

「ここで究極のドローカード！！」

「（ニヤリ）融合を発動
俺は手札の銀河眼の光子竜(ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン)とフォトン・レオを融合
来い　ツイン・フォトン・リザード
更にツイン・フォトン・リザードの効果を発動
このカードを生贄に
戻ってこい　銀河眼の光子竜(ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン)　フォトン・レオ」

さっきと同じように十字架を投げる
そして、また姿を銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）に変えていく

「フォトン・レオの効果を発動
ハウリング・ブロー」

吠える機械的な獅子
その効果は凶悪だぜ

「このカードの効果はこのカードの召喚に成功したとき
相手の手札をすべてデッキに戻しその枚数分俺がドローする
貴様の手札はさっきの天よりの宝札［アニメ版］の効果で6枚」

デッキにカードを戻す熱血馬鹿（ナルシスト）
涙目でいい顔だ
だがまだ止まらない

「6枚ドロー
俺はシールドクラッシュを発動する
その伏せモンスターを破壊」

手札は8枚

「遊輝の手札おかしくないかしら
あんなにいろいろやってるのに8枚とか」

「そうっすね
おかしいっす」

「翔、あきらめろ
遊輝がいうにはあれが遊輝クオリティーだってさ」

「なんかアニキが頭がよくなってる気がするっす」

なんか漫才？やってるけど無視だ
目の前の熱血馬鹿（ナルシスト）を潰すんだ

「さらに融合を発動する
フィールドのフォトン・レオと手札のフォトン・ケルベロスを融合
三度（みたび）現れろツイン・フォトン・リザード」

手札は6枚

「俺はアンデットワールドを発動
効果によりフィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱う
ツイン・フォトン・リザードの効果を発動
戻ってこいフォトン・レオ　フォトン・ケルベロス
フォトン・ケルベロスの効果
このカードが召喚されたターン
お互いにトラップを発動できない」

「なんだと！！」

手札は5枚

「3枚の一族（いちぞく）の結束（けっそく）を発動
このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

その種族のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップするだ
俺の墓地のモンスターもフィールドのモンスターもアンデットワー
ルドの効果によりアンデット族
よって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力２４００ポイントアップ
更に団結の力２枚を１体の銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）に装備」

手札０枚

銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）団結の力装備
３０００＋２４００＋４０００＋４０００＝１３４００
銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）×２
３０００＋２４００＝５４００
フォトン・レオ
２１００＋２４００＝４５００
フォトン・ケルベロス
１３００＋２４００＝３７００

「あ、ああ」

怯えてる
いいざまだ

「全員でダイレクトアタック
フォトン・ケルベロス　フォトン・ファング
フォトン・レオ　シルバー・ファング
そして３体の銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）よいけ
破滅（はめつ）のトリプルフォトン・ストリーム」

２５００－３７００＝－１２００
－１２００－４５００＝－５７００

ー５７００ー１３４００ー５４００ー５４００＝ー２９９００

「ぎゃあああ」

「はあ、すっきりした
どうしたみんなそんなひいて」

十代に翔、明日香にその取り巻きのジュンコとももえも引いてる
いったいどうした

「う、う」

「う？」

「うえええええええええええええええええええええええええええええええええええええん」

「「「「「えええ！！！！」」」」」

俺以外の５人が熱血馬鹿（ナルシスト）の様子を見て驚いてる
あ、走って逃げた
じゃ、俺も帰るか

「みんな、じゃあな

アディオース！！」

俺は寮の自分の部屋に帰って行った

第２０話　番外　冬休みの修行その１　神鳴流

Ｓｉｄｅ遊輝

ふう、逃げ帰ったな
これ以上の面倒はもう御免だ
あの熱血馬鹿（ナルシスト）と原作通りならもうかかわらないだろう
でもやっぱまずかったか
まあいいか
教える側がいなくなったしテニス部１日入部も終了だろ
まさか明日仕切り直しはないだろ

「それにしてもこれを見ていると冬休みを思い出すな」

そういって見ているのはリアルに真剣の
黒刀・黒曜舞（こくようのまい）と白刀・破邪銀龍（はじゃのぎんりゅう）
長さはそれぞれネギまの桜崎刹那の夕凪と同じくらいの長さ
素材は黒刀・黒曜舞（こくようのまい）が黒曜石を中心に玉鋼（たまはがね）やアダマンタイトを使って作られた
白刀・破邪銀龍（はじゃのぎんりゅう）は破邪の銀（ミスリル）を中心に白銀（プラチナ）などを使って作られた
作る際に魔力を素材に込めて渡したので強力で特殊な剣になっている
黒刀・黒曜舞（こくようのまい）は妖刀に
白刀・破邪銀龍（はじゃのぎんりゅう）は破邪の銀（ミスリル）を使ったせいか聖剣に

それにしても本当に思い出す
あの修行の日々

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ過去の遊輝

おおっとネギまの世界についたか
じゃあ神鳴流を習いますか
よし京都、京都っと
そう思って俺は何もない空間に手を出して開くと
空間が割れ
そこに入って行った

「よしついた京都って
アルェェェェ、どうしてこんなに建物が古いんだ
いくら京都でもおかしくないか」

そう周りにあったのは明らかに平成には似合わない建物ばっかだった

「あなた様はもしかして」

そう考えてると
後ろから何か声が聞こえて振り返った

「やっぱり元帥！！」

元帥って
こいつ転生者か
神デモ隊なら顔は全部覚えたんだがこんな奴いたか

「誰だっけ？」

「僕ですよ

神デモ隊第２６番隊第９部隊第７番　近衛孝樹ですよ」

「あの孝樹か！変わったな
それにしても今は何年だ」

「１８２０年ですよ元帥」

「元帥はやめろ
遊輝でいいって孝樹」

実はこいつとは生前からの知り合いなのだ
だけど元帥ってずっと言ってくる変な奴

「そうか、道理で
それにしても偶然お前に会うとはとんだご都合主義だな
そういえば、お前近衛って名字だし近衛家に生まれたのか？
だったら神鳴流に俺を入れてもらいたいのだが」

「いいですけど遊輝は遊戯王ＧＸの世界に行ったのでは？
何故ここにいるんですか？」

「敬語もやめろ
それはだな、ちょうど冬休みに入ったからいろんな世界に行って修行しようと思ってな
だから修行チートの影分身はもう習ったぞ
第１２番隊第２副隊長の金坂春真にな」

「そうなのか遊輝
だが、遊戯王ＧＸの世界ならデュエル以外で戦闘はないと思うが」

「それはなリアリスト対策と
精霊の世界に行った時の対策だ
デュエルゾンビとかデスリングとかに対処できるようにな
それに何よりも遊戯王ＧＸの世界が終わったら別の世界を旅する気だし
ところでお前、ほんとに口調変わるな早いな」

「口調の事は気にするな
じゃあ、とりあえず本山に行こうか
歩きだけど大丈夫？」

「問題ないし歩く必要もない」

「え？」

そういうと俺は何もない空間に手を伸ばした
すると空間が割れる

「じゃあ行くとするか
本山の風景を思い浮かべてくれ」

「え、わかった」

じつはこの能力
時空間移動能力だが強く場所のイメージをすることでその場所につなげるのだ

「よし行くぞ」

俺らは空間の割れ目に飛び込んだ

「そういえば、お前不老不死？」

「勿論
もう８０くらいは生きてると思います」

「どうしてそんなことに？」

「不老不死頼んだら
何故か赤ちゃんの時に大妖怪　九尾の狐を封印する人柱（ひとばしら）にされて
ナルトみたくなったんです
だけど、なぜか封印解けるまで死なないという変な呪いみたいのがかかったっていう設定に
あの馬鹿神がして」

「成程、なんて言ってるうちについたみたいだ」

よっと
俺たちは本山にある建物前に突然あらわれたのだが

「お前たち何者だ」

「名を応えろ」

「さもなくば殺す」

ってこれはないだろ
と思っていると

「俺の友達だよ、早く通してくれないかな（黒笑）」

怖い、なにいつの間にそんなスキルを

「あ、あなたは孝樹様
分かりました、どうぞお通りください」

そうして俺らは中に入って長と面会することになったんだ

「近衛丸、こいつに神鳴流を教えてやってくれないか
頼む」

「孝樹様の頼みならもちろん教えますがこのｋ「大丈夫だ、裏を知っている」なら問題ありませんね
それに孝樹様直々に教えろなどというからには早々鍛えたがえが・・・ふふふ」

なんか嫌な予感がしてきたが大丈夫か？

2年後
一気に飛びすぎだって
いやだ、あの修行の日々を思い出させるな
最初のうちはよかったんだ
ダイオラマ魔法球も影分身も知らなかったから
夜にはダイオラマ魔法球に入ってゆっくり寝て修行を影分身で行って行うのを繰り返せたから
それがばれてからは余計きつくなった
１０体影分身出して
走るときはほかの人がビリだったら本山回り5周追加なのに
俺だけ俺と1位の間の人数×１０周追加とか
長から一本取るまで永遠に打ち込みとか

しかも平気で奥義とか使ってくるし
こんな感じで

「とりゃああ」

と俺が横切りのように打ち込む

「甘い」

と剣を俺が切りかかった方で下に向けてガードをする

「神鳴流奥義(しんめいりゅうおうぎ)　斬空閃(ざんくうせん)　神鳴流奥義(しんめいりゅうおうぎ)　斬鉄閃(ざんてつせん)　神鳴流奥義(しんめいりゅうおうぎ)　斬岩剣(ざんがんけん)」

と連続で打ってくる

「ぎゃあああ」

俺ガードできず全部食らう
怪我する
陰陽術で即回復
すぐに再開

とこれの繰り返しだったんだ
それで今日免許皆伝

「今日で免許皆伝だ
よく頑張ったな遊輝君

そこで刀を作ってあげようと思うんだがどうする」

「はい、お願いします」

ちなみにここは神鳴流の道場ではなくダイオラマ魔法球の中だ
俺だけにここで特別メニュ―を組んでたし
ほかの神鳴流の人はもう俺が免許皆伝したと思っている
理由は簡単
道場で一番強い人を倒した
それだけ

「あと素材はこれでお願いできますか」

「いいが、なんだこの魔力は
ものすごい量だぞ」

「俺の能力の一つに限界点突破というのがありまして
それのおかげで魔力や気も使えば使うほど増えるんです
それのおかげで増えた魔力を大量にこめたんです」

「成程、孝樹様と同じというわけか
確かにその通りだな」

この会話で分かるように長は孝樹と俺の秘密を知っている
ちなみに孝樹は今いなく
前にあったエヴァンジェリンと一緒だ
なんか桃色オーラ出していたが

「お願いします」

「分かった」

それから数か月後
俺のところに刀が届いた

「黒い方が黒刀・黒曜舞（こくようのまい）で白い方が白刀・破邪銀龍（はじゃのぎんりゅう）だ」

「分かりました
これから頼むぞ黒曜舞（こくようのまい）　破邪銀龍（はじゃのぎんりゅう）」

「で、これからどこに行くんだ」

「旅を続けようと思います
またここには来ます」

「そうか、怪我の無いようにな」

「ありがとうございます、長」

そういって俺は次の世界にいった

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

第２１話　闇夜の巨人　十代ＶＳ大原＆小原

Ｓｉｄｅ遊輝

本当に懐かしいな
もうすぐ危険なイベントも増えてくるし常備しておくか？
そうだ、ついでにあれらも常備しておくか
そうして取り出したのは
デクナッツの仮面・ゴロンの仮面・ゾーラの仮面・鬼神の仮面・金剛の剣
そしてムジュラの仮面
デクナッツの仮面・ゴロンの仮面・ゾーラの仮面・鬼神の仮面・金剛の剣はリンクさんの修行終了時に免許皆伝祝いにもらった
ムジュラの仮面は修行の時現れた悪い転生者を倒し神様のところに連れて行ったら
お礼としてもらった
詳しいことはまた別の話ってな
まあ、メタな発言はここまでにしておいて
旅の途中で手に入れたＩＳの量子変換を利用して中に突っ込んでおいて
じゃあ寝るか

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ三人称

遊輝たちが綾小路ミツルと戦ってから数日後の夜
アカデミアのとある場所でモブオベリスク・ブルー生徒がデュエルをしていた

「うわぁあああああああああああ」

オベリスク・ブルーの生徒はデュエルに負け後ろに吹き飛ばされる
その時にカードが周りに散らばっていく

「ひぃいいいい」

そのオベリスク・ブルーの生徒に近づいていく巨大な影
その巨大な影は散らばったカードの中からウルトラレアカード
パーフェクト機械王(きかいおう)だけを取る

「レアカードはもらっておく」

「はあああああ」

震えるオベリスク・ブルーの生徒
そして巨大な影は続けて言葉を放つ

「これに懲りたらでかい態度はあらためるんだな」

そういって巨人は去っていく
それに安心するオベリスク・ブルーの生徒
その方向にはニヤリと笑う一人のラー・イエローの生徒がいた

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

いま、俺らはアカデミアの廊下を歩いている

するとオベリスク・ブルーの生徒が話しているのを見かけた

「昨夜（ゆうべ）」

「レアカードを」

「また」

それを見て十代がつぶやく

「なんだ」

そうするとオベリスク・ブルーの生徒が逃げるように離れていった

「なんか気に入らないな、こそこそしやがって」

「確かに」

俺も相づちを打つ

「オベリスク・ブルーの奴ら、また何か企んでるのかも」

「いや、多分あの噂のせいだろう」

「噂？」

十代が訝しんでるな

なんかこの状況、テレビで見たけどなんだっけ

「オベリスク・ブルーの奴らにデュエルを吹っ掛けるデュエリスト

がいるらしいんだな
それも禁止されているアンティールールのデュエルを」

「ああ、その噂僕も聞いたことある」

「詳しくは分からないけど、そのデュエリストは雲をつくような大男だしいんだな」

雲をつくようなって
誇張しすぎだろ

「うん、うん」

って何うなづいてんだ翔は

「そいつは夜しか現れないんだな
だから闇夜の巨人デュエリストって呼ばれているんだな」

ちょっと待て
それは夜に外に出るオベリスク・ブルーが悪いんじゃないか
そもそもアンティールールを受けるのもおかしい
そんなことを考えていると
独り言を言いながらクロノスが来た
何度見ても気持ち悪いな
3次元だから余計に
あ、こっち来た

「そこのドロップアウトボーイズ」

「なんですか白面(クロノス)先生」

「わ、クロノス教諭」

「なんかシニョール石崎の言い方に違和感を覚えたのーね
まあそれはいいのーね
あなたたちーに特別課題を与えるのーね」

「「特別課題？」」

俺と十代の声がシンクロしたが
確かこれは、うん間違いない
地球（ほし）の本棚（弱）でもそう出た

「これをうまく解決できたーら、デュエル理論のレポートを免除するのーね」

「ほんとか」「マジで」

俺と十代はまたしても心がシンクロした

「ええ、ヤバいよアニキィ」

「ほんとなのーね、この目を見るのーね（ニコリンチョ）」

「おっしやるぜ！」「俺もだ！」

「「ええ」」

「十だぁい」

「で、なんだその課題って」

さすが十代、行動が速い

「今、この学園でアンティールールでデュエルを挑む輩がいるのーねそいつをつか「成程、そいつを追い出すなりなんなりしてこれからの被害をなくせばいいんですね」

くう、そのとおりなのーね（ほんとは正体を暴かせようと思っていたのーに）」

「闇夜の巨人デュエリストを？」

なんか焦ってる

「とにかくしっかりやるのーね、カンゾーネ」

カンゾーネって何？

去っていく白面（クロノス）

「よおし謎のデュエリストを探すぞぉ」

「勿論だぁ！！」

「でもアニキに遊輝君、こんなの引き受けてまずかったんじゃ」

大丈夫、俺犯人知ってるし

まあ、今回は名探偵十代に任せるけど

「ええ？」

「クロノス教諭なんだぞぉ」

「何言ってるんだ
レポート免除されて強い奴とデュエルできるんだぜ」

「デュエルはともかくレポ免は嬉しい」

「もぉう、アニキと遊輝君ったらぁ」

「仕方ないよ十代と遊輝だから」

ため息つかれたがレポ免は嬉しい

「で、どうするのアニキ」

「？」

「謎のデュエリスト探しだよ」

「それなら問題ない」

「え、遊輝君何か考えあるの？」

「ああ、俺が裏ルートで手に入れたオベリスク・ブルーの制服を着て夜にうろうろすればいい」

「もっている理由が気になるっす」

「禁則事項だ」

「そうっすか」

Ｓｉｄｅａｕｒｏ

Ｓｉｄｅ十代

今俺らはデュエルリンクに来たんだけど

「あ、ラー・イエローの方が勝ってる」

「いい勝負だな」

「確かに」

「どうした、お前のターンだぞ」

「ええっと、はあ」

あのオベリスク・ブルーの生徒マナー悪いな
相手が考えてるのにちょっとひどくないか

「うぅ？、十代手札みてみろ」

遊輝が手札みてみろって言ってきた
何かあったのか？

「おお、アースクエイクなんて洒落（しゃれ）たカード持ってるじゃん
これであいつの勝ちは決まりだな」

「さっさとしろよ！！

こっちが手加減してやってるんだぜ！！」
あいつ本当にマナー悪いな
「はあ」
「ラー・イエローが何やっても無駄だよ」
「どうせ勝てる訳ないんだ、早くしろよ」
「ええっとぉ」
「攻撃するのかしないのか、さっさとしろ！」
「へぇ、はい！！
猛進する剣角獣で攻撃します、あ」
「はぁ？」
「何やってんだ？」
「え？」
遊輝のいうとおりあいつ何やってんだ
そこはアースクエイクを使うところだろ
「リバースカードオープン！！援軍
このカードの効果でモンスター１体の攻撃力が５００ポイントアップ！
いけぇ切り込み隊長」

「うう、あぁ」

「勝てたデュエルなのに」

「確かに」

「小原ももう少し気が強ければな」

「三沢君」「空気（みさわ）」

「なんか変な響きが
まあいい、実力はあるんだがデュエル本番になると気の弱さが出て
負けてしまう」

そうなのか
デュエルは楽しくやるもんだと思うんだけどなあ

「お前みたいなやつはいつまでたってもオベリスク・ブルーに上が
れるもんか」

「ああ、く」

「「「はっはっはっは」」」

「さっさと辞めてしまえばいいんだ」

あ、あいつ今の殺気は

「十代！」

遊気も気づいたみたいだな

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

「十代！」

あんな分かりやすい殺気、もしあの二人がダイオラマで修業中じゃなかったら警戒態勢に入ってるぞ

「何っすか」

「いや、なんでもない」

「ところでお前たちは見学か？」

「ちょっと犯人を捜しに」

「犯人？」

「闇夜の巨人デュエリストを探してるんだ」

「ああ、噂は聞いているが」

あれが大原か

「おお、大きい奴だなぁ」

お前が言うか

「ほんと、アニキもしかしてあいつが」

「彼を疑ってるのか？違う違う」

「でも、あんな大きい奴そうはいない」

「はは、大原君っていうんだ
彼はデュエリストでなくゲームデザイナーを目指している」

「そっかぁ、でも」

あいつからは殺気がないな
それから俺と十代が走っていく

「アニキィ」

「遊輝」

走って行ってあの二人のとこに行った

「おおい、ちょっと待てよ」

「お前が謎のデュエリストだな」

それは直球すぎるな
で、話していると
大原と小原は言いがかりはやめろって言って去って行った
翔と隼人は原作通り、否定してるな

その日の夜

じゃあ着てって

「うわぁあああ」

「アニキ」

着る前にこれかよ

って俺も追いかけてっと

そして森の中

「僕のレアカードが」

「奴はどこへ行った？」

そして指でさした方に向かう

「そっちか」

「確かに向こうから殺気が」

翔たちも叫びながら追いかけてくる

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ十代

「まてぇえええええ」

見つけた

「お前が闇夜の巨人デュエリストだな！」

「確かにでかいな」

「うわあ、本当にでかい」

翔と隼人ビビってるし

「やっと会えたな、俺とデュエルしようぜ
お前とやるにはアンティールールだったな」

『クリクリー』

「おい、マジか」

「そうか俺を信じて一緒に戦ってくれるんだな」

あ、遊輝にも通じた

「俺が負けたらこれをやる」

「アニキ！それは」

「デュエルキング武藤遊戯にもらったレアカードだ」

翔と隼人が心配してる

「いいだろう後悔するなよ」

「へへ、行くぞ」

「「デュエル」」

「俺のターン、ドロー
俺はジャイアント・オークを攻撃表示で召喚」

「いきなり攻撃力２２００のモンスターを召喚するなんて…」

「さすがにオベリスク・ブルーを倒してきただけのことはあるなあ」

「だが、一度攻撃したら守備表示になっちまうモンスターだ
そして守備力は０、そんなに怖い相手じゃないぜ」

「俺のターンは終了だ」

「結構普通だな、俺と十代だったら（ボソ）」

「遊輝君、何か言ったすか」

「なんでもない」

俺には聞こえてぞ、遊輝

「俺のターン、ドロー」

『クリクリー』

「お前を渡さないためにも頼むぜ！
俺はハネクリボーを守備表示で召喚
カードを3枚伏せてターンエンドだ」

なんだ、この違和感

「ああ！」

「俺のターン、ドロー
ジャイアント・オークでハネクリボーを攻撃」

「ありがとうハネクリボー
トラップカード発動ヒーロー・シグナル
このカードの効果によりデッキからＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディを特殊召喚」

「よし、これでジャイアント・オークを倒せる」

「甘いな」

「確かに」

「う？遊輝まで？」

「俺はさらにセコンド・ゴブリンを攻撃表示で召喚」

「ええ？モンスターカードなのに魔法スロットへ？」

「このカードは１（ワン）ターンに一度だけ装備カードとしてジャイアント・オークに装備し

攻撃表示に戻すことができる」

「ええ、そんなぁ」

「よく考えられたコンボだ」

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー
俺は手札からマジックカード融合を発動
フィールドのＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディと手札のＥ・ＨＥＲＯ
　クレイマンを融合
来い　Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ランパートガンナー　守備表示
ランパートガンナーの効果発動
このカードは守備表示のまま相手プレイヤーに攻撃力の半分のダメージを与える」

４０００－１０００＝３０００

「あ、青いの吹き飛んだ」

翔たちは驚いてるけど遊輝はやっぱり気づいてたな

「ど、どうしよう」

「いい加減出てきたらどうだ？ちゃんと向かい合ってデュエルしようぜ」

「「え？」」

「その通りだ、出てこないなら」

「ちょっと待て遊輝、お前は何しようとしてるんだ」

「なにって、岩を斬る」

「無茶苦茶だぞ、それにその刀何処から」

「禁則事項だ」

「そうかよ」

また翔たちは驚いてる

「どうしてわかった」

「いや、大原から殺気でてないし、人形みたいだったぞ」

「遊輝、そこは俺のセリフだろ」

「そうだ、こいつは俺の指示通りにデュエルをしていただけだ」

「昼間のデュエルの時もお前殺気出してたし」

「無視かよ、そしてまたかよ

まあいいや、お前本当はかなり強いんだろ」

「だったらなんだってこんなことを?普通にデュエルすれば?」

「それができれば苦労しない!!

俺だって好きで緊張してるわけじゃないんだ
デュエル場に立って、相手にプレッシャーをかけられ、なにがなんだかわからなくなって負けてしまう
大原だってそうだ
からだがおっきいてだけで怖がられたり、邪魔者扱いされたりオベリスク・ブルーの奴ら、馬鹿にしやがって！」

「そんなことして意味があるのか」

「なにぃ」

「デュエルで負けて悔しいなら正々堂々デュエルで勝てるようにすればいい
その方がきっとデュエルも楽しいぜ」

デュエルは楽しむものだし

「うるさい、うるさい
どんなことしたって俺たちが勝つ！
行くぞ大原」

「ううう」

「俺のターン、ドロー
俺はキング・ゴブリンを攻撃表示で召喚」

「攻撃力0？」

「更に手札に手札にある戦士族モンスターを墓地に捨てることでゴブ・ゴブリンを特殊召喚する

守備表示だ！
キング・ゴブリンの特殊能力発動！
このカードの攻撃力・守備力は他のフィールド上にいる悪魔族の数×１０００ポイントとなる！」

小原と大原、動きがシンクロしてるな
じゃなくてやばい、ってことは

「攻撃力３０００！」

「そんなぁ」

「十代！っく引きがよくないのか」

「いけ、キング・ゴブリン、ランパートガンナー　を攻撃
ジャイアント・オークでダイレクトアタァック」

「うわぁああ」

４０００－２２００＝１８００

「ジャイアント・オークはセコンド・ゴブリンの装備カード効果で攻撃表示に戻る
俺のターンは終了だ、どうだ！俺はホントは強いんだ！」

「いいや、お前は他人の手を借りて強くなった気でいるだけだ
それじゃ、本当のデュエリストにはなれない」

「ううう」

「俺のターン、ドロー
手札からマジックカード強欲な壺を発動
デッキからカードを2枚ドロー
俺は融合を発動
手札のＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンとＥ・ＨＥＲＯ　エッジマンを融合
来い　Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン
更にフィールドに伏せていた天よりの宝札［アニメ版］を使用
手札が6枚になるようにドロー
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマンの効果で手札を４枚捨て
お前のフィールドのモンスターをすべて破壊」

「なに！」

「Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマンでダイレクトアタック
ヴァイススパーク」

３０００－２６００＝４００

「う、く
だがまだライフポイントは残る」

「いんや、このターンで終わりだ
マジックカード融合解除
これで最後だＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンとＥ・ＨＥＲＯ　エッジマンでダイレクトアタック」

４００－１６００－２６００＝－３８００

「す、すごいよ、アニキ」

「怒涛の攻撃だったな」

「少しヒヤッとしたぞ」

「俺たちの負けだ、好きにしろ」

「小原君、たの「分かった」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

「分かった」

「おい遊輝」

「じゃあちょっと手伝ってくれないか」

「え？」

翌日

「というわけで闇夜の巨人デュエリストには逃げられましたが
勇気ある小原君と大原君がデュエルで勝ったおかげでレアカードを
取り戻せました
奴も当分懲りて出てこれないでしょう
これが取り返したレアカードです」

「そうなのーね？

分かったのーね（これで一つめんどくさいのが片付いたのーね）」

「では約束通りレポ免で」

そういて俺は消えた

「でも、よかったのかなこんなだますような真似して」

「いいんだよ、これできっとお前らも見下されないよ」

「ありがとう遊輝君」

「ありがとう・・・」

そうこの二人がデュエルで勝って闇夜の巨人デュエリストを倒したことにしたのです
これでこの二人に、いやラー・イエローに対する対応も変わるだろうレポ免だしハッピーエンドだ
こうして闇夜の巨人デュエリスト事件は幕を閉じた
あれ、俺は誰に説明してるんだ

第２１話　闇夜の巨人　十代ＶＳ大原＆小原（後書き）

おまけ

「そういえば十代
お前、ダイオラマ魔法球の中と外とでしゃべり方違くないか？」

「ああ、なんでか変わっちまうんだよなあ
どうしてだろう」

「世界の修正力ってやつとかだったりして」

「もしかしたらそうかもな」

第3回主人公プロフィール（前書き）

主人公のプロフィールの更新がおかしいくらい早い気がする作者です
自分のせいなんですけど
それと今回のプロフィールから系統を少し変えます
あと、ネタバレ注意

第3回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長　十代と同じくらい

体重　５０キロくらい

顔　　ふつう

好きなデッキ　ドラゴンデッキ　速攻展開デッキ　強奪デッキ　サイバーデッキ

好きな人　性格がいいやつ　デッキの実験に手伝ってくれるやつ

十代　仲間

嫌いな人　めんどくさいやつ　ナルシスト　馬鹿神　綾小路ミツル

特技　　フラグメイク【無意識】　読書

プロフィール　まず金の荒稼ぎのためにこの世界に
卒業したらどの世界に行くか検討中
性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。
前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖になっている。
最近十代との友情に芽生え前よりもデュエルが好きになってきている
いつも面倒をかける馬鹿神が嫌い
だが、そのたびに天使とともに折檻して新しい能力

をもらっている
拷問だが
冬休みの修行で能力がとんでもないことに

能力値　（新規）

フラグメイカーレベル　４⇒３２

チートドローレベル　２５⇒９６　ただしキレると測定不能に

デッキ構築レベル　２０⇒１３２

マッドサイエンティストレベル　５⇒７６

魔力　５⇒３７２　現在リミッターで５０レベ位に

気　５⇒４５７　現在リミッターで５０レベ位に

戦闘術　１⇒７２６　参考　ネギまのナギが４００くらいかな？

チャクラ　１⇒５６０

レベル１と未使用は非表示

能力　（新規）

第１話参照

不老不死

特殊な不老不死で肉体年齢を任意で変化できる
神様曰くやりすぎると地獄に即刻落とされる

時空間移動能力
時間と空間を超える能力
時間を超える能力は過去・未来に行ける
空間を超える能力はドラえもんのどこでもドア強化版
二つを合わせることで異世界に行ける

４次元ポケット改
ドラえもんの４次元ポケットみたくなんでも出せるポケット
神様がいろいろ入れてる
ただしその世界にあったものしか取り出せない

第１０話参照

絶対記憶能力
転生前の記憶を含むあらゆる記憶を絶対に忘れなくなる能力
ただし覚えすぎるとオーバーヒートする

瞬間記憶能力
一瞬でも見たものを完全に覚える能力
光の速さでも見れば覚える

圧倒的な脳の容量
この世のすべてを覚えても潰えない脳の容量
これのおかげで絶対記憶能力のオーバーヒートが起こらない

地球（ほし）の本棚（弱）
地球の本棚の縮小版

自分がおぼえているものの中から必要な知識を引き出す能力
地球の本棚と違い問題などの答えなどを問題を考えるだけで知識を呼び出せる

描写をしないが第１１話の件で神を天使とともに折檻して手に入れた能力

魂容量１０倍
自分の本来の魂の容量を１０倍ほどに増やす
これによりより強い力を入手可能に

限界点突破
鍛え続けることで限界なく際限なく強くなる能力

魔力＋気
ネギまの一般魔法先生並みの魔力と気を使えるようになった
普通はあまり上がらないが限界点突破により魔力を使えば使うほど気を使えば使うほど最大値が上がる

ダイオラマ魔法球生成
自分の望むダイオラマ魔法球を作る能力
例としては
中では年を取らない１時間が１日になる別荘
トリコの食材が出てくる別荘
いろいろな武道を手ほどきしてくれるロボがいる別荘など
冬休みの修行（ただし未使用も大量にあるのでほんの一部）

神鳴流
ネギま世界の剣術

弐の太刀ももちろん打てる

ネギま魔法
かなりの魔法が使える
基本的に既存の魔法を自分が改造した日本語バージョンを使うが
ラテン語のものも使える
適正は光・闇・影
始動キーはデス・デストロイ・デス・クライシス

秘剣ツバメ返し
Ｆａｔｅ世界のとある英霊を消滅寸前まで追い込み無理やり教えてもらった

ナルト忍術
その辺の忍者は軽く倒せる程度の腕
ただ今影分身修行中

緑勇流
ゼルダの伝説のリンクのあらゆる戦闘術
パチンコから弓矢、爆弾にトワイライトの主人公が金狼に教わった
剣技も教わった

道具（アイテム）　（新規）

黒刀・黒曜舞（こくようのまい）
黒曜石を中心に玉鋼（たまはがね）やアダマンタイトを使って作られた
ネギま世界で神鳴流免許皆伝の時に作っていただいた
魔力を込めて作ったので妖刀になっている

白刀・破邪銀龍（はじゃのぎんりゅう）
破邪の銀（ミスリル）を中心に白銀（プラチナ）などを使って作られた
ネギま世界で神鳴流免許皆伝の時に作っていただいた
破邪の銀（ミスリル）を使ったせいか聖剣になっている

金剛（こんごう）の剣
リンクの修行免許皆伝時にもらった剣
刃こぼれせず高い攻撃力と長いリーチを持つ

デクナッツの仮面
リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面
装備するとデクナッツの姿になる
デクナッツとしての力として魔力を消費してシャボン玉を発射する
ことができる
更にネギま魔法の適性が
水・風・闇・影に変化する
闇があるのは呪いの力を封じ込めた仮面だから

ゴロンの仮面
リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面
装備するとゴロンの姿になる
ゴロンの力によりゴロンの巨体を生かしたパンチやプレスは強力
炎に強く、溶岩の上を歩いてもダメージを受けない
転がりダッシュはある程度のスピードがつくと、爆発的なスピード
を出す
この際、魔力を消費して全身からトゲが生え攻撃力が発生する
更にネギま魔法の適性が
火・光・影になる
光がある理由はゴロン族の英雄、ダルマーニ3世の魂をいやすこと
で手に入れた仮面だから

ゾーラの仮面
リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面
装備するとゾーラの姿になる
ゾーラの力により水中を自在に泳いだり、水底を歩くことができる
水中、地上を問わず魔力を消費して電流のバリアを張れる
歩行時は両腕のヒレを飛ばすブーメラン攻撃も可能
更にネギま魔法の適性が
水・風・氷・雷になる
雷がある理由はゾーラ族の人気バンド「ダル・ブルー」のギタリスト、ミカウの魂をいやすことで手に入れた仮面だから

鬼神の仮面
リンクの修行免許皆伝時にもらった仮面
装備すると白い服を着たような姿で、「8」の字を描いたような奇妙な刀身の両手剣を常に構える姿になる
更に鬼神としての力として剣を振ると魔力を消費して光線を撃てる
そして強大な魔力と気、魔の力を得る
魔力と魔の力は違うもので魔の力は魔物などという意味の魔である
更にネギまの魔法適性が
光・闇・影・雷そして特殊属性の重力に変化する

ムジュラの仮面
リンクとの修行中にれた悪い転生者を倒し神様のところに連れて行ったら
お礼として神様に（無理やり）もらった
本来のムジュラの仮面は長い間呪いの儀式に使われてきたせいで邪気がたまり
意思を持った魔物となって月を落とすことによって
タルミナを滅ぼそうとしたところをリンクに倒され邪気と意思

そしてかなりの魔力を失った
しかしこの仮面は月をも動かすだけの魔力をそのまま持っており
強力な魔の力が込められている
それによってリンクが言うにはリンクの修行免許皆伝時では４０％
くらいしか使いこなせていないらしい
これを装備するとネギま魔法の適性が
氷・闇・影そして特殊属性の重力に変化する

収納ブレスレット
ＩＳの世界の量子変換をもとに作った収納器
形は腕輪

仮契約者　ライネス・サイコ
なぜか主人にしか慣れない

第２２話　究極のドロー対決　十代ＶＳ大山

Ｓｉｄｅ遊輝

「待ってよアニキ」

「十代、落ち着けよ」

「今日こそは、今日こそは」

なんで十代がこんなにあせっているかというと
ドローパンのせいだ
翔の説明によると
ドローパン
コロッケ、焼きそば、ピザなどのパンが
外からは見えない袋に隠されている購買部の名物パン
何が出るかわからないパンに我々がこれほどロマンを掻き立てられるのにはわけがある
デュエルアカデミアで飼われている黄金の鶏
こいつが１日に１度しか生まない黄金の卵を具に使った卵パン
このレアなパンをゲットするために
我々は日々このパンをドローするのだ
そして連続２０回卵パンゲットの記録を持つアニキこそ
キング・オブ・卵パンの称号に相応しい
でも
９回連続はずれているらしい
ちなみに俺は３０回連続で確かカードパンだっけ
あれを当ててる
しかも中に入ってるのが

ファイブゴッド　ドラゴン
F・G・Dとか
真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）とか
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマンとかのレアカードだから
オークションで売ってもうけてます
ドローパン、ほんとにおいしいです
まあ、それはともかく
今から、十代がドローしようとしている

「ドロー！」

十代がドローパンを取った
でも十代が外れるイベントってあれしかないから
いくらドローしても無駄なんだよな

「あん
ええ、甘栗パンだ」

「これで十回連続で外れちゃいましたね
どうしたんです？アニキ」

言わないが俺は理由を知ってる
まあ確かカードパン？で儲けてる俺には関係ないが

「十代まではずしちゃうとわね」

「明日香さん」「痴女」

「明日香、お前も卵パン好きだったのか？」

「ば、馬鹿言わないでよ

私はドローの練習を、それに私は痴女じゃない」

「ふーん、どうだか」

「ほ、ほんとよ」

赤くなって言っても信憑性に欠けるぞ痴女

「ごめんなさいねえみんな
じつはね、卵パンこの中にはないのよ」

「「ええ!?」」

知ってたけど十代たちには言ってません
何か?
今更だけど

「1週間前から、どうも卵パンだけが盗まれているのよ」

「盗まれた」

「とんだ、隠れチートがいたもんだ（棒読み）」

「すごい
卵パンだけを盗んでいくなんて、なんという引きの強さ」

十代、翔をそんなに睨んでやるな
怯えてるし、それは八つ当たりだ

「みんな楽しみにしてくれてるのにねえ、本当に申し訳ない」

「トメさんが誤ることないぜ、悪いのはその泥棒野郎だ」

それはそうだな

「じゃあ、俺らが張り込むっていうのはどうだ」

「いいな、遊輝それでいこう
翔！今日から張り込みだ」

「うん！って、え」

そして夜

張り込みのメンバーは
十代・隼人・翔・明日香・トメさん・俺だ
で、今十代と翔がばば抜きをしている

「それ、やったあ」

お、十代が勝った
ま、そりゃ公式チートドローだしな

「やっぱアニキの引きはすげえや」

「あったりまえよ」

調子乗りすぎだ
で、いろいろしゃべってると

「みんなご苦労様、夜食だよ」

「うまそう」

「中の具はなんなのかなぁ」

「梅、おかか、鮭の3種類だよ
性をつけて頑張って、今夜は私も泊まるから」

「ありがとうトメさん」

「鮭はどれかなぁ」

おい隼人
顔が大変なことになってるぞ

「そこの「待った、引きおにぎりだ
俺も鮭が好きだぜ、順番で引こう」

「乗った、俺も鮭が好きだしな」

「ええ、みんなえ分ければいいんだな」

正論ですね
でも、面白くないじゃないか

「でも、面白そう」

「くだらなそう」

「俺のターン、ドロー」

おいしく食べる十代
はたして、中身は

「鮭召喚！」

なんと好物の鮭だ

「じゃ、俺もドロー！」

俺の中身は

「同じく鮭召喚」

「ほんと兄貴たちのドローはすごいな」

「当然、俺の目的は卵パンじゃなくてカードパンだから外れてないし」

「俺も腕は鈍っちゃいないぜ
卵パンが盗まれていなけりゃ記録更新だったのによ」

しばらくして
それぞれいろんな場所に隠れる俺たち
十代・翔・隼人は机の下
明日香はロッカーの中
トメさんはカウンターの下
俺はみんなにも内緒ですが実はそのまま真ん中です
認識阻害です

突然ガチャガチャという音はなり始め
みんな揃ってカウンターの後ろの窓ガラスに顔をつけて外を見た

「何しようってんだ」

十代が不思議がってる
と思ったらシャッターが上がった

「なんて怪力」

翔の言うとおりだ
なんちゅう怪力だよ
謎の男がドローパンをとる

「今だ」

十代の言葉で中に入る俺たち
トメさんが電気をつけた

「ああ、あ、あ」

なんか戸惑ってるし
というかリアルにみるとすげえ体だな
まさしくターザン？

「こらあ、泥棒！」

「もう逃げられないぞ！」

トメさんがなんか驚いてるな
あ、そうか知り合いか

「ア、アアアアアアアアア」

ほんとにターザンかよ
そう思うとドローパンの代車をもってシャッターに突っ込んだ

「逃げやがって、追うぞ！」

「うん」「ああ」

「「「待てえええええ」」」

って思うとジャンプって
おいおい、あいつ一般人だよな一応
なんでこんな高いところから飛び降りてターザンの真似事ができんだよ

「あ、あああああああああ」

「なんだあいつ、ターザンか？」

ほんとだよ
リアルターザンかよ
なんかいろいろ超越してるし

「先回りするぞ」

「うん！」

「俺はこっちの方が速い」

「ってお前は忍者か？」

「木の葉の里で習ったのさあ」

俺はその高台からよく木の葉の忍びがやってるように枝に飛び移って追っていく

「木の葉ってナルトかよ
まあいい、行くぞみんな」

俺は追いかける

「あ、あああああああああ」

あと少し

「あ、あああああああああああ」

「そこだ、神鳴流奥義（しんめいりゅうおうぎ）　斬空閃（ざんくうせん）」

俺はとっさに白刀・破邪銀龍（はじゃのぎんりゅう）を収納ブレスレットから取出し
リアルターザンがつかんだツタの上の部分に向けて斬空閃（ざんくうせん）を放つ

「あああああああああああああああああ」

なんか悲鳴を上げながら落ちていくリアルターザン
その先に十代たちって

早

「うう」

しかも着地したが

「そうはいくか、バインド」

俺はリリカルなのは世界で覚えた魔法バインドを一瞬だけ放つ
するとターザンの一瞬だけ白い光が包み
ターザンがこけた
その隙に俺はターザンの後ろに回り
ターザンの両手の親指をつかみ頭の上に持っていく
昔、こうすると腕が動かなくなるって聞いたからやってみた
結果はホントに動かなかったよ
すご

「っく」

「大山くぅん」

「トメさん」「トメさん、足はやい」

「いや、あれに追いつくお前らの方が速い
なんだ、ギャグ補正か、ギャグ補正なのか？」

「いや、忍者のお前の方がすごいから
どうして、漫画の技が平気で使えるんだ」

「頑張ったから」

「もういいよ」

「放してあげて、大山君なんでしょ」

「わかったトメさん」

そういって俺は放す

「やっぱり大山君」

「やっぱりターザン？」

「隼人、ターザンじゃなくて大山だ」

俺はすかさず突っ込みを入れる

「トメさん、お久しぶりです」

「ちゃんと喋ってる」

「大山で思い出した
トメさん、確かオベリスク・ブルーのおかっぱにそんな名前の先輩
がいた気が」

俺はわざとらしく言ってみる

「よく知ってるね、その通りだよ
大山平君、オベリスク・ブルーの生徒だった子よ」

「「ええ」」

まあ、そりゃ驚くわな
あのターザンが生徒だったて言われれば

「とっても優秀な子だったんだけど1年前に突然行方不明になって
まさかこんなとこいたなんて」

「痴女、お前の兄とは関係ないぞ
俺が調べた結果、いやタイタンからの報告によると
お前の兄たちは例の現在廃寮の特待生の寮にいたとされていて
同時期にその寮の人間と姿を消したらしい
これはタイタンからの謝罪だってさ」

俺は痴女に近寄り痴女にしか聞こえないように言う

「それ本当？明日にも詳しく教えて
あと痴女じゃない」

「分かった、明日の放課後、レッド寮の近くにあるぼったて小屋に
来てくれ」

「分かった」

そんな話をしているうちに話が進んでた
なんでも、昔はすげえここぞの引き運が悪かったそうだ
山にこもって引きの修行をして生まれ変わったとか
アニメ通りだな

「そして修行の完成を確かめるため

俺は試した因縁の卵パン」

因縁って、あのさあ

「そして一週間連続的中
うううう、頑張ったな俺」

さいですか

「そうだったの」

トメさんもあのなあ

「待てよ、俺もお前が盗んでいくまではずしたことなかったぜ」

「それはお前がチートドローだからだろ」

「遊輝が言うか」

「何？」

「どうだい？俺にも引きにはちょっとばかし自身があるんだ
このおれと戦うことで卒業試験としたらどうだ」

「ふっ、おもしろいな
この引きの強さデュエルで試してみたかった」

「おし、やろうぜ」

翔と隼人は悩んで

明日香なんかは頭を抱えてるよ

「だったら十代
こいつらを貸すからお前のウルトラチートドローを見せてくれ」

そういって渡す2枚のカード

「こいつらは」

「（マスター？）」

「いいのいいの（ライネス、お前の真理（マアト）の力みてみたいんだよ）」

「（そういうことですか
確かにあれは普通のハネクリボーとでは召喚できない）」

「分かったぜ」

「話は終わったか」

「ああ」

「行くぞ」

「「デュエル」」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ十代

「俺の先行で行くぜ、ドロー！
俺はＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマンを攻撃表示で召喚
カードを2枚伏せターンを終了するぜ、粋のいい引きを見せてくれよ」

「1年間の修行の成果を見せてやるぜ
俺のタァーン！ドロー！（ふっ、修行の成果があったぜ）
まずは俺はカードを1枚伏せる
そして俺はこのドローカード、ドローラーを召喚
ア、アアアアアアアアアアアア」

でっかい石みたいなモンスターだな
ドローって名前についてるしなんかドローに関係あんのか？

「ドローラー？」

「ドロー？」

「ドローラーねえ」

遊輝は知ってるみたいだな

「ドローラーの攻撃力と守備力は手札からデッキに戻したカードの枚数×５００の数値になる
俺は手札を4枚デッキに戻す」

「カードを全部ぅ？」

「ええ、手札なくなっちゃうよ」

「攻撃力２０００」
すげえな、こいつの覚悟
「ドローラーでフェザーマンを攻撃　ローラープレス！」
フェザーマンがってなんでデッキの下にいったんだ
４０００－（２０００－１０００）＝３０００
「何！？」
「ドローラーに破壊された攻撃表示モンスターは
墓地へは行かずデッキの一番下へ行く、墓地から引き上げることは
できないぞ
これでターンエンド」
なんてめんどくさい効果なんだ
「やるな
俺のターン、ドロー！
（俺も引いたぜ）手札から融合を発動
手札のＥ・ＨＥＲＯ　クレイマンとＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディ
を融合
来い　Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ランパートガンナー
守備表示で召喚」
「守備表示か」
「いや、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ランパートガンナーは

守備表示のまま攻撃力を半分にして直接攻撃ができる」

「な！」

「ランパードショットぉ！」

「おわぁあああ」

４０００－１０００＝３０００

「ターンを終了するぜ」

「すごいわねえ十代ちゃん、で、どっちが勝ってるの？」

「「「「え？」」」」

「同点」

「いや、手札がある分十代だろ」

「そうっすかね」

いや、翔たちの言うとおりか怪しいと俺は思うぜ
デュエルは最後までわからないもんだしな

「（さすがに引きの強さを豪語するだけのことはあるだが、俺の引きはその上を行く）」

何を引く？

「（まだひかない）
場から永続トラップ
　奇跡　（きせき）のドロー！を発動
ドローフェイズの前にドローカードを宣言する
当たった場合、相手プレイヤーに１０００ポイントのダメージを
間違った場合は俺が１０００ポイントのダメージを受ける」

「ドローカードを当てる？」

「かなり無茶苦茶だな」

「面白いじゃねえか」

「当たらないと思っているだろう」

「わからねえ？」

遊輝なら当てそうだけど

「俺でもさすがにそれは無理だ、読心術なめんじゃねえぞ！」

すげえな

「分かるんだよ
引きの真髄を解得（かいとく）したこのおれには」

なんか急に黙り込んだ
まさか、本当にあてるのか？

「ドローカードはカードローン！ドロー」

「当たった」

「そんな」

「またドローのつくカード」

「マジか
まさに真髄って感じだな」

すげえ、マジかよ

「１０００ポイントのダメージを受けてもらうぜ」

「ううううう」

３０００－１０００＝２０００

「そして、このカードローンを発動する
相手は１０００ポイントライフが回復
俺は１０００ポイントのダメージを受ける
そしてデッキから1枚カードを引く
引いたカードはこのターンのエンドフェイズにデッキに戻す」

２０００＋１０００＝３０００　十代

３０００－１０００＝２０００　大山

「そこまでして引きにこだわる」

「きたぁ！この引きを見よ
手札からマジックカード、ドローボウを発動
カードを1枚引け
そのカードを俺があてる
もし当たった場合
お前の手札とフィールド上すべてのカードをデッキに戻してシャッフルする」

「当たったら十代の場はがら空き」

「あいつは超能力者か」

遊輝のいうとおりまったくだぜ
多分当てるんだろうな

「ズバリ、融合解除！」

「あっはっはっは、すげえな」

「ドローとかの問題じゃないだろ」

マジすげえ

「ドローラーでプレイヤーへダイレクトアタック　ローラープレス」

ソリッドビジョンだけど怖ええ

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！

俺はフレンドッグを守備表示で召喚」

「ターンを終了するぜ」

「十代ちょっとマズいんだな
次の大山のターンにあの奇跡　（きせき）のドロー！でカードを当てられたら」

「どっちが勝ったの？」

「まだ」

「（いよいよだ
次のドローカードを当てることができれば俺は勝てる
勝てるんだ、フレンドッグは守備表示
そうだ！シールド・クラッシュを引き当てることができれば
あの魔法効果は守備モンスターを破壊する
そうすればダイレクトアタックで十代を倒せる
シールド・クラッシュ、シールド・クラッシュ）
ドローカードはシールド・クラッシュだ！」

「名前にドローがついたカードじゃない」

「早まったな、大山」

「あ」

「「外した？？」」

「当り前だ、あんな邪念でデッキが答えるか」

「ぐわぁぁぁぁ」

２０００－１０００＝１０００

「ドローンを攻撃表示で召喚
俺の方が圧倒的に有利なんだ、どんなことがあっても俺が勝つ
ドローラーでフレンドッグを攻撃　ローラープレス」

「十代の勝ちだな」

「え、明らかに相手の方が有利っすよ」

「見てれば分かる」

確かに俺もそう思うぜ

「フレンドッグの効果発動
フレンドッグが墓地に送られたことにより
墓地から融合とＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディを手札に加える」

「まだ攻撃は続いている！！
ドローンでプレイヤーにダイレクトアタック　オドローーン」

「うわ、っく、うわ、っく」

１０００－９００＝１００

「アニキ」

「で、どっちが勝ったの」

「まだですよトメさん
次の十代次第だが」

「ターンエンド
お前のライフもあと１００、勝負あったな
これでおれの修行も完成する」

「分かってねえな、お前の修行はとっくに完成してたんだよ」

「何？？？」

「お前引きのことを
自然の力がどうだの言ってるけど
それよりなにより、お前さっきまでわくわくしてたろ
カードを引くことに」

「あ、ああ」

「ドローすることが楽しいから
そのためのデッキを作ったんだろ
だったら最後までわくわくしなきゃ
価値なんて意識するなよ、だからお前は外したんだ」

「ふざけるな！
引きの極意がそんな下らんことであるはずがない」

「それがそうなんだよ
卵パンを思い出せ、わくわくすることに引きの神様は答えてくれる

んだ
このドローわくわくするぜ」

「あ」

「俺のターン、ドロー
強欲な壺を発動
2枚ドローするぜ
デッキが答えてくれて俺の相棒と遊輝の相棒が来てくれたぜ」

「そんなモンスターたち引いたところでいったいなんになる」

「面白いことになるんだよ
俺は手札から融合を発動
手札の俺の相棒ハネクリボーと遊輝の相棒光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）を融合」

「光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）とハネクリボーを融合？」

「マアト召喚」

そこに現れたのは神々しいモンスターだった

Ｓｉｒｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

「マアト召喚」

ついに真理（マアト）を見れた
輝く千年アイテムが神々しいね
こいつを見たかったんだが
微弱だがマアトのカードから精霊の気配が
もしかして今回の召喚で覚醒しかけたか？

「マアトの効果発動
カード名を宣言しドローする！
正解したとき、そのカードを使用し再び効果を発動できる！」

「十代までそんなカードを」

「で、どっちが勝ったんだい」

「まだです」

「宣言するカードは？」

一瞬止まった
あ、あれか

「ライトニング・ボルテックス
ライトニング・ボルテックスを発動し手札のＥ・ＨＥＲＯ　バーストレディを墓地に送り
ドローラーとドローンを破壊
宣言したカードを引いたことで再びマアトの効果を発動
俺はマアトの効果でドロー
マアトの攻撃力と守備力はマアトの効果でドロー数×１０００ポイントになる
マアトの効果で2度ドローした

これによりマアトの攻撃力は２０００
マアトでダイレクトアタック　真理の天罰（ヴィシテーション・オブ・マアト）」

「うわぁああ」

１０００－２０００＝－１０００

「お前にはもうわかってたんだよ
明日一緒にドローパン引こうぜ」

「う、うう」

そのあと、大山とのちょっとしたイベントがあり
泣き出した
どんなイベントだったて
ほんとはドローパン一引きたくて山を下りたんだってさ

その翌日の朝

「痴女、これが調査結果だ」

「娘よぉ
あの時はすまなかったなぁ
これは謝罪だと思ってくれぇ」

「いいわよ、もう、それに私は痴女じゃない
それよりこれ本当？
こんなに行方不明者がいたなんて」

「ああ、間違いない」

「ほんとだぁ
この学園には裏があるということだぁ」

「分かったわ、ありがとう」

そのあと聞いた話だが
痴女が卵パンを引いて子供のようにはしゃいでいたそうだ
また更にそのあと

「魔力と気を込めて」

俺はマアトのカードに魔力と気を送っていた
十代は気が付いていなかったが少しだけど精霊の気配がする
そして送り始めて数分後

「マスター？」

「やっと目覚めたか」

「私を呼び覚ましてくれてありがとうございます」

えっと、なんで嵩月（たかつき）　奏（かなで）
どう見てもアスラクラインの嵩月（たかつき）　奏（かなで）なんだけど
黒髪、容姿端麗・スタイル抜群しかも片目が緑色

「えっとマアト？」

「そうですが、なんでしょう
言っておきますがこの姿はマスターの記憶の中から私が気にいった

姿ですのでであしからず」

そういうことか

「じゃあこれからよろしくなマアト
いや、その姿だし奏（かなで）ってこれから呼ぶよ」

「はい、ありがとうございますマスター」

「マスターじゃなくて遊輝でいい
あと、明日からマアトも修行な」

その後、仮契約したんだが
接吻で、契約陣書こうとしたら勝手にキスの方の契約陣引いてキスしてきやがった
なんで、俺、フラグ立てたか
それともめんどくさかっただけか？
いや、予想外のあのマアトの性格からそれはないと思う
ちなみに人間体の姿はあの姿が気に入ったらしい
まあ、俺的に嵩月（たかつき）　奏（かなで）は好きなキャラだから嬉しいけどいやな予感が
ついでに言うと
マアトの仮契約カード
チートだった

第２２話　究極のドロー対決　十代ＶＳ大山（後書き）

《ドローラー》効果
効果モンスター
レベル３／地属性／機械族／攻撃力？／守備力？
このカードの攻撃力・守備力は召喚時に手札からデッキの一番下に戻したカードの枚数×５００ポイントの数値になる。
このカードが戦闘で攻撃表示モンスターを破壊した場合、そのモンスターは墓地には行かずデッキの一番下に戻る。
《　奇跡　（きせき）のドロー！》効果
永続罠
自分のターンのドローフェイズ時にカード名を１つ宣言する。
ドローしたカードが宣言したカード名と一致した場合、相手に１００ポイントのダメージを与える。
違った場合は自分は１０００ポイントのダメージを受ける。
《カードローン》効果
通常魔法
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
相手は１０００ポイントのライフを回復し、自分は１０００ポイントのダメージを受ける。
この効果でドローしたカードはエンドフェイズにデッキに戻しシャッフルする。
《ドローボウ》効果
通常魔法
カード名を１つ宣言して発動する。
相手はデッキからカードを１枚ドローする。
宣言したカード名と同じカードをドローした場合、
相手は手札と自分フィールド上のカードを全てデッキに戻しシャッフルする。

≪ドローン≫
攻撃力９００
≪マアト≫効果
融合モンスター【ハネクリボー＋光と闇の竜（ライト&ａｍｐ;ダークネスドラゴン）】
レベル１０／光属性／天使族／攻撃力?／守備力?
召喚時、カード名を宣言しドローする
正解した時そのカードを使用でき再び効果を発動することができる
攻撃力・守備力はこの効果でドローした枚数×１０００ポイントになる

マアトの仮契約カードは
次のパーティー紹介の時紹介します

第２３話　盗まれた決闘王のデッキ　ＶＳ神楽坂（前書き）

『』は精霊
（）は念話です
今回は賛否両論別れるかもしれません

第２３話　盗まれた決闘王のデッキ　ＶＳ神楽坂

Ｓｉｄｅ遊輝

大山の事件から数日後
大山はトメさんの頼みもあって校長がオベリスク・ブルーに復学したといっても条件が２年生からが条件だったがそんでもって
武藤遊戯のデッキが展示されるらしい
俺は学校が始まる前に入手したぜ
そんで今日もドローパンを買おうともって十代といっしょに購買部に来たんだが

「お、何の騒ぎだ、喧嘩か？」

「十代、それはないだろ」

『そうですよ、マスターの言うとおりですよ』

ってなぜ奏（かなで）がいる

『えっとマスターと一緒にいたかったから気合で影分身覚えました」

さいですか

「誰だあれ？」

「神楽坂、ラー・イエローの生徒だよ」

「確か記憶力がよすぎてほかの人のデッキに似ちまうってやつだろ」

「詳しいな、そのじょうほ「禁則事項だ」最後まで言わせろ」

「そうじゃなくて、だから何をやってんだよ、翔？」

「アニキ！」

「どうしたんだ、翔？」

「どうもこうもないっす、あれあれ」

そういって王様（ゆうぎ）のポスターを指さす翔

「デュエルアカデミアにて
初代デュエルキング
武藤遊戯のデッキ
特別展示
ってことは遊戯さんの使ってたデッキがこの学園に来るのか？」

「っておいおい
俺が朝話しただろ」

「そうだっけ」

「これはもう見るしかないでしょ
アニキ？アニキィイイイイ？」

「十代、いったいどうした」

『放心してるんですよ、マスター』

さいですか
最近これ多い気がする

「遊戯さんのデッキがこの学園に！」

「武藤遊戯といえば
デュエリストキングダムではデュエルモンスターズの生みの親
ペガサスを倒し
バトルシティーでは
海馬瀬戸やマリクを倒し
神のカードを駆使して
デュエリスとの頂点に君臨した伝説のデュエリストっす」

「それに幾多の闇のデュエルも経験しているデュエリストだ」

俺が補足

「神のカードは入ってないだしいけど
ブラック・マジシャンやブラック・マジシャン・ガール
他にもお宝カード満載の激レアデッキ
絶対見なきゃ損ですよ」

「それはわかったけど
この事態と何の関係があるんだ？」

「購買部で朝一番にみられる整理券を配ってたんだけど
最後の一枚になってデュエルで決着つけようってことになったんだ

よ」

「無茶すんなって翔」

「何言ってるんすか
あの整理券は兄貴の分っすよ
僕の分は、ほら」

「俺も持ってるぞ」

「頑張れよ翔」

「分かってるっす」

（現金な奴だな）

『そうですね、マスター』

（この前も言ったけど遊輝でいいから）

『遊輝、わかりました』

「デュエル再開」

翔が宣言した
現在、翔の場はジェットロイド
神楽坂の場は伏せカード2枚

「俺のターン」

ドローって言わないんだ
珍しいな

「マジックカード大嵐
場のすべてのマジック・トラップカードを破壊するのーね」

「っげ、なんかデシャブーが」

「確かに白面(クロノス)を思い出す」

「神楽坂はクロノス先生のコピーデッキだ」

「三沢、いつの間に前へ」

三沢の空気化(エアライズ)はこの時始まったのか

「なんか嫌なことを考えられた気がする」

鋭いな
そんなこと言ってるうちにあれは邪神トークンか?

「2体のトークンを生贄に古代の機械巨人(アンティーク・ギアゴーレム)を召喚する」

「おお」

だめだ
神楽坂が白面(クロノス)に見えてきた

「いけ、古代の機械巨人(アンティーク・ギアゴーレム)!」

「ジェットロイドの特殊効果発動
このカードが攻撃対象になったとき手札からトラップを発動できる
魔法の筒（マジック・シリンダー）」

うまいな

「僕が受けたダメージはそのままお返しだ」

「なに？」

「うわぁあああ」

１０００－３０００＝－２０００

「やった、僕の勝ち」

「すごいぜ、翔
俺が苦労したコンボをあっさり破りやがって」

「確かに今のは参考になった
今後のデッキづくりに生かさせてもらうぜ」

「いやあ、アニキとクロノス先生のデュエルを覚えていて
カウンターをデッキに入れといたら
ばっちり決まっちゃった、はっはっはっはっはっは

おっとこれは僕がもらうよ、悪く思わないでね」

ほかのみんなは帰って行ったが
あんな陰口は酷いだろ

だれだって負けるときは負けるのにな

『あれはひどいと思います、遊輝もそう思いますよね』

（ああ）

三沢もあんなのーてんきに

あ、神楽坂おこって行っちゃたよ

「三沢、お前は少しは空気読め」

「は、何のことだ？」

駄目だこりゃ

その日の夜

「遊輝、一緒にデッキ見に行かないか？」

あのイベントか

「行くぜ」

その後アカデミア廊下にて

「お、十代に遊輝」

「三沢じゃないか、どうしたんだ？」

「はっはっはっは

ちょっとフライングしてキングのデッキを拝みにね」

「なんだ、みんな考えること同じか」

「マンマミーヤァ」

はぁここの警備はいったい何をしてるんだ
精霊たちも全員呆れてるよ

「なんだ、今の」

「あの、声は」

「盗まれたのか？」

中に向かう俺ら

「ニャ、ギャビーン」

「クロノス教諭？」

「展示ケースが」

「遊戯のデッキがないんだな」

「まさか、クロノス先生が？」

「それはない
もしそうだったらケースを割る必要がない
クロノス教諭

俺たちが犯人を見つけるので
そうですねレポ免1ヶ月でどうですか」

「分かったのーね
他の人に言わないでほしいのーね
だから、お願いしますのーね」

「探すぞ」

その後

「確か、海岸の近くだったはず」

「うわぁあああああ」

「あっちか」

俺は体を気で強化して走る

「見つけたぞ、泥棒」

「お前は石崎遊輝」

「俺とデュエルして勝ったらデッキを返してもらおう」

「いいだろう」

「遊輝、勝てるわ「問題ない、あの雑魚は俺が潰す」雑魚って」

「雑魚はお前だ」

「やるぞ」

『あんな輩に負けるんじゃないぞ』

『確かに彼は気に入らないな』

『私も気に入りません
人のデッキを使っておいて強くなった気でいるなんて
叩き潰してやってください』

（もちろんだ）

「行くぞ、貴様の魂狩らせてもらおうか」

「「デュエル！」」

「翔！どうしたんだ」

「僕がデュエルして負けて
そのあと遊輝君が来て、勝ったらデッキを返すってデュエルを始めたんだ」

「遊輝、相手はむ「だからなんだ
戦っているのは武藤遊戯じゃない
だったらそれは見た目だけの強さだ
本物の強さじゃない」だけど「黙ってみてろ」分かった」

「おしゃべりは終わったか」

「ああ、俺のターンから行くぞ、ドロー！
俺は融合発動
手札のブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーを融合
来い　超魔導剣士（ちょうまどうけんし）ーブラック・パラディン」

「「ブラック・パラディン！」」

十代と翔は驚いていないようだが
三沢と神楽坂が驚いてる

「俺が持ってたらおかしいか？
融合解除
来い　ブラック・マジシャン　バスター・ブレイダー
さらに師弟　（してい）の　絆　（きずな）を発動
デッキからブラック・マジシャン・ガールを表側守備表示で特殊召喚する」

「な、ブラック・マジシャン・ガールだと
このデッキにしか「前に十代たちに言ったが存在してるのがその１枚だけだと？
馬鹿か！それじゃ神とレア度が一緒だぞ
使われてないだけで持ってるのは武藤遊戯だけじゃない」だからなんだ
このデッキは最強だ」

「やっぱりブラマジガール可愛いいいいいいいい
僕に1枚ちょうだい、遊輝いいでしょ」

「１枚、１０００万なり」

「諦める
でもやっぱりほしいなあ」

「命削りの宝札を発動
手札が5枚になるようにドロー
リバースカード5枚セット
ターンエンド」

こいつは消す
その根性叩き直させてもらう

「俺のターン
幻獣王ガゼルとバフォメットを手札融合
出でよ、有翼幻獣キマ「消え失せろ
奈落の落とし穴発動
有翼幻獣キマイラを除外
除外なので有翼幻獣キマイラの効果は発動しない」
なんだと
カードを2枚伏せ
速攻魔法サイクロン　トラップカード　砂塵の大竜巻を発動
2枚とも消えろ」
な、そんな馬鹿な
俺は最強のデッキを手に「黙れ
さっさとすすめろ」っく光の護封剣を発動
ターンエンド」

「なんか遊輝怖くないか」

「ありゃキレてるな」

「そうなのか」

「あの状態になった遊輝は止まらねえ
翔も１度見ただろ」

「そうっす、あの時の遊輝は怖かったっす」

「俺のターンドロー
大嵐発動
フィールドの魔法・トラップを消し去る
モンスターでダイレクトアタック
ブラック・マジシャン　黒・魔・導（ブラック・マジック）
バスター・ブレイダー　破壊剣一閃（はかいけんいっせん）
ブラック・マジシャン・ガール　黒・魔・導・爆・裂・破（ブラック・バーニング）」

「うわぁあああ」

４０００－２５００＝１５００
１５００－２６００＝－１１００
－１１００－２０００＝－３１００

「このおれが負けた
俺はこんな強いデッキを使ってもかてな「あたりまえだろ
それは武藤遊戯が使うから強いんだ
お前が使ってなんになる
お前自身のデッキを作れ
デッキがほかの人のものに似てしまう？
だったら、多重コピーでもいろいろやりかたがあるだろ

それと隠れている奴らでてこい
盗み見とは行儀がよくないんじゃないか
そこにいるカイザーと痴女
他にもそこらにいる生徒たち
それと神楽坂は責められるべきではない
神楽坂に陰口履いてたやつら
お前らのくずのような行動のせいで神楽坂はこんなことしたんだ
俺が言いたいのはそれだけだ
帰らせてもらう」

俺はそれだけ言って帰って行った
俺の言動は何か考えさせるものがあったようだ
神楽坂はどうやらアニメとは違い考え直し多重コピーデッキを使うようになっただしい
罰は制裁デュエルだったが戦ったのは俺らと違ってモブで勝っていた
他の生徒たちも負けたからってすぐ文句は言わないようになった
今回はマジでむかついた
前世で小学・中学といじめられてきた俺だが
あれはいくらなんでもひどすぎる
俺と神楽坂はその後親交を深めたんだけどな

第２３話　盗まれた決闘王のデッキ　ＶＳ神楽坂（後書き）

主人公がマジ切れしました
最初は神楽坂に切れましたが
その原因の生徒たちにも切れました
作者が思うにいくら負けたからってあんな陰口を言われてなかったら
神楽坂、デッキを盗まなかったと思う
それに三沢のあの態度も作者はどうかと思っていました
なので、こんな結末にしました

第２４話　失恋する乙女

Ｓｉｄｅ遊輝

ただ今夕方の食事中

「皆さんに紹介したい人がいますのニャ
にゃあ　編入テストを受けてこのたびオシリス・レッドに入ってきた早乙女レイ君だニャ」

ってなんだと
早乙女レイ・・・だと
予想外に早い

「女の子みたいにきれいな子なんだな」

正解です
女の子だよ彼女は
顔は帽子でよく見えない気がするんだが

「編入先がオシリス・レッドなんで落ち込んでるのかなあその気持ち分かるなあ」

「十代、立とうとするな
編入生はオシリスレッドからだし落ち込んではいない
読心術なめんな」

「そうかあ」

「そうなんすか？」

「遊輝君の言う通りにゃ
そうにゃ、遊輝君は二人部屋に一人だったにゃ
レイ君、しばらく遊輝君の部屋を使わせてもらいなさい」

原作と違って俺がいるからだろうし

「いいですよ先生」

その後食事が終わり
部屋にて

「さあて
そろそろ教えてくれないかな
どうしてこの学校に来たのか（知ってるけど）
その帽子の中の素顔も（ちょっと気になるだけロリコンではない）
小学５年生の早乙女レイちゃん」

さあて質問タイムだ
原作知識で知っているが食い違いがあったら困るからな
俺はアカシックレコードには接続できないから細かな食い違いは確認しないと

「ぼ、僕は男だ
でたら「はいこれどうぞ
これは校長先生が転校生の話をしているのを盗聴してから集めたデータ
話を聞いて怪しいと思ったから（ほんとは原作知識で早乙女レイが女だって知ってたからだけど）

調べたけど思ったより早かったからな
だけど、これでもしらを切るきかい？
これはあくまでも他人で自分はこの人に似た合法ロリの女とでも」
分かったよ、その通りだよ私は女だよ
あぁあ、結構ばれないと思ってたのに」

そういって帽子を取る早乙女レイ
な、これは

「か、可愛い」

「え？」

なんかこっちに顔を向けてくるが危ない
ＹＥＳロリータＮＯタッチだ
俺はアルビレオ・イマじゃない
おっと、この世界だったら三沢大地だった
誰が何と言おうとロリコンじゃない
ただ、単純にかわいいと思っただけだ

「ありがと」

「どういたしまして、でだ
もう一度聞く、どうしてこの学校に来た？」

「それは亮様に会いに来るために」

「成程、あわせてやってもいい」

「本当！？お願い！わ「ただし条件がある

今から親に電話して、謝れ
お前がいなくなって親が心配してるはずだ
友達も心配してるはずだ
それなのに自分の願いだけかなうなんて都合のいいことがあると思うなよ」分かったよ
今から電話するから電話貸してくれない」

電話を貸します
電話します
怒られてるような声が聞こえます
どうやら来週の便のフェリーで帰るらしい

「じゃあ、協力するか」

「うん！これで私の思いを亮様に伝えるぞお」

「じゃ、俺の正体を教えないとな」

「正体？」

「俺は魔道士だ」

「は、今なんて言ったの？」

「だから俺は魔道士だ」

「嘘だぁ
魔道士だなんている訳な「証拠、デス・デストロイ・デス・クライシス　火よ灯れ」
わ、手の上に火が本当に魔法使いなの？」

「あと、ついでにお前らも来い
召喚　遊輝の従者（エウオケム・ウオース　ミニストラエ・ユウキ）
ライネス　サイコ　奏（カナデ）」

俺は仮契約カードを空に投げ従者を呼び出す

「遊輝、なんのようだ」
「マスター私に何のようかな」
「遊輝、私はすでにここにいるよ」

って奏、お前はまた

「あわわわわ、デュエルモンスターズのモンスターがしゃ、しゃ、
喋ってるぅううう」

「こいつらは俺の従者兼デュエルモンスターズの精霊だ」

もう声が出ないだしい
じゃあさっそく

「じゃあレイちゃん
君の望みをかなえに行くか」

「え？」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅレイ

部屋に入ったら唐突に私は言われた

「さあて
そろそろ教えてくれないかな
どうしてこの学校に来たのか
その帽子の中の素顔も
小学5年生の早乙女レイちゃん」

え、なんでそれを
なんで私が女の子だって
とにかくごまかさなきゃ

「ぼ、僕は男だ
でたら「はいこれどうぞ
これは校長先生が転校生の話をしているのを盗聴してから集めたデータ
話を聞いて怪しいと思ったから調べたけど思ったより早かったからなだけど、これでもしらを切るきかい？
これはあくまでも他人で自分はこの人に似た合法ロリの女とでも」
分かったよ、その通りだよ私は女だよ
あぁあ、結構ばれないと思ってたのに」

この人ストーカーって一瞬思ってしまった私は絶対に悪くない
悪くないはず
でも、ばれちゃったならこれをかぶってもしょうがないか

「か、可愛い」

「え？」

この人私のことを可愛いって
なんか嬉しいな
でも、私が好きなのは亮様
この想いを伝えるまでは
とりあえずお礼くらい

「ありがと」

「どういたしまして、でだ
もう一度聞く、どうしてこの学校に来た？」

「それは亮様に会いに来るために」

「成程、あわせてやってもいい」

本当に
亮様に会えるの？

「本当！？お願い！わ「ただし条件がある
今から親に電話して、謝れ
お前がいなくなって親が心配してるはずだ
友達も心配してるはずだ
それなのに自分の願いだけかなうなんて都合のいいことがあると思うなよ」分かったよ
今から電話するから電話貸してくれない」

また言い切る前に
でも、この人の言うとおりだよね
みんな心配してるよね
私はこの人に電話を借りて電話して怒られた

当然と言えば当然だよね
黙ってきちゃったから

「じゃあ、協力するか」

「うん！これで私の思いを亮様に伝えるぞお」

「じゃ、俺の正体を教えないとな」

「正体？」

「俺は魔道士だ」

え、今なんて
私、耳が悪くなったのかな？

「は、今なんて言ったの？」

「だから俺は魔道士だ」

そんなのいるわけないよ
この人私の事おちょくってるのかな？

「嘘だぁ
魔道士だなんている訳な「証拠、デス・デストロイ・デス・クライシス　火よ灯れ」
わ、手の上に火が本当に魔法使いなの？」

わ、本物の火
本当なんだ？

「あと、ついでにお前らも来い
召喚（エウオケム・ウオース）　遊輝（ミニストラエ・ユウキ）の従者
ライネス　サイコ　奏（カナデ）」

わ、あれは光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）？
それにこっちはサイコ・ショッカー
このモンスターは知らないけど
え、なんでモンスターが実体化してるの？
え？

「遊輝、なんのようだ」
「マスター私に何のようかな」
「遊輝、私はすでにここにいるよ」

そしてマスターって何？

「あわわわわ、デュエルモンスターズのモンスターがしゃ、しゃ、
喋ってるぅううう」

「こいつらは俺の従者兼デュエルモンスターズの精霊だ」

デュエルモンスターズの精霊？

「じゃあレイちゃん
君の望みをかなえに行くか」

「え？」

そういって私たちは寮を出たんだ

ブルー寮に行く途中精霊についての話を聞かせてもらったんだ
でも、なんだろう
この気持ち
胸がもやもやする

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

精霊について話しながらブルー寮に向かって言った俺とレイ
ブルー寮があと少しというところで止まった

「ちょっと待て」

「え？」

「認識阻害結界展開
認識妨害結界展開
防音・遮音結界展開
よし、ＯＫだ」

複数の結界を展開
これで細工は流々後はやるだけ

「何したの？」

「結界張っただけ
これでおれらの存在はばれない
さあ、ブルー寮に侵入だ」

「え、えええええええええええ！？
それって犯罪じゃないの？」

「大丈夫だ
犯罪はばれなきゃ成立しない」

「それって外道じゃ「カイザーに会うんだろ
あいつは忙しいからこれくらいしなきゃ」
そうなのかなあ」

「そういうもんだ、行くぞ！」

俺とレイはブルー寮に忍び込む

「こちらスネーク
ブルー寮に侵入した」
「よくやったぞスネーク
丸藤亮通称カイザーの部屋はこの先だ」
「了解した、この先だな」

「何やってるの？」

ふざけてたら怪訝な顔をして突っ込まれた

「どうせばれないからメタルギアごっこを」

「私の恋がかかってるんだからふざけないでください」

「はあい」

そんなことをやりながら寮の部屋についた

「Ｌｅｔ，ｓ侵入ダ☆ゼ☆」

「だからふざけないでください」

「何者だ？」

「え？」

「俺がだれでもいいじゃん
恋する乙女の願いをかなえてあげるだけ
ほら、レイちゃん　告白告白」

今更だけど俺は変装してる
格好は死神みたいな黒いマントを羽織ってるだけだけど

「は、はい
亮様のことが昔から好きでした
亮様、乙女の一途な思いを受け止めて」

なんだこのオーラは
後ろに恋する乙女が
これが恋する乙女のオーラなのか、アニメなんかとは比べ物にならないオーラだ

「レイ、お前の気持ちは嬉しいが「亮様！」

とりあえず最後まで聞こうなレイちゃん

「今の俺にはデュエルがすべてなんだ
俺のことはあきらめて新しい恋を探してくれ！」

まあ、まだ小学生とは知らないし
少しくらいセリフが変わってて当たり前か
ってレイ泣いちゃってるよ飛び出しちゃった
やば、結界再構成

「貴様の言い分は分かった
説教をしたいところだが時間がないのでな明日俺が貴様に制裁を下すだろう
俺の名はオシリス・レッドの石崎遊輝だ
明日の放課後、レッド寮近くの崖下でで待つさらばだ」

そうして俺はレイを追いかけて行った

第２４話　失恋する乙女（後書き）

レイの口調が私なのはアニメみたいにばれた後までそれする必要があるのかと思っただけなので気にしないでください
だって再登場した後一人称私だったはずだよね？
違ったら教えてください

第２５話　帝王への制裁　ＶＳ丸藤亮＝カイザー（笑）

Ｓｉｄｅ遊輝

カイザー（笑）の身勝手な応答に対する制裁は明日にして
今はレイちゃんを追いかけないと

「貴様の言い分は分かった
説教をしたいところだが時間がないのでな明日俺が貴様に制裁を下すだろう
俺の名はオシリス・レッドの石崎遊輝だ
明日の放課後、レッド寮近くの崖下でで待つ
さらばだ」

「待て！」

「待たない」

そうして追いかけていく俺
今は魔力を大幅に抑えてるからあんまり広い結界は張れないちゅうのに
まったく面倒だ
まあ気で足を強化してるから疲れないけど
で、ブルー寮を出たあたりでようやく止まった

「私振られちゃった
う、う」

「泣きたいときは泣いた方がいいと思うよ

すっきりするし」

なんだこれは
俺じゃない
なんで俺はこんな優しいことを言ってる

「う、うぇえええええええええええええええええええええええん」

えっと防音・遮音結界強化
それからレイちゃんはしばらく泣き続けていた

「う、う」

「そろそろ大丈夫か
明日はすることがいっぱいあるからな
帰って寝ようか」

「うん」

ほんとが転移魔法もしくは俺の能力を使えばあっという間だけど
その日は歩いて帰った
そして部屋で

「私、これからどうしようかな
次のフェリーの便は来週だし」

確かにどうするか

「まあ、それはおいおい
とりあえず明日は校長と話した後

ちょっとお願い（脅迫）してサボタージュでもするか」

「なんか気になる単語が聞こえた気がするけど
それより私大丈夫かな
年齢とか偽ってたし」

「問題ない
あの狸を脅す材料の１０や２０
いくつでもあるさ」

「それってだいじょうぶなのかな」

何を言ってるんだ
人は脅して利用して切り捨てるもんだろ
自分の大事な奴以外は

「勿論だ」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅレイ

大声で泣いちゃった
恥ずかしい
でもこれから・・・

「私、これからどうしようかな
次のフェリーの便は来週だし」

ほんとどうしようかな

私、デュエルモンスターズ関係の勉強しかしなかったから
普通の勉強は分からないんだよなあ
だから授業受けてもよくわからなかったし

「まあ、それはおいおい
とりあえず明日は校長と話した後
ちょっとお願い（脅迫）してサボタージュでもするか」

なんか脅迫って聞こえた気がするんだけど
でもそれより

「なんか気になる単語が聞こえた気がするけど
それより私大丈夫かな
年齢とか偽ってたし」

嘘ついてたしやっぱりまずい気がするんだよな

「問題ない
あの狸を脅す材料の１０や２０
いくつでもあるさ」

え、狸って誰
もしかして校長先生の事？
それに脅すって

「それってだいじょうぶなのかな」

「勿論だ」

いやな予感しかしないけどこれが気にしたら負けってやつなのかな

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

話し合いが終わり次の日帽子をかぶってもらい
校長室に向かっている

「失礼します」

「遊輝君じゃないですか、はいっていいですよ
今日はどうしたんですか」

「この転入生のことなんですけど
実は・・・」

そういって帽子を取る

「なんと」

「女の子だったんですよ
おまけに小５だし」

「小学５年生だあの試験に浮かったんですか
君は頭がいいんですね
それで遊輝君、君は私に何をしてほしいんですか
君はそれだけで訪れるような人じゃないと思うのですが」

さすが校長
今まで幾度となく会いに来てる俺のことをわかってる

（描写はしてませんが遊輝は万丈目の時以外も結構ここにきています）ｂｙ作者

「実は彼女のことは内緒にしておいてほしいんですよ
後しばらくサボらせてもらうので公欠にしておいてください
えっとこれ教師の不正の証拠
これでいいいですよね」

「分かりました
いつも情報提供には君に感謝してるので彼女が帰るまで公欠扱いにしておきましょう」

「ありがとうございます
それでは校長」

「えっと私
来た意味あるのかな」

レイちゃん何か言ってるが気にしない
ネギまのエヴァみたく屋上でのサボタージュかな
やっぱりやめとこ
それじゃあ

「レッド寮に戻りますか」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅレイ

今、私は遊輝さんと一緒に校長室の前にいる

「失礼します」

「遊輝君じゃないですか、はいっていいですよ
今日はどうしたんですか」

あれ、脅すって言ってた割には仲がいいような
あくまで最終手段ってことなのかな

「この転入生のことなんですけど
実は・・・」

あ、帽子とられた
校長先生驚いた顔してる

「なんと」

「女の子だったんですよ
おまけに小5だし」

「小学5年生だあの試験に浮かったんですか
君は頭がいいんですね
それで遊輝君、君は私に何をしてほしいんですか
君はそれだけで訪れるような人じゃないと思うのですが」

確かにあの試験は難しかったな
かなり勉強したし
そして遊輝さんはどんなふうにみられてるの？

「実は彼女のことは内緒にしておいてほしいんですよ
後しばらくサボらせてもらうので公欠にしておいてください
えっとこれ教師の不正の証拠
これでいいいですよね」

校長先生にサボる発言って
しかも公欠希望するってこの人っていったい
それに教師の不正の証拠って
一体遊輝さんって

「分かりました
いつも情報提供には君に感謝してるので彼女が帰るまで公欠扱いにしておきましょう」

「ありがとうございます
それでは校長」

そして許可するってどういうことなの
いつも情報提供って
あれなのかな
この人ってネギま風に言うとバグキャラってやつなのかな
よく考えるとつかってた魔法
ネギまのものだった気がするのは気のせいかな
後で聞いてみよ

「えっと私
来た意味あるのかな」

ほんとに来た意味がない気が

「レッド寮に戻りますか」

無視された
それに、おいてかれる
追いかけなきゃ

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

レッド寮に帰った俺だが

「ねえ、さっき思ったんだけど使ってた魔法ネギまの漫画のだよねどうして使えるの」

と聞かれてる
まあいいや言っちゃえ

「俺が転生者で世界渡る能力があるから」

「え、転生？」

「そう、一回死んだ人間ってこと
世界渡る能力でネギまの世界いってそこであった転生者に習ったこのことは内緒だよ」

実は孝樹から魔法も習ってたんだよな

「え、えええええええええええええええ！！」

「驚くな、ほんとのことだし」

「いや、ふつう驚くよ
あとその魔法私でも使えるの？使えるなら教えてほしいな」

「俺と仮契約すれば使えるようになると思うよ
何気に魔力はある程度あるし
俺と仮契約しないといけないのは本来この世界にはない異端な力だからなんだけど」

そう、本来魔法なんて存在しないこの世界では普通の人はいくら魔力があってもこの世界じゃ魔法は使えない
俺みたいな異物（イレギュラー）の関与が必要だ

「そうなんだ」

そんな話をしながら時間は立っていった
そして放課後の時間帯
レッド寮近くの崖下

「よく逃げずに来たなカイザー
早速デュエルだ、逃がしはせん」

「ちょっと待ってくれ
俺が何をしたというんだ」

「あんな人の気持ちを考えないような最低なふりかたをして何を言う
今の俺にはデュエルがすべてなんだだって
それはデュエルがすべてだからお前なんか眼中にないと言ってるの

と同じようなもんだぞ「違う！おれはそんなつも」何が違うんだ
ふるにしてももうちょっと言葉を選べ
では制裁の時間だ」

「しょうがない」

「「デュエル」」

「では俺のターンから、ドロー
デス・メテオ発動１０００ダメージ
火炎地獄３枚は発動俺１５００ダメージ
貴様３０００ダメージ
俺の勝ちだ
だが、まだまだだ
再びデュエル
おっと逃げられると思うなよ
俺が１００回潰すまで貴様は逃げられないんだからな
それ」

俺はゼアルでカイトが遊馬に使った赤い鞭のようなもので捕獲
そして潰しまくる

「・・・いけ光と闇の竜（ライト＆ａｍｐ；ダークネスドラゴン）
えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリユスタレ）」

「うわぁあああああああああああ」

ライフは０に

「次だ・・・」

「いけサイコ
サイバー・エナジー・ショット」

「うわあああああああ」

またライフは０に

「いけマアト
真理の天罰（ヴィシテーション・オブ・マアト）」

更にライフは０に

「いけ銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）
破滅（はめつ）のフォトン・ストリーム」

その後も俺はカイザーを潰し続けた

「今日はここまでにしておいてやる
レイがまってるし帰るか」

呆然としているカイザーを放って俺は寮に帰った

第２５話　帝王への制裁　ＶＳ丸藤亮＝カイザー（笑）（後書き）

デュエルの内容は浅いですが
今回はカイザーを潰すだけが目的なので

第２６話　恋する乙女　ＶＳレイ（前書き）

お久しぶりの投稿です
遅れて本当にすいませんでした
アイデアはある程度考えてあるんでそれなりのペースで出していけたらいいなと思います

そしてついに主人公の見た目を決めたので後書きに書きます
アンケートの方も期間を延長し１／１５までにします

これからもよろしくお願いします

第２６話　恋する乙女　ＶＳレイ

Ｓｉｄｅ遊輝

カイザー（笑）を叩き潰した後帰路についたんだが

「しまった！記憶操作忘れてた！
俺じゃないで謎のデュエリストＡもしくは俺だと話せない呪いをかけるつもりだったのに」

俺は急いでかけていったんだが
呆然としているカイザー（笑）のそばに痴女がいた

「え、それ本当なの！
転入生が女子で、しかもあの石崎遊輝にぼこぼこにされたって」

「ああ」

「めんどくさいし記憶を改竄させてもらおう」

「「誰（誰だ）？」」

「デス・デストロイ・デス・クライシス　大気よ　水よ　白霧となれ
彼の者らに一時の安息を　眠りの霧」

「急に眠気が・・・」

「お前はゆ・・・」

じゃあさっさと記憶操作開始
まずは人払いの結界展開
カイザー（笑）の方は謎のデュエリストに襲われ潰されまくったと
そうだな、前の夜の時に俺が名乗ったのも名乗らなかったことにして
よし
黒い死神みたいな服を着たやつに襲われたことにしてっと
ＯＫ　カイザー（笑）の記憶操作終了
次は痴女だ
呆然としていたカイザー（笑）に話しかけて俺のこと聞いたのか
だったら謎の男に襲われたのを聞いたことにしてっと
よしこっちも終わりだ

「これでいいか
じゃあさっさと帰りますか」

俺は結界の入り口あたりまで来て結界を解く
そして部屋に帰っていく

「おい、レイちゃん開けていいか」

俺はノックして聞いてみる
こんなところでよくあるミスをするものか

「大丈夫だよ
どこかのアニメみたいに着替えてる途中なんてことはないから」

大丈夫か
俺はドアを開ける

まあ当然だけどどこぞの二次小説の痴女みたいなことをしてレイちゃんが待ってるなんてことはなかったよ
でもなんか奏（かなで）と話し込んでいるのは気になったけど

「ただいま」

「おかえり
突然だけど私とデュエルしてくれない」

「いいけど
じゃあ、レッド寮の裏にある森にでも行きますか」
一体どうしたんだ
まあ、あの面白映像を生で見れるなら見てみたいし

「あ、そうだ
これ飲むと精霊が見えるようになるよ
俺のささやかな能力（スキル）の一つで作ったんだけどね」

そう言って俺は栄養ドリンクのようなものを差し出す

「え、精霊が見えるようになるの？
私も精霊が見てみたいから飲んでみるよ」

そう言ってレイちゃんは俺が差し出した栄養ドリンクのようなもの

を受け取って飲む

「カルピス味？
なにこれ、苦いと思っていたけど」

よくある誤解ですね
そもそも俺が能力で作ったのにわざわざ苦くする必要ないじゃん

「いや、俺が作ったのにわざわざ苦くする必要ないじゃん」

「それもそうだね」

「じゃあ行くか」

「うん」

そう言って俺とレイちゃんは森の中に入っていったんだ

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅレイ

遊輝さんが出て行ってから少し経ったんだけど

「そう言えば遊輝さんのことあまり知らないなぁ」

「知りたいの？」

「うわぁ！
何時からいたの、というか遊輝さんと一緒に行ったんじゃないの？」

奏（かなで）さん何時からいたんですか？
いきなり出てきたからびっくりしちゃったよ

「いつも遊輝と一緒にいるわけじゃないよ
それで知りたいの？」

「うん、まあ」

「じゃあ教えてあげる
遊輝は転生者って本人が言ってたよね」

「うん、驚いちゃったけど
一度死んだことがあるなんて」

本当にあれはびっくりした
一度死んだことがあるなんて

「（一度じゃないらしいけど）
もっと詳しいことを言うと
遊輝は前世でこの世界に似た物語を見たことがあるらしいの」

「え、物語？」

物語ってどういうことだろう

「そう、物語
私も初めて聞いたときは信じられなかったけど
遊輝の能力で世界を渡って別の世界に行ったとき
この世界にそっくりで、しかも登場人物に十代君とか翔君とか隼人

君とかがいる
物語を見た時は本当に驚いたよ」

「へ、へぇえええ」

そ、それは驚くなあ
自分のいる世界に似た物語があったら

「少し話がそれちゃったけど
それで遊輝は偽善者を名乗ってるんだ」

「偽善者？なんで」

「物語を知ってるからだと思うよ
それに正義や善よりも偽善のほうが好きだしいし」

「そうなんだ」

偽善者かぁ

「それで実は遊輝はもう歳がね、５００を超えてるの
転生したときに不老不死になったらしくて」

不老不死かぁ
って不老不死？

「不老不死ってどういうことですか？」

「そのまんまの意味だよ
遊輝と仮契約した私たちも不老不死だけどそれは関係ないか

だって遊輝、死者さえ蘇させれるし」

「もういいです」

すごすぎて何も言えない

「そう？で、物は相談なんだけど
あなた遊輝のことがすきでしょ
私は精霊だから「ストップ！わ、私は遊輝さんのことそんな好きってい」
ラブ臭もするし好きなのはわかっているから少し聞いて
まあ、そんなに否定したいんだったらデュエルすればわかると思うよ
本当に遊輝のことが好きだと気付いたらさっきも言ったけど頼みがあるの
私も遊輝のことは好きだけど
私、精霊でしょ
だからフラグメイカーの遊輝のことを見張れないの
好意にはすぐ気付くけどフラグは無意識に立てちゃうから
来年いや今年、飛び級でここに入って
見張ってほしいの
大丈夫、方法はきちんとあるから
もちろん、その方法を成立させるために私も力を貸すわ」

方法のことは気になるけど
やっぱり言われて気になったけど
私ってやっぱり遊輝さんのことが好きなのかな
それにこれって私と奏（かなで）さんで遊輝さんを見張るってことなのかな

「本妻は私たち二人ってことで
まあ、私たちが見張ってもおそらく１０人や２０人くっつくことに

なるかもしれないから
まあくっついても私は遊輝にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩなんかするつもりはないし
ライネスから聞いた話なんだけど
異世界を旅してた時に相当数のフラグを立てたらしいし」

そ、それはなんというか

「おい、レイちゃん開けていいか」

「あ、帰ってきた
話はいったん終了ね」

あ、精霊化しちゃった
そうだちょっと変な返事してみよ
どんな反応するかな

「大丈夫だよ
どこかのアニメみたいに着替えてる途中なんてことはないから」

あれ開けるの遅いな
ようやく入ってきた
なんか安心したようなこと残念って感じの顔が混ざってるなぁ
何を考えてるんだろ

「ただいま」

「おかえり
突然だけど私とデュエルしてくれない」

デュエルすると分かるかぁ
まあやってみよう

「いいけど
じゃあ、レッド寮の裏にある森にでも行きますか」

行こうとしたらいきなり振り返った
なんだろう？

「あ、そうだ
これ飲むと精霊が見えるようになるよ
俺のささやかな能力（スキル）の一つで作ったんだけどね」

そう言って私は栄養ドリンクのようなものを差し出された
精霊が見えるようになるのかぁ
見てみたいし

「え、精霊が見えるようになるの？
私も精霊が見てみたいから飲んでみるよ」

そう言って私は栄養ドリンクのようなものを飲んでみたんだけど

「カルピス味？
なにこれ、苦いと思っていたけど」

本当になんでカルピス味？

「いや、俺が作ったのにわざわざ苦くする必要ないじゃん」

「それもそうだね」

でもぉ、やっぱりなんでカルピス味？
好きなのかなぁ？

「じゃあ行くか」

「うん」

そう言って私たちはレッド寮の裏の森に入っていったんだ

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

レッド寮も裏の森に歩いて行ったけどこの辺でいいかな

「じゃあそろそろやろうか」

「うん」

「「デュエル！！」」

「私のターン！ドロー！
恋する乙女を召喚！」

出た！
このデュエルの主役？女狐モンスター

「ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー
俺はＥ・ＨＥＲＯフェザーマンを攻撃表示で召喚
バトルだ
フェザーマンで恋する乙女に攻撃
フェザーブレイク！」

「きゃぁあああああああ」

悲鳴を上げるレイちゃん
ではなく恋する乙女

４０００－（１０００－４００）＝３４００

「恋する乙女のモンスター効果発動！
攻撃表示である限り戦闘によって破壊されない
って、え？なにこれ？」

お、始まったよ
あの大爆笑ものの謎のピンク空間

「お、お嬢さん大丈夫ですか？」

「あはぁあ、あ」

「あぁ」

っぷ
笑いをこらえるのがきつすぎる
レイちゃんは「え？」って顔だし

「まあいいや、うん、今のは何かの気のせいだよね
恋する乙女のもう一つのモンスター効果
恋する乙女を攻撃したモンスターは乙女カウンターを一つ乗せる」

「カードを一枚伏せターンエンド」

「私のターン、ドロー！
手札から装備魔法キューピッド・キスを発動する」

天使が恋する乙女にキスをする映像が流れる
間違いなくあの天使は
天使は天使でも堕天使に決まってる
きっとそうだ

「バトルよ、一途な思い」

また広がるピンク空間
レイちゃんが「また？」って顔をしている

「フェザーマンさぁあああああん
私の一途な思いを受け止めてぇーーーーー」

「あ」

避けるフェザーマン
ここまでは普通だ、ここまでは

「あぁあああん」

避けられてこける恋する乙女…なんだけど作為的なものを感じる

３４００－（１０００－４００）＝２８００

「ひ、ひどい！ひどいわあ！」

「すまない！そんなつもりじゃ」

目が怖い
あれは男を使うだけ使って捨てる女の目だ
今度は投げキッスしたよ
そして何がやぁあんだ
実際に見ると笑えるけど突っ込みどころが多すぎる

「私の言うこと聞いてくれるわよね？」

「もちろん！」

「じゃあ、遊輝を攻撃して」

「もちろん！君のためならできる！」

そう言ってフェザーブレイクを放ってくるフェザーマン
だけどダメージを受ける気はさらさらねえ

「トラップ発動、攻撃の無力化
これで攻撃は無効だ」

止められる攻撃って
こわ、あの乙女いま「っち」って舌打ちしたよ
こえええええええ

「あれ、また何か幻覚が
私疲れてるのかな?まあいいや、それよりも
乙女カウンターの乗っているモンスターを攻撃し逆にダメージを負ったら
装備魔法キューピッド・キスの効果が発動
そのモンスターをコントロールできる
カードを一枚伏せてターンエンドだ」

レイちゃん幻覚じゃないぜ
それは目の前で起こってることだ
それにしてもものカードは精霊は宿っていないんだが
一体どうしてこうなってるんだ
あのカード特別なカードなのか?

「俺のターン、ドロー
E・HEROザ・ヒートを攻撃表示で召喚
こいつは攻撃力が自分フィールド上に表側表示で存在するE・HEROと名のついたモンスターの数×200ポイントアップする
ザ・ヒートでフェザーマンに攻撃
ヒートナックル」

「トラップカード
ディフェンス・メイデン発動!」

フェザーマンをかばうように出てくる恋する乙女
そして燃えるこぶしに吹き飛ばされる
一体お前は何がしたいよ乙女

「あぁあーーーーーーーーーーーー」

悲鳴を上げるレイちゃん
ではなくやっぱり恋する乙女

２８００－（１８００－４００）＝１４００

「ディフェンス・メイデンの効果により
ザ・ヒートの攻撃は恋する乙女に移った！」

またしても広がるピンク空間

「また？」

声に出てるよレイちゃん

「ザ・ヒート！
お前はヒーローのくせにか弱い女性を攻撃するなんてなんてやつだ！」

「俺は、なんてことをしてしまったんだぁ！
お嬢さん、大丈夫ですか？！」

「自分を責めないで
戦うこと、それは宿命なのだから、ね？」

「は、惚れたぁああ！」

おい！ザ・ヒート
お前は何頭を抱え、敵の攻撃を避けたことを後悔している

そしてお前には恋人いるだろ
だめだ、面白いが突っ込みどころが多すぎる

「またぁ？ダメだ
私、病院にでも行ったほうがいいのかな
それはともかくザ・ヒートにも乙女カウンターが乗ったよ」

「カードを一枚伏せターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！
装備魔法ハッピー・マリッジを発動！」

結婚式に鳴らす鐘が鳴る映像が流れた…って何時の間に
何時の間にに変わった？
何時、恋する乙女の恰好がウエディングドレスに変わった

「その効果によりフェザーマンの分だけ攻撃力がアップする！」

また始まったぜ

「ザ・ヒート様ぁあああああ」

「あ」

「あぁあああん」

こけたよ、またこのパターンか

１４００－（１８００－１４００）＝１０００

「ザ・ヒート様、ひどい！」

「そ、そんなつもりじゃ」

「じゃ、私のために戦ってくださいますか？」

「もちろん！」

「名にこの娘
こんな女狐だったの？私の好きな恋する乙女って」

レイちゃん、なんかいろいろご愁傷様です

「お願い、ザ・ヒート様！」

「させるか！
2枚目の攻撃の無力化発動
戦闘は終わりだ」

また「っち」ってやったよあの乙女

「ええと、まあとりあえず私はターンを終了するよ」

「俺のターン、ドロー！
俺は天よりの宝札［アニメ版］を発動
効果によりお互いの手札が6枚になるようにドロー！
女の子には女の子ってな
E・HERO バーストレディを召喚
さらに二重召喚を発動
E・HERO レディ・オブ・ファイアを召喚」

広がるピンク空間だが
そこには燃えるオーラをまとった二人の修羅がいる

「嘆かわしいこと、そのような小娘如きに惑わされるとは」

「ザ・ヒート！私とのことは遊びだったの！」

「「あ、あぁあ」」

「え？え？」

「すごい迫力
これが大人の女性ってやつなのかなぁ」

おい！
レディ・オブ・ファイア、お前精霊じゃないだろ
なんだよ、私とのことは遊びだったのって
そしてレイちゃん
それは絶対違う！

「バースト・リターンを発動
このカードは自分のフィールドにバーストレディがいるとき発動可能
効果でフェザーマン、ザ・ヒートを手札に」

そして始まるカオス劇場

「ああ、俺たちは何をしていたんだ！」

「レディがいるのにほかの女に現を抜かすなんて！」

「「ヒーローにあるまじき行為だ！！」」

「あんたたちさっさと戻ってきなさい」

「「はぁーーい」」

「えぇーーーー！」

「さすがバースト先輩
私にはできないことをやってのける
そこに痺れる、憧れるぅう」

自分でやったことだが
カオス度が原作より高過ぎる
なんだこれは

「更に融合を2枚発動
バーストレディと手札のフェザーマン
レディ・オブ・ファイアと手札のザ・ヒートを融合
来い　E・HEROフレイム・ウィングマン　E・HEROフレイム・ブラスト
そして2体で攻撃
ダブル・フレイムシュート」

そして諸悪の根源
恋する乙女は消える

1000－（2100－400）－（2300－400）＝－2600

「きゃあ」

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫
ありがとう遊輝さん
あなたとデュエルして自分の気持ちに確信が持てた
私あなたのことが好きです、私の気持ちを受け取ってください！」

え、俺？

「俺なんかでいいのか？俺って不老不死だし「知ってます！
奏（かなで）さんから聞いてます
私のために動いてくれる遊輝さんを見て気づいたんです
私遊輝さんのことが好き
付き合ってください、そして仮契約してください」
わかった！
俺もレイちゃんのことは好きだ
ただ、仮契約は待ってくれ
せめて結婚してからだ
まだ若いのに成長しなくなったら不気味だろ」

「うん」

落ち込み気味でいうレイちゃん

「そうだ『現実化（リアライズ）』これをあげるよ
おそろいの腕時計だ
これはＩＳって物語に出てくる代物を改造したものでね

中に結構なものを収納できるんだ
使い方は二つ
その腕時計の画面を押して電子映像を空中に浮かべて選ぶか
入れたいもの出したいものを念じると
中に物を入れたり外に出したりできるよ」

「うわぁあ、ありがとう」

「それともう一つ『現実化（リアライズ）』
この指輪をプレゼント」

そう言って俺はダイヤのついた指輪をある能力（スキル）で作りレイちゃんに
渡す

「これ高いんじゃ？」

「大丈夫
俺の能力で作ったもんだ
腕時計の中にでも入れておいてくれ
あと俺のことは遊輝でいいよ」

「わかったよ遊輝
これで正妻は私たち二人かな」

「二人ってやっぱり
あいつか、いつ俺はフラグを立てた
もう一人って奏（かなで）のことだろ
精霊として覚醒させた直後からあんな感じだからやっぱりと思ってた
たけど
一体いつフラグ立てた」

「まあいいじゃん
それよりも、奏(かなで)さんが私が来年、正式な方法でこの学園に入学する
手段があるって言ってたけどそれって？」

「ＧＸ大会だ
この世界が本当にそうならＧＸ大会で優勝すればいい
どうせ奏(かなで)のことだ
手伝うって言ったんだろ
まあいいや
とりあえず帰って寝よ」

「そうだね」

それから帰って寝て
ＧＸ大会のことや俺のことを話して時間はずぎていった
そしてレイちゃんは帰っていったんだ
この時、十代たちはこのことを知ったときはめちゃくちゃ驚いてた
俺はレイちゃんと付き合うことになったんだが
俺はロリコンじゃない
幼女だったら何でもいい変態じゃない
レイちゃんだからいいんだ
まあ、どっちにしても変態か
レイちゃんだけに対するロリコンってことで

第２６話　恋する乙女　ＶＳレイ（後書き）

主人公の見た目

黒髪黒眼のよくいる日本人
髪型はめだかボックスの球磨川　禊
顔はめだかボックスの人吉　善吉
体格はよくいるモブＡに見えるけど脱ぐとある程度は引き締まってるくらい

《ハッピー・マリッジ》効果
装備魔法
自分フィールド上に相手からコントロールを得たモンスターが表側表示で
存在する場合に発動する事ができる。
装備モンスターの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の数値分アップする。

《　恋　（こい）する　乙女　（おとめ）》効果
効果モンスター
レベル２／光属性／魔法使い族／攻撃力４００／守備力３００
このカードは表側攻撃表示でフィールド上に存在する限り、戦闘で破壊されない。
このカードを攻撃した相手モンスターに乙女カウンターを１つ乗せる。

《キューピット・キス》効果
装備魔法

装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを受けた時、
ダメージステップ終了時に攻撃を行った乙女カウンターを置いている
モンスターのコントロールを得る。

《ディフェンス・メイデン》効果
永続罠
自分フィールド上に「恋する乙女」が表側表示で存在する限り、
相手モンスター1体が自分フィールド上のモンスターに攻撃宣言を
した場合、
その攻撃対象を自分フィールド上の「恋する乙女」1体に移し替え
る事ができる。

第２７話　融合封印　十代ＶＳ三沢＝空気

Ｓｉｄｅ三人称

ここはデュエルアカデミアの港
今物資の搬入が行われている

「ああ、それはあっちに持って行って」

そう購買部のおばさんであるトメさんが作業員を動かしている
その付近の海面には泡が出ている

「あ？う？」

トメさんは何かが気になり後ろを振り向いたが
その時その場所からはすでに泡は消えていた

そのすぐあと
レッド寮近くの断崖に明らかに怪しい恰好をした一人の男の姿があった

「俺にかかればこんなもんさ、デュエルアカデミア
その秘密、この国崎耕介が暴いてやるぜ」

どうやらこのスパイの真似をしている勘違い男の名前は国崎耕介という名前らしい
明らかに自意識過剰だろう

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ丸藤　亮＝カイザー

ああ憂鬱だ
あの謎のデュエリストに襲われデュエルで負け続けてからどうも調子が出ない
ま、今はそれはいいだろう
今、俺は学園対抗デュエルに出る生徒を決める話し合いに参加をしている

「何故です～の？
デュエルアカデミアノース校との友好デュエルゥ～には
昨年と同じようにシニョール亮丸藤が代表に決まっていたはずなの～ね」
「それが、向こうの代表が一年生だと言うんだなぁ」

一年生で強いデュエリストならあの二人だろう

「一年生！」

「そういうわけなので
こちらの代表も一年生がいいだろうということになってねぇ
どうだろう丸藤君？」

「俺も構いません」

最近、デュエルに集中できないからな
だったらそっちのほうがいいだろうしな

「では問題は

誰を新しい代表にするかだ」

やはりあの二人のどちらかだろう

「遊城十代もしくは石崎遊輝」

「うん？」

「これは大変なことになりそうだにゃあ
ねえファラオ」

「ニャア」

「遊城十代？それに石崎遊輝？」

「本気か？」

「彼らのどちらかなら
面白いデュエルを見せてくれると思います」

「彼らなら実力も申し分ない」

「（嫌なの～ね
ドロップアウトボーイ～が代表になるなん～て
誰か対抗できるよう～な
ウニャウニャウニャウニャウニャ、あぁ）
では私は三沢大地と天上院明日香を推薦するの～ね」

「ラー・イエローの三沢大地君とオベリスク・ブルーの天上院明日
香君を？」

「４人をトーナメント形式で戦わせて優勝したものを代表にするのはどうでしょう～ね？」

「どう思うね？丸藤君」

成程

それはいい考えかもしれない

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

「「え、俺ら？」」

思わず十代とかぶってしまったな

まさか、俺が代表候補になるとは

「そうなのニャァ～

三沢君と天上院君とトーナメント形式でデュエルして

優勝した生徒がノース校とのデュエルに出場できるのニャア」

俺がこの物語

いや、この世界に加わったために起きたイレギュラーか

こいつは代表になってやろうじゃないか

俺と十代、そして三沢は向き合って笑った

「いいデュエルを期待してるニャ」

授業が終わった後

「すごいよアニキ、遊輝
学園の代表なんて」

「今までオシリスレッドから代表が選ばれたことはないんだなぁ」

「えっへっへっへ」

「へぇえええ」

隼人って物知りだな
そこまでふつうは調べないだろ

「案外早く戦う機会が来たな？」

「ああ、あれから俺は日夜研究を続けている
お前のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）デッキに対抗できる
７番目のデッキを」

「できたのか？」

「いや、だがデュエルまあでには間に合わせるさ」

「楽しみにしてるぜ」

「ああ、そして石崎遊輝
君に言ってなかったが君と戦うための８番目のデッキも完成させて
みせる
君が使うあらゆるデッキに対抗できるデッキをね」

俺のデッキに対抗できるデッキか

「俺も楽しみしてるぜ」

「7番目、8番目のデッキ一体どんなのだろう?」

「これはすごいデュエルになる気がするぞぉ」

確かにな

「よしさっそく帰ってデッキの調整だ!」

「俺らはライバルだけど
お互い頑張ろうぜ!」

「ああ、勿論だぜ!」

そう言って俺と十代たちは別れたんだ

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ十代

対抗デュエルか
絶対出て見せるぜ
そのためにはデッキ調整だ
そう思って遊輝と別れて帰ってる途中

「なあちょっと」

「うるさいな、忙しいんだ」

「お、おい」

同じオシリス・レッドの制服を着た人がラー・イエローの生徒に邪魔者扱いされてるあんな人いたっけな

「なんだかすごく年を取った生徒だなぁ」

確かにそうだなあ、そうか分かったぞ

「なあ、あんた」

「うう？分かったおっさん、万年落第生だろ？」

「お、おっさん？」

「いいって、いいって分かってるよ頑張ればそのうち進級できるさ諦めるなよさあ、寮に帰ろうぜ」

一緒に帰ってこの人と話そう

「いや、俺は」

「アニキ待ってよう」

「（あんな人いたかなぁ？）」

それから寮に帰ったんだけど

「あむあむあむ、うめぇえ」

「十代、そのおっさんどうしたんだ？」

「遊輝か、この人万年落第生だしくてさ
一緒に飯でも食おうかと思ってさ
それよりもおっさん
早く食べないとご飯のおかわりなくなるぜ」

「あ、ああ」

「ここのご飯をそんなにおいしそうに食べるのはアニキだけだよ」

「全くだよ」

「い、いただきます」

食べた後、俺らはおっさんを連れて部屋に行ったんだ

こいつかなぁ
やっぱりこいつを入れようかな

「三沢君はどんなデッキで来るんだろう」

「彼のことだ

きっと十代のデッキを研究し尽くしてるんだろうな」

「アニキィ」

よし

「うーん、やっぱこれがいいや
よし」

「ア、　アニキ？」

「三沢がどんなデッキで来ようと俺はこのデッキを信じる」

「アニキらしいっすね」

「うん」

俺らしいのが一番だろ
あ、おっさんがなんかカード見てる
何してんだろ

「おっさん、どうした？」

「おっさん言うな！
俺は国崎耕介（本名言っちまった）」

「そっか国崎さんね
スカイスクレーパーか？
国崎さんも好きなのか？」

「俺はデュエルなんか好きじゃない」

デュエルが好きじゃない？
じゃあなんでデュエルアカデミアに来てるんだ？
それにデュエルは楽しいと思うけどな

「え？じゃあどうしてデュエルアカデミアに？」

「あ、いやその
落第ばっかりで楽しくないなあとか」

そういうことか

「あ、その気持ち俺には分かるんだなぁ
俺も自分はダメなんだって諦めてたから」

「隼人」

「でも！十代のデュエルを見ているうちに俺もまちゃり対って思うようになったんだあ」

なんか照れるなあ

「えっへへへへ」

「隼人君
そうだよ、国崎さんもアニキのデュエルを見たらきっとわくわくするよ
ちょうど学園代表決定トーナメントもあるし」

「あ、ああ（ふん、俺はお遊びに付き合ってる暇はないんだよ
そうだ！！こいつらなら何か知ってるかもしれないなあ）
なあところでうわさで聞いたんだけど、学園の生徒が行方不明にな
ってるってホントかなあ？」

こいつは本当のことは言えないぜ
あそこは本当にやばかったしな
翔と隼人に目配せして

「聞いたことないぜ」

「僕も聞いたことないっす」

「俺もなんだなぁ」

「そうか、ただのうわさかぁ（っち、使えねえな）」

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ三沢＝エアーマン＝ロリコン

いよいよあいつと戦うことができる

「こんなに熱くなっているのは久しぶりだ
フレイム・ウイングマン
倒した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える
十代のキーカード」

手ごわいモンスターだ
だが

「こいつをつぶすには
バーストレディかフェザーマンを封じておけばＯＫと」
次はサンダー・ジャイアントだ
「こいつは厄介だ
攻撃力２４００以下のモンスターを召喚時に破壊してしまうからな
スパークマンとクレイマンの融合には要注意だ」
次はテンペスター
いや、これじゃだめだ
個々のモンスターに対処していたんでは俺のデッキが回らなくなる
「何かもっと決定的な方法があるはずだ
やつのデッキのキーカードをつぶす方法が、あ！」
あったはずだ
確かあのカードなら
「遊城十代、お前の融合ヒーローは俺の前に現れることはない
ふ、ふふふ、ふっはっはっはっは」
これで勝ったも当然だ
俺はこの時忘れていたんだ
これだけでは十代の融合
いや、十代のデッキは止まらないということを
Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ十代

「いっただっきまーす！
朝飯、朝飯米がうめぇえええ
おかずはめだかの黒焼きか
これもなかなか、むにゃむにゃむにゃ」

「アニキ、それはめざし！」

「そうだぞ十代
ふつうめだかは食べねえぞ」

「遊輝じゃねえか
今日はお互い頑張ろうぜ」

「アニキに遊輝も
二人とも緊張感ないっすねえ」

「「なんだよ翔」」

「なんか気が立ってるんだなあ」

ほんとにどうしたんだ翔

「何言ってるんすか
今日は代表決定トーナメントっすよ
本当なら緊張して食欲ないようとか
はぁ、昨夜は全然眠れなかったよう
ってのが相場でしょ」

「翔、十代に相場を求めるな
ま、俺もこの程度邪緊張しないけれどな」

相場を求めるなって
ひでえなぁ
でも

「ま、遊輝の言うとおりだぜ翔
とにかく、デュエルの前はいっぱい食べて力をつけなきゃな」

「アニキらしいや
そういえば、国崎さん
どこにいっちゃったんだろ」

「国崎さんって
あのおっさんのことか」

「そうなんだなあ
国崎耕介さんっていうらしいんだなあ」

それから代表決定トーナメントまで特に何も無く進み

「シニョールシニョーラお待たせしたの～ね
ただいまから、学園代表決定トーナメントを始めるの～ね」

「「「「「「「「「わぁあああああああああああ」」」」」」」」」

すげぇ盛り上がってんなあ
絶対優勝して俺が代表になってやるぜ

「第一戦
ラー・イエローからは三沢大地！
そして、オシリス・レッドからは遊城十代ぃーと」

「その顔だとできたのか？」

俺を倒すための第7のデッキってやつが

「ああ、楽しみにしていろ
お前を倒す7番目のデッキを」

「俺だって負けないぜ」

「アニキ負けないでー！」

翔の応援が聞こえるぜ

「十代、俺と戦うまで負けんじゃねえぞー！」

遊輝からの応援も聞こえたぜ

「では、始めるの～ね」

「行くぞ、三沢！」

「「デュエル！！」」

「俺のターン、ドロー！
カーボネドンを守備表示で召喚」

あらわれたのは機械っぽいドラゴン
なんかかっこいいぜ

「お前の7番目のデッキ見せてもらうぜ
俺のターン、ドロー！
俺はE・HERO（エレメンタルヒーロー）バーストレディを攻撃表示で召喚」

「（バーストレディ
フェザーマンと融合する事で
十代の切り札、フレイム・ウイングマンへと姿を変える）
いきなり引き当てたか？」

「行くぜ、三沢！
バーストレディでカーボネドンを攻撃
リバースカードを一枚伏せてターンエンドだ」

「まだこれからだ、俺のターン
（来た、十代お前を倒すキーカードがな）
俺はオキシゲドンを攻撃表示で召喚
オキシゲドンでバーストレディを攻撃」

「トラップカードオープン
ヒーローバリア
このカードはフィールドにE・HERO（エレメンタルヒーロー）がいるとき
一度だけ相手モンスターの攻撃を無効にする！」

青いバリアがバーストレディを守る
甘いぜ、三沢

「そう簡単に、おれのE・HERO（エレメンタルヒーロー）は倒せないぜ」

「そうだろうな、それでこそ一番君だ」

「いや、俺は一番じゃないぜ
俺と遊輝じゃ遊輝のほうが勝ってるからな」

「そうか（だが、このカードで二番も返上だぞ十代）
俺はリバースカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー
俺はE・HERO（エレメンタルヒーロー）スパークマンを攻撃表示で召喚！
更に手札から装備魔法スパーク・ガンを発動！
スパークマンに装備する
このカードの効果により相手モンスター一体の表示形式を変えることができる」

スパークマンがスパーク・ガンを打つ姿はやっぱりかっこいいぜ

「オキシゲドンを守備表示に変更
バーストレディ、オキシゲドンに攻撃だ
バーストファイヤー！」

「十代！
酸素に炎がぶつかるとどうなるか知ってるか？」

「え？」

「今、身をもって知るといい
特殊効果発動、オキシゲドンが炎族モンスターに戦闘で破壊された時

お互いのプレイヤーは８００ポイントのダメージを受ける！」

４０００－８００＝３２００

４０００－８００＝３２００

「やるな

だけどお前のフィールドはがら空きだぜ

いけぇスパークマン、三沢にダイレクトアタックだ」

３２００－１６００＝１６００

「へへぇ、どうだ

俺のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）は強いだろう？

俺はカードを一枚伏せターンエンドだぜ」

「確かにお前のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）は強い！

だが、お前が勝つ確率は１％もない」

「何？」

どういうことだ？

「（十代にキーカードを使わせる為には

俺も全力を出さなければ）

見せてやるよ、俺の７番目のデッキの力を！

俺のターン、ドロー

俺はハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！

ハイドロゲドンでバーストレディ―を攻撃！」

っくバーストレディが
だけどダメージだけは防がせてもらうぜ

「トラップカードオープン
ガード・ブロック
こいつの効果によって俺への戦闘ダメージは0になり
俺はデッキからカードを1枚ドローするぜ」

「だが、バーストレディは破壊した
よってハイドロゲドンの特殊効果発動
相手モンスターを戦闘で破壊した時
デッキからもう一体ハイドロゲドンを特殊召喚する事ができる」

「うぅ」

これはちょっとまずいか？

「さらに手札から装備魔法発動
リビング・フォッシル！
このカードは自分の墓地からモンスターを一体特殊召喚し
そのモンスターに装備される
生きた化石となり、甦れオキシゲドン」

この三体はまさか

「ただし攻撃力は１０００ポイント下がり効果も封じられる
これでそろった」

やっぱりか

「マジックカード
ボンディング－Ｈ２Ｏ（エイチツーオー）を発動
このカードは自分フィールド上のハイドロゲドン２体とオキシゲドン１体
つまり、水素二と酸素一を化合する事で水を生成する」
化学は分からないんだけどなあ

「ウォーター・ドラゴンを特殊召喚」

「ウォーター・ドラゴン」

やっぱりウォーター・ドラゴンだったか

「俺のターン終了だ
（どうだ十代、これでお前はキーカードを出さざるおえないはずそうなれば！）」

「さすがだなあ、すごいコンボだ
（遊輝とは違ったタイプですごいコンボだな）
だが、まだこれからだ
俺のターン、ドロー
強欲な壺を発動
２枚ドローするぜ
（よし）
お前が三体のモンスターを生け贄にエースモンスター
ウォーター・ドラゴンを呼んだのなら
俺もお前の全力にこたえてやるぜ！
場のスパークマン
そして手札からフェザーマン、バブルマンを融合させ

俺の最強のヒーローの一体、テンペスターを召喚するぜ！
マジックカード　融合発動！」

「この時を待っていたぞ！」

「はぁ」

「トラップカードオープン！！封魔(ふうま)の呪印(じゅいん)！
このカードは手札からマジックカードを一枚捨てることで発動
相手のマジックカードの発動を無効にし破壊する！
また、この効果で破壊されたカードはこのデュエルではもう使うことはできない！」

「何！？融合が使えないだって！」

三沢はこれを狙っていたのか
だが、ちょっと驚いたがこれだけじゃ俺の融合は止まらないぜ

「お前の切り札はＥ・ＨＥＲＯ(エレメンタルヒーロー)同士を融合して召喚するモンスターだならばそれをできなくすればいい」

確かにな
遊輝と会う前の俺だったら負けてたかもしれない
だけど、今の俺の融合の手段は融合というカードだけじゃないぜ

「これがお前のために考え抜いたタクティクスだ
俺の計算に間違いはない」

「確かにな
前までの俺だったらびびってたかもしれないが

今の俺はそう簡単に止められないぜ」

「なんだと！」

「俺は天使の施しを発動するぜ
3枚ドローし手札を2枚捨てる
もう一枚だ
俺は再び天使の施しを発動
3枚ドローし手札を2枚捨てる
（遊輝の前世じゃ世界じゃ禁止カードだったらしいけどこの世界じゃそんなことはないからな）
俺はさらにホープ・オブ・フィフスを発動
墓地のE・HERO（エレメンタルヒーロー）バーストレディ、スパークマン、フェザーマン、バブルマン、クレイマンをデッキに戻しシャッフルする」

デッキよ答えてくれ

「そして2枚ドロー！
（来てくれた）
俺は超融合を発動
手札を一枚捨て俺のスパークマンと三沢お前のウォーター・ドラゴンを超融合！」

「なんだと！！」

「来いE・HERO（エレメンタルヒーロー）アブソルートZero（ゼロ）
アブソルートZero（ゼロ）とどめだ
瞬間氷結（Freezing at moment）！！」

「うわぁあああああああああああ」

1600－2500＝－900

危なかったぜ
今回は引きが良かったから勝てたが
一歩間違えたら負けてたぜ
だけどめちゃくちゃ楽しかったな

「勝者オシリス・レッド遊城十代！！
おめでとう、次は決勝だ」

「やったアニキ！」

「おめでとう」

「やったな十代、次は俺の番だな
決勝に俺も行って見せるぜ」

「ああ、勿論だ
お前も絶対決勝に来いよ」

「ああ」

遊輝
お前もデュエルがんばれよ

「負けたぜ
また位置から計算しなおしだ
いつかお前を超える9番目のデッキを作れるようにな」

「おう、楽しみにしてるぜ
ガッチャ」

「楽しいデュエルだったぜ」

それで俺と三沢は握手をしたんだ

「遊輝
お前とのデュエルはまたの機会にな」

「ああ
お前の８番目のデッキ楽しみにしてるぜ」

「わかってるさ
お前も次のデュエルがんばれよ」

そしてしばらく時間は流れて

「それでは学園代表決定トーナメント第２試合を始めるの～ね
オベリスク・ブルーからは天上院明日香
オシリス・レッドからは石崎遊輝ぃっと」

「久しぶりのデュエルだな痴女」

「私は痴女じゃないって何度言ったらわかるの
いいわ、その減らず口を叩けないようにしてあげるわ」

「行くぞ！！」

「「デュエル！！」」

こうして遊輝と明日香のデュエルが始まったんだ

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

第２７話　融合封印　十代ＶＳ三沢＝空気（後書き）

次回は遊輝ＶＳ明日香です
楽しみにしてくれると嬉しいです

《カーボネドン》効果
効果モンスター
レベル１／光属性／ドラゴン族／攻撃力１００／守備力６００
自分の墓地にカードが１０枚以上存在する場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
デッキまたは手札から「ダイヤモンド・ドラゴン」１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

《リビング・フォッシル》効果
装備魔法
自分の墓地に存在するモンスターを1体選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。
装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントダウンし、効果モンスターの効果は無効化される。
このカードが破壊された場合、装備モンスターを破壊する。

第２８話　痴女との再戦　ＶＳ明日香

時はさかのぼり
代表決定トーナメントについて聞いた日

Ｓｉｄｅ十代

「「え、俺ら？」」

リアクションが遊輝とかぶっちまったぜ

「そうなのニャァ～
三沢君と天上院君とトーナメント形式でデュエルして
優勝した生徒がノース校とのデュエルに出場できるのニャア」

こいつはわくわくするぜ
代表になってノース校とのデュエルに出たいぜ

「いいデュエルを期待してるニャ」

授業が終わった後

「すごいよアニキ、遊輝
学園の代表なんて」

「今までオシリスレッドから代表が選ばれたことはないんだなぁ」

「えっへっへっへ」

「へぇえええ」

なんか照れるな
遊輝はなんかに感心してるな

「案外早く戦う機会が来たな？」

「ああ、あれから俺は日夜研究を続けている
お前のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）デッキに対抗できる
７番目のデッキを」

もしかして

「できたのか？」

「いや、だがデュエルまあでには間に合わせるさ」

「楽しみにしてるぜ」

マジで楽しみにしてるぜ
どんなデッキなのか考えるだけれもわくわくするぜ

「ああ、そして石崎遊輝
君に言ってなかったが君と戦うための８番目のデッキも完成させてみせる
君が使うあらゆるデッキに対抗できるデッキをね」

遊輝にも下剋上？
いや、挑戦状？
あ、そうなんて言うんだっけな

忘れちまったけどとにかく勝負だっていうようなことを言ってる

「俺も楽しみしてるぜ」

遊輝も楽しみみたいだな

「7番目、8番目のデッキ一体どんなのだろう？」

「これはすごいデュエルになる気がするぞぉ」

そうだな
すごく楽しいデュエルになる気がするぜ

「よしさっそく帰ってデッキの調整だ！」

「俺らはライバルだけど
お互い頑張ろうぜ！」

「ああ、勿論だぜ！」

お互いに全力を出して頑張ろうぜ、遊輝
俺は遊輝とそう言い合って別れたんだ

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

十代たちと別れてからしばらくしたけど何しようかな
デッキの調整って言っても使うデッキももう決めてるし
あ、そうだ

とりあえずドローパンでも買いに行くかな
そう思ってやってきました購買部

「トメさん、これください」

「はいはい、これね
２００ＤＰだよ」

「これで支払ったっと」

「いつも買ってくれてありがとね」

「それほどでもないですよ
さようなら」

「さようなら」

さてどこでこれ食べよっかな
そうだ屋上に行こう
で、屋上に来たけどやっぱり

「いい景色だなあ
奏（かなで）、実体化して一緒に食わないか？」

『うん、そうする』

そう言って実体化したデュエルアカデミアの制服をなぜか着た奏（かなで）

「お前はどこでその制服を用意したんだ？」

「うーん、禁則事項です☆」

「そうかよ
あ、そういえばレイちゃんと話しているときさ
お前にフラグを立てたって改めて認識したけど
お前は俺のどこが好きなんだ
俺、とくにフラグ立てるようなこと言ってなかったと思うけど」

ほんとに俺は何時
奏（かなで）にフラグを立てたんだ

「あちゃー
レイちゃん言っちゃったんだ
まあいいや、実はね
遊輝に力を注いでもらって完全に精霊として完全に覚醒する前から
多少は自我があったんだ
それでいつも遊輝の姿見てたらかっこいなあとか思ってね
見ているうちにそういった憧れとかが
なんていうんだろ愛とかそういう感情に変わってきたって感じかな」

それは
どうやってそのフラグは回避しろというんだ
絶対に回避不能なフラグだったとは

「そうだったのか」

「遊輝は私のこと好き？」

「え、いきなり何言ってるんだ？
好きに決まってんだろ

外見もかわいいし
勿論、ｌｉｋｅじゃなくてｌｏｖｅのほうで」

「ありがとう、私うれしい
だけど遊輝ってやっぱり女たらしだと思うんだ
こんなかわいい女の子二人も捕まえてるんだもん」

おいおい

「自分で自分のこと可愛いっていうのはどうなんだ
ま、事実だけどよ」

「ありがと
じゃ、さっき買ったパンでも食べる？」

「そうだな
ほい、クリームパン」

「ありがと
あむあむあむ、おいしいな、これ」

「そうか、よかった
じゃ、俺はこのホットドッグをパクッと食いますか」

そう言って俺も買ってきたパンを食う
食後

「じゃ、奏（かなで）
帰るから精霊化してくれないか？」

「うん分かった」

そう言って精霊化する奏（かなで）

じゃ、帰りますか

で、寮に帰って夕飯の時間になったから来たんだけど

「あのおっさん誰だ？」

そうなのだ、十代たちと一緒に変なおじさんがいるんだ

あれ、あんな生徒は確かにいなかったはず

えっと誰だったかな？

あ、そうだ

こんな時こそ地球（ほし）の本棚（弱）の出番じゃないか

だけど、やっぱいいや

あいつらに直に聞こう

「十代、そのおっさんどうしたんだ？」

「遊輝か、この人万年落第生だしくてさ

一緒に飯でも食おうかと思ってさ

それよりもおっさん

早く食べないとご飯のおかわりなくなるぜ」

万年落第生って

なんでこのおっさんが万年落第生に見えるんだ

どう考えても、そこまで落第続けてたら退学になるだろ

「あ、ああ」

このおっさんもちょっと戸惑ったように返事してるし

「ここのご飯をそんなにおいしそうに食べるのはアニキだけだよ」

確かにここのご飯をそんなにおいしそうに食べるのは十代くらいだな
俺なんか食べた後に
ダイオラマ魔法球生成で作った
トリコの食材が出る別荘とか
モンハンのモンスターが出てくる別荘とかに行って
ジュエルミートやらチョコレートマトとか
アプノトスの肉とかカジキマグロと黄金魚の刺身とか
よく食ってるちゅうのに

「全くだよ」

「い、いただきます」

おっさんも戸惑ってるぜ
俺もさっさと食うか

「よしご飯もってっと
さすがにライバルだし少し離れた席で
いただきます」

まあ確かにうまいんだけど

食べた後、十代たちはおっさんを連れて部屋に帰ったんだけど

「さて十代が相手ってことは
クロノスがさせないと思うから
最初の試合はこいつかな」

そう言って俺は一つのデッキを取る

「ま、弱点があるとすれば事故ったら負けるデッキということだけど
このデッキでやりたいし」

これで行くか
じゃあ、十代用のデッキも考えないと

「十代を魔改造したら俺も勝てないことが結構あるようになってきたからな
確実に勝てるシンクロ、エクシーズを使わないデッキにしないと」

そうだなこいつがいいか
こいつなら十代にも勝てるだろ

「じゃあ、ちょっと出かけてくるかな」

そう言って俺は部屋を出る
校則でこの時間は外出禁止だがまあばれなきゃいい
俺は廃寮に向かった

「にいさん」

「よ、痴女
お前のアニキについて情報が入ったんだ」

「痴女じゃないわ
それより兄さんの情報が手に入ったって本当なの」

嘘つく必要ないだろ

「ああ
どうやら学園の上層部は海外への留学扱いにしてるらしい
ほかにも留学扱いの生徒が何人もいたが
そいつらも行方不明者だった
もしかしたら学園の上層部
しかも、鮫島校長よりも上の人間だったら知ってるかもしれない
くらいしかわからなかったけど」

これは本当の話だ
あの後思い出したんだが
名前は忘れたがあのおっさん
確かジャーナリストでここのコンピューターにハッキングしてた時
そんな感じのデータを手に入れてたはずと思って探したら出るわ出るわ
明らかにおかしい留学生の数だったよ
まったく

「それは
とりあえずありがとう」

「どういたしまして
それよりも明日は学園代表決定トーナメントだな
お前にもまた勝たせてもらうぜ痴女」

「だから痴女じゃないわ
っていない、あいつ絶対にとっちめてやるんだから」

痴女がなんか言ってたが俺は無視して帰っていったんだ

翌日の朝、食堂で

「いっただっきまーす！
朝飯、朝飯米がうめぇえええ
おかずはめだかの黒焼きか
これもなかなか、むにゃむにゃむにゃ」

おいおいめだかって

「アニキ、それはめざし！」

「そうだぞ十代
ふつうめだかは食べねえぞ」

何を言ってるんだ十代
ふつうめだかは食わん

「遊輝じゃねえか
今日はお互い頑張ろうぜ」

「アニキに遊輝も
二人とも緊張感ないっすねえ」

どういう意味だよ

「「なんだよ翔」」

「なんか気が立ってるんだなあ」

全くだ

「何言ってるんすか
今日は代表決定トーナメントっすよ
本当なら緊張して食欲ないようとか
はぁ、昨夜は全然眠れなかったよう
ってのが相場でしょ」

おいおい
俺はこの程度じゃ緊張しないし
十代に相場は求めちゃだめだと思うぞ

「翔、十代に相場を求めるな
ま、俺もこの程度邪緊張しないけれどな」

「ま、遊輝の言うとおりだぜ翔
とにかく、デュエルの前はいっぱい食べて力をつけなきゃな」

「アニキらしいや
そういえば、国崎さん
どこにいっちゃったんだろ」

あのおっさんのことか？

「国崎さんって
あのおっさんのことか」

「そうなんだなあ
国崎耕介さんっていうらしいんだなあ」

あのおっさん、国崎耕介っていうんだ

それから代表決定トーナメントまで特に何も無く進み

「シニョールシニョーラお待たせしたの～ね
ただいまから、学園代表決定トーナメントを始めるの～ね」

「「「「「「「「わぁあああああああああ」」」」」」」」

なんでクロノスの掛け声でこんなににぎやかになるんだ？

「第一戦
ラー・イエローからは三沢大地！
そして、オシリス・レッドからは遊城十代ぃーと」

なんか話し合ったな

「アニキーがんばってー！」

翔も応援してる
俺も決勝ではあいつと戦いたいし

「十代、俺と戦うまで負けんじゃねえぞー！」

「では、始めるの～ね」

始まるようだ

「「デュエル！！」」

そしてデュエルは進んでいき

「俺は超融合を発動
手札を一枚捨て俺のスパークマンと三沢
お前のウォーター・ドラゴンを超融合！」

物語後半で本来手に入れるカードだな
ま、そんなのどうでもいいけど

「なんだと！！」

「来いＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）アブソルートＺｅｒｏ（ゼロ）
アブソルートＺｅｒｏ（ゼロ）とどめだ
瞬間氷結（Ｆｒｅｅｚｉｎｇ ａｔ ｍｏｍｅｎｔ）！！」

「うわぁあああああああああああ」

１６００－２５００＝－９００

十代が勝ったか
次は俺の番だな
俺たちは十代のもとに向かった

「勝者オシリス・レッド遊城十代！！
おめでとう、次は決勝だ」

「やったアニキ！」

「おめでとう」

「やったな十代、次は俺の番だな

決勝に俺も行って見せるぜ」

「ああ、勿論だ
お前も絶対決勝に来いよ」

「ああ」

勿論決勝に行って見せるぜ

「負けたぜ
また位置から計算しなおしだ
いつかお前を超える9番目のデッキを作れるようにな」

「おう、楽しみにしてるぜ
ガッチャ」

「楽しいデュエルだったぜ」

それで十代と三沢は握手をしたんだ

「遊輝
お前とのデュエルはまたの機会にな」

「ああ
お前の8番目のデッキ楽しみにしてるぜ」

「わかってるさ
お前も次のデュエルがんばれよ」

そしてしばらく時間は流れて

「それでは学園代表決定トーナメント第2試合を始めるの～ね
オベリスク・ブルーからは天上院明日香
オシリス・レッドからは石崎遊輝ぃっと」

やっぱりおれもやる気のない紹介されたな

「久しぶりのデュエルだな痴女」

「私は痴女じゃないって何度言ったらわかるの
いいわ、その減らず口を叩けないようにしてあげるわ」

出来るならしてみな

「行くぞ！！」

「「デュエル！！」」

「私のターン、ドロー！
エトワール・サイバー召喚
さらにリバースカードを3枚セットしターンエンドよ」

「次は俺のターンだドロー
俺は占い魔女ヒカリちゃんを攻撃表示で召喚」

「「「「「「「「「かわいいーーーーーーーーー！」」」」」」」」」

うるさいわ

「さらに速攻魔法、受け入れがたい結果を発動！
このカードは占い魔女と名の付くモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時
手札から一体の占い魔女と名の付くモンスターを特殊召喚する！
俺は手札から、占い魔女アンちゃんを攻撃表示で特殊召喚！」

「攻撃力0を攻撃表示？
私をなめてるの？」

何を言ってるんだ
こいつらは意外に恐ろしいやつらなんだぜ

「そして俺は永続魔法、開運ミラクルストーンを2枚発動
このカードが存在している限り、占い魔女と名の付くモンスターは
フィールドに存在する占い魔女と名の付くモンスターの数×１００
０ポイント攻撃力がアップする
フィールドには2体の占い魔女、２枚の開運ミラクルストーン
よって2体の占い魔女の攻撃力は４０００」

「なんですって！
攻撃力４０００が2体！」

「「「「「「かわいいーーーーーーーーーー！！」」」」」」

「「「「「「それにつよーーーーーーーーーーーい！！！」」」」」」

「俺は占い魔女ヒカリちゃんで攻撃
ギガデイン」

「ドラクエ！？
そうはさせないわ
トラップカードを２枚発動するわ
ドゥーブルパッセ　スピリットバリア
ドゥーブルパッセは相手の攻撃をプレイヤーへのダイレクトアタックに切り替える
そして攻撃対象になったモンスターは相手にダイレクトアタックができる
だけどスピリットバリアの効果により
私は私のフィールド上にモンスターが存在する限り戦闘ダメージをうけないわ」

「なに！」

「エトワール・サイバーの特殊効果
ダイレクトアタックの時、攻撃力が６００ポイントアップ」

赤い痴女が迫ってきて蹴りやがった
っく

４０００－１８００＝２２００

「だけどまだ攻撃は残っている
エトワール・サイバーを占い魔女アンちゃんで攻撃
ドルマドン！」

破壊される赤い痴女
攻撃反応型でなくてよかった

「俺はリバースカードを一枚伏せターンエンドだ」

「私のターンドロー
私はトラップカード　リビングデッドの呼び声を発動するわ
戻ってきなさいエトワール・サイバー！
更に融合を発動
エトワール・サイバーと手札のブレード・スケーターを融合
サイバー・ブレイダーを召喚するわ」

でたか痴女の親玉

「さらに私は強欲な壺を発動
２枚ドローするわ
そして死者への手向けを発動
手札を一枚捨て占い魔女ヒカリちゃんを破壊する
これであなたの占い魔女アンちゃんの攻撃力は２０００
サイバー・ブレイダーで占い魔女アンちゃんを攻撃」

２２００－（２１００－２０００）＝２１００

「私はターンエンドよ」

ここが正念場かな
俺のデッキよ答えてくれ

「俺のターン、ドロー
俺は命削りの宝札を発動
手札が５枚になるようにドローする！」

「ここで強力なドローカードですって！

なんて引きの良さ」

「さらに俺は占い魔女エンちゃんを召喚
次に二重召喚を発動し占い魔女スィーちゃんを召喚
そして魔法カード、幸運の前借りを発動！
自分の場の占い魔女と名の付くモンスター1体のＬＶより一つレベルの低い占い魔女を
デッキもしくは手札から特殊召喚できる
俺はレベル４の占い魔女スィーちゃんより一つレベルが低いレベル３の占い魔女フウちゃんをデッキから特殊召喚
そして強欲な壺を発動
最後だリビングデッドの呼び声を発動し墓地の占い魔女ヒカリちゃんを復活させる
その特殊召喚に対し２枚目の受け入れがたい結果を発動
手札の占い魔女チーちゃんを特殊召喚」

場の確認だ
占い魔女エンちゃん　５０００＋５０００＝１００００
占い魔女スィーちゃん　５０００＋５０００＝１００００
占い魔女フウちゃん　５０００＋５０００＝１００００
占い魔女ヒカリちゃん　５０００＋５０００＝１００００
占い魔女チーちゃん　５０００＋５０００＝１００００

なんちゅう場だ
ほかの生徒も唖然としてる

「行くぞ痴女
占い魔女ヒカリちゃんでサイバー・ブレイダーに攻撃
ギガデイン
更に占い魔女エンちゃん、スィーちゃん、フウちゃん、チーちゃん

でダイレクトアタック
メラガイアー　マヒャデドス　バギクロス　イオナズン」
４０００－１００００－１００００－１００００＝－３６０００

「キャァアアアアアアアアアア」

「勝者オシリス・レッド石崎遊輝！！
おめでとう、次は決勝だ」

「やったっすね遊輝」

「やったな遊輝
だけど決勝では負けないぜ」

「それはこっちのセリフだ」

そして時間は経ち

「それでは学園代表決定トーナメント決勝戦を始めるの～ね
左からはオシリス・レッドの遊城十代ぃっと
右からはオシリス・レッドの石崎遊輝ぃっと」

「行くぜ十代！」

「ああ、勿論だ！」

「「デュエル！！」」

そして俺たちのデュエルが始まる

第２８話　痴女との再戦　ＶＳ明日香（後書き）

占　（うらな）い　魔女　（まじょ）　ヒカリちゃん》
通常モンスター
レベル１／光属性／魔法使い族／攻撃力０／守備力０
このカードをドローした今日のあなたの運勢はスーパーハッピー！
ラッキーナンバーは１。
ラッキーカラーは黄色。
ラッキーアイテムは光るチャーム。
願いは何でも叶っちゃう！！

《　占　（うらな）い　魔女　（まじょ）　エンちゃん》
通常モンスター
レベル２／炎属性／魔法使い族／攻撃力０／守備力０
このカードをドローした今日のあなたの運勢はベリーハッピー！
ラッキーナンバーは２。
ラッキーカラーは赤。
ラッキーアイテムは金魚。
楽しいことがおきるかも♪

《　占　（うらな）い　魔女　（まじょ）　フウちゃん》
通常モンスター
レベル３／風属性／魔法使い族／攻撃力０／守備力０
このカードをドローした今日の運勢は、まあまあね。
ラッキーナンバーは、３。
ラッキーカラーは、緑。
ラッキーアイテムは、植物。
無くした物が見つかるかもよ。

《　占　（うらな）い　魔女　（まじょ）　スィーちゃん》
通常モンスター
レベル４／水属性／魔法使い族／攻撃力０／守備力０
このカードをドローした今日の運勢は、ちょっと悪いかも。
ラッキーナンバーは、４。
ラッキーカラーは、青。
ラッキーアイテムは、傘。
東に向かうと運が向いてくるかもね。

《　占　（うらな）い　魔女　（まじょ）　アンちゃん》
通常モンスター
レベル５／闇属性／魔法使い族／攻撃力０／守備力０
このカードをドローした今日のあなたの運勢は、アンハッピ～。
ラッキーナンバーは、５。
ラッキーカラーは、紫。
ラッキーアイテムは、サングラス。
落し物に注意して！

《　占　（うらな）い　魔女　（まじょ）　チーちゃん》
通常モンスター
レベル６／地属性／魔法使い族／攻撃力０／守備力０
このカードをドローした今日の運勢は、スーパーピンチ！
ラッキーナンバーは、６。
ラッキーカラーは、黒。
ラッキーアイテムは、革靴。
ライバルに差をつけられちゃうかも！がんばれ！！

《ドゥーブルパッセ》効果
通常罠
相手モンスターが自分フィールド上の表側攻撃表示モンスターの

攻撃対象になった場合に発動する事ができる。
そのモンスターの攻撃は自分への直接攻撃になる。
その後、相手プレイヤーは攻撃対象となったモンスターの攻撃力の数値分のダメージを与える。

第２９話　激突する龍と英雄　ＶＳ十代（前書き）

やっぱりオリジナル成分が濃いと内容が短くなってしまう
そこが課題だけどオリジナルでは長い方かな

第２９話　激突する龍と英雄　ＶＳ十代

Ｓｉｄｅ遊輝

「それでは学園代表決定トーナメント決勝戦を始めるの～ね
左からはオシリス・レッドの遊城十代ぃっと
右からはオシリス・レッドの石崎遊輝ぃっと」

「行くぜ十代！」

「ああ、勿論だ！」

「「デュエル！！」」

俺たちのデュエルが始まった

「俺のターンから行くぜ、ドロー
俺はＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）クレイマンを守備表示で召喚
リバースカードを２枚伏せターンエンドだ」

懐かしいな
初期の感じがするデュエルだな
俺も行かせてもらうぜ

「俺のターン、ドロー
俺は手札からフィールド魔法　混沌空間（カオス・ゾーン）を発動
さらに永続魔法、未来融合－フューチャー・フュージョンを発動
Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブゴッド・ドラゴン）を指定し
デッキから融合素材のドラゴン族モンスターを５枚墓地に送る」

いきなりフューチャー・フュージョンか
ラッキーだな
まあ、いつももこれくらいいいくけど

「さらに今デッキから墓地に送られたエクリプス・ワイバーンの効果発動
このカードが墓地に送られた時
デッキから光もしくは闇属性のレベル7以上のドラゴン族モンスターを除外する
俺はデッキからレベル7の光属性ドラゴン族モンスター
フォトン・ワイバーンを除外する
この時、混沌空間（カオス・ゾーン）の効果が発動する！」

「なに！」

こいつは最近、神からもらったカードだからな
別の世界で新しく最近生み出されたカード
そいつらをデッキに入れて戦っている

「混沌空間（カオス・ゾーン）の効果
モンスターがゲームから除外されるたびにこのカードにカオスカウンターを一つ乗せる
さらに手札のライトパルサー・ドラゴンの効果話発動
墓地の光属性モンスターと闇属性モンスターを除外することで
このカードは手札から特殊召喚する事ができる
俺は墓地の光属性　エクリプス・ワイバーンと
闇属性　真紅眼の黒龍（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を除外しこのモンスターを特殊召喚する
来い、ライトパルサー・ドラゴン！！」

「いきなりライトパルサーか
なかなか本気だな、遊輝！」

「ああ、勿論だ
俺が手を抜いたことなんかあったか？」

「無かったな
お前はいつも全力全壊だったな」

おいそれじゃあ

「おい十代
俺はどこの管理局の魔王だ
まあいい、混沌空間（カオス・ゾーン）の効果でカオスカウンターが二つのる
そして、除外されたエクリプス・ワイバーンの効果を発動
このカードが除外された時このカードの効果で除外されたモンスターを手札に加えることができる
俺は除外されていたフォトン・ワイバーンを手札に加える
行くぞ、十代
俺はライトパルサー・ドラゴンでクレイマンに攻撃
パルスストリーム！」

通らないだろうが
除去カードが少ないこのデッキだ
トラップは早めに発動させとかさせてもらうぞ

「そうはさせないぜ
リバースカードオープン　ヒーローバリア
ライトパルサー・ドラゴンの攻撃を無効にする」

たぶんもう一枚はもっと強力な除去トラップだろ
ミラフォとかかな

「俺はリバースカードを一枚伏せターンエンドだ！！」

「なかなかやるな遊輝
俺のターン、ドロー！
俺は融合を発動
手札のＥ・ＨＥＲＯ　スパークマンとＥ・ＨＥＲＯ　エッジマンを融合
来い　Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン！！」

プラズマヴァイスマンか
あいつの効果でライトパルサー・ドラゴンを消してダイレクトアタックか？

「俺はプラズマヴァイスマンの効果を発動するぜ
俺は手札を一枚捨てライトパルサー・ドラゴンを破壊する」

予想通りだな

「そうはさせない
俺はトラップカード　竜の転生を発動
このカードの効果によりフィールドのライトパルサー・ドラゴンを除外し
手札からドラゴン族のフォトン・ワイバーンを特殊召喚する
これによってプラズマヴァイスマンの効果の対象はいなくなり
その効果は不発だ！」

「なんだって！」

「さらにフォトン・ワイバーンの効果発動
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時相手フィールド上のセットされたカードを全て破壊する
フォトンサイクロン！」

十代の伏せカードが破壊されるって
やっぱりミラフォか
ミラフォは失敗フラグなんだが

「そして混沌空間（カオス・ゾーン）にカオスカウンターが一つのる

「だけど、フォトン・ワイバーンよりプラズマヴァイスマンのほうが攻撃力は上だぜ
プラズマヴァイスマンでフォトン・ワイバーンに攻撃
ヴァイススパーク！」

４０００－（２６００－２５００）＝３９００

「っち」

「俺はターンエンドだぜ」

「俺のターンドロー
俺は手札から天使の施しを発動
３枚ドローし２枚捨てる
俺は手札から竜の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動
墓地の５枚のドラゴン族を除外し
現れよ　Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブゴッド　ドラゴン）
さらに５体のモンスターが除外されたことにより

混沌空間（カオス・ゾーン）にカオスカウンターが五つのる
そして混沌空間（カオス・ゾーン）、第二の効果を発動
自分フィールド上のカオスカウンターを四つ以上取り除くことで
取り除いた数と同じレベルを持つゲームから除外されているモンスター一体を特殊召喚する
俺は八つのカオスカウンターを取り除き
除外されている銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）を特殊召喚！」

このターンで終わらせてもらうぜ十代

「さらに融合を発動フィールドの銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）と手札の銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）を融合
来い　ツイン・フォトン・リザードを特殊召喚
ツイン・フォトン・リザードの効果発動
このカードを生け贄に捧げ
このカードの融合素材にしたモンスター一組を自分の墓地から特殊召喚する
現れよ2体の銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）！！」

F・G・Dを挟むように現れる2体の銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）
これで決まりだ

「F・G・Dでプラズマヴァイスマン（ファイブゴッド　ドラゴン）に攻撃
殲滅のゴッド・ストリーム！！」

４０００－（５０００－２６００）＝１６００

「さらに一体めの銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）で
クレイマンに攻撃
破滅のフォトン・ストリーム」

砕けるクレイマン

「そしてとどめだ
2体目の銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）で攻撃
破滅のフォトン・ストリーム！！」

1600－3000＝－1400

「うわぁあああああああああああああああ
っく負けたぜ
だけど…」

「ガッチャ
楽しいデュエルだったぜ」

「俺のセリフとるなぁああ」

「勝者　石崎遊輝
おめでとう、君が我がデュエルアカデミアの代表だ」

「遊輝
俺の分まで代表戦頑張ってくれよ」

「勿論だ！」

その後俺は寮に帰って行った
今日は十代たちとパーティーだ！

「くううう、俺がなれなかったのは悔しいけど

遊輝、絶対代表戦勝てよ」

「そうっすよ遊輝
アニキに勝ったんだからきっと代表戦も勝てるっすよ」

「ああ、当然だろ
お前に勝ったんだ、絶対にお前の分も戦って勝ってくるよ」

「約束だぜ
じゃあ今日はパーティーだ
遊輝も食えよ」

「ああ、ってこれ俺が用意したんだろうが
勿論食うにきまってるだろ」

「そうだったけ、まあいいや
とにかく食おうぜ」

みんなで騒いだり食ったり飲んだりして楽しいな
ちなみに並んでるのは
ココットライスと竜の卵
それにモスボークとオニオンで作ったチャーハンと
サシミウオやカジキマグロ
フグクジラやマーメイマグロの刺身とかだ
特にフグクジラの調理には本当に気を使ったぜ
ほかにもスープやらサラダとかも作った
まあ一人でだけど
さすがにあの食材は見せられん

「ところでどこでこんな食材を手に入れてきたッすか?」

「禁則事項だ」

「いいじゃないっすか
それくらい教えてくれても」

「禁則事項だ」

言えるか
言っても信じねえだろ

「ケチ」

「ケチで結構
覚める前に食おうぜ」

「そうなんだなあ翔
覚める前のほうがうまいに決まってるんだなあ」

そんな感じで時間は過ぎていき
パーティーもお開きになった後

「国崎さんでしたよね」

「あ、お前はあの時の
ちょうどいい、実は俺…」

「いいですよ、知ってますから
ジャーナリストの国崎さん」

そう、俺はあのおっさんこと国崎耕介に会いに来ていた

「俺のこと知ってたのか
だったらなんで俺のことを黙ってたんだ？」

「あなたが悪い人に見えなかったからじゃだめですか」

「お前も変わったやつだな
だけどだましていたことに変わりはねえ
すまなかった
お前たちのデュエルを見て俺も思い出した
昔はこれでもデュエリストを目指して世界を渡り歩いたこともあったんだ
だけど、世界の強豪たちの前に敗れ
夢を捨てて
今じゃジャーナリストとは名ばかり
金になれば汚いことも平気でやって
だけど、もう一度言うがお前らのデュエルを見て
お前らがあれだけ熱くなれるデュエルを
夢を諦めて逃げ出した俺に取り上げる権利はないって気付いた
そして、俺ももう一度やってみたくなった
今度こそ本当の正義の追求ってやつをさ」

「国崎さん
あなたはやっぱりいい人だ」

「こいつを記事にするのはやめだ
お前らと初めて会った夜
お前のことをつけて廃寮に行ったんだよ
そのあと調べたんだ

だが、俺なりに真実を調べてみる
何かあったら知らせるよ」

「ちょっと待ってくれ
俺も個人的に同じことを調べるのを頼んでるやつがいるんだ
俺とそいつの連絡番号を渡しておくから
たまに連絡をくれないか」

「わかったよ
俺の連絡番号も渡しておくよ
いつでも連絡してくれ」

「じゃあこれが俺とそいつの連絡番号だ
お前のことはそいつには俺から言っておく」

「分かった、あばよ」

「じゃあな、国崎さん」

そう言って俺と国崎さんは別れ俺は寮に帰り眠ったんだ
ま、翌日の夜もライネスたち精霊組とパーティーをしたのは割愛する

第３０話　もけもけの力　ＶＳ茂木もけ夫（前書き）

少し第２２話に書いたモンスターテキストを修正しました

第３０話　もけもけの力　ＶＳ茂木もけ夫

代表決定トーナメントの翌日の翌日

Ｓｉｄｅクロノス

「ププ～ンチョ、チョコプリ～ン、チョコアラモ～ドったく、あの石崎遊輝が我が校の代表だなん～てほんとに決まったの？
決まってしまった～のノン、ノン、ノン、ノンまだ奥の手があるの～ね」

そうなの～ね
私には最終手段があるの～ね

「デュフフ～
一（イー）、二（アール）、三（サン）、四（ス～）
ってそれ中国語
よいしょ失礼しますグラッチェ」

あれはこの養鶏場の下にあるの～ね

「コケー！」

「「「コケー！！」」」

「「「「「コケー！！！」」」」」

「な、なななな！！」

「「「コケー！」」」

「あー！あー―！
頭はやめて～の！！頭やめて～の！！」

確かこの砂場だったはずなの～ね
早く入らないと危ない～の

「ささっとあけよ、閉められてる～の
よいしょ」

「コケー！」

また来た～の

「傷たたたた
だから頭やめてーの！！！」

「「「「「「「「バサバサバサ
コケー！！！！！」」」」」」」」

「やめて～の！！ほんと、頭だけは！！
勘弁してくださいよ～！！」

ドーン！！！

落ちた～の！お尻痛い～の！！

「「「コーコケケケ！！！コーコケケケ！！！」」」

「私が卵泥棒なわけないじゃ無いの～よ！！
この！ほれ！！」

扉閉めてっと
これでやっと落ち着ける～の

「ひどい目にあったの～ね
私は鶏なんかに構ってる暇ないの～に
グラッチェ、グラッチェ、これこれ」

これを着て～の
準備完了なの～ね

「石崎遊輝ィ～～い
私はあなたのおかげ～で、またこのパンドラの箱ぉ～を
開けねばならないの～ね
遊城十代、あなたも一緒に潰してあげる～の
よっこらしょか」

カードを通して～の
電子ロックを開けて～の

「しかし、どんなに恐ろしい結果になろ～と
最後に残ってるのは希望
パンドラの箱に～は必ず最後には希望が入ってるの～ね
ぬっはっはっはっはっはっはっは
さあ、出ておいで～の！！！」

これであの二人も終わりなの～ね

Ｓｉｄｅａｕｔｏ

Ｓｉｄｅ遊輝

「よし、これでこのデッキの完成だ」

「いやいや、ここはウォーター・ドラゴンを入れよう
炎属性には圧倒的に有利だ」

「いや、もうデッキ出来たって」

「エトワール・サイバーも入れるべきよ
直接攻撃の破壊力が違うわ」

「だからもうデッキ出来たって」

「デス・コアラもいいんだなぁー」

「いや、だから」

「あのお、僕のパワー・ボンドも」

だからあ

「ああもう
だからデッキは出来たって」

「そうだぜみんな

遊輝はもうデッキ出来たって」

「十代の言うとおりだ
俺はもうデッキ出来たんだから邪魔すんなよ」

「何も邪魔をしているわけじゃない
今度のデュエルは学園の名誉をかけた戦いだ
だから俺たちも一緒に戦うつもりで」

それってただ自分のカードを使ってほしいだけじゃ

「そうよ、学園のためなんだから」

「冗談じゃない
俺は学園のためにデュエルしてんじゃねえ」

「そうだ、これは遊輝のデュエルなんだ
遊輝は楽しむためにやってんだよ」

十代

「十代の言うとおりだ
俺は俺のためにやってるんだ」

「分かるぜ、その気持ち
デュエルは人のためじゃない
自分のためにやってるんだもんな」

「うん！」

やっと分かってくれたか

「だが遊輝、俺のウォーター・ドラゴンを入れてくれないか？」

「パワー・ボンドも！！！」

「ブレード・スケーターも」

「デス・コアラもいいんだなぁー」

「だから俺はもうデッキ出来たって
十代、俺の味方はお前だけだ
一緒に逃げるぞ！」

俺は十代の手を掴みひっぱって逃げる
ただ、何か忘れている気が

「ああ、逃げた！」

「ああ、待て
俺のウォーター・ドラゴンを！！」

「エトワール・サイバーは？」

「あっちだ！！」

「僕のパワー・ボンドォォー―！」

お前ら

「十代どっちいけばいいと思う？」

「屋上に行けばいいと思うぜ
俺のとっておきの場所なんだ」

「屋上か
俺もそこは好きだな、まあいい早く行こう」

「おーい遊輝！！」

「エトワール・サイバーよ！！」

ほんとにあいつらは

「ほんとになんだっちゅうんだ」

「まったくだぜ
お前はもうデッキ出来たって言ってるのになあ」

とか言いながら屋上まで駆け上がる俺と十代
まったく、それにしてもやっぱりこの展開
アニメで見たことあるような

「やっと着いた」

こんなに時間が長く感じたのは初めてかもしれない

「やあ」

青いぼろぼろのノースリーブのシャツを着たオベリスク・ブルーの

生徒が目の前に
あ、思い出した
ってことは問題ないか実体化、いや問題あるな

「なんで俺らしか知らないとっておきの場所にお前が??」

いや、ほかにも知ってるやつくらいいると思うが

「お天気がいいからねえ」

「「お天気?」」

いや、どうしたらその理由が応えられるんだ
なぜこの場所にお前がいるという趣旨の質問でお天気がいいからね
って

「ここだとお日様がぽかぽか、雲がぷかぷか
何にもしたくなくなるよね」

「ああ、そうかあ?」

「俺としてはそうは思わないけど
まあ、昼寝するのには確かにいい場所だけど」

『クリクリー』

「あ? ハネクリボー?」

『こんにちは』

「奏（かなで）も出てきたのか」

「あ、それ？それってもしかして君たちの精霊かい？」

「あ？お前ハネクリボーが見えるのか？」

ま、記憶どうりだな

「かわいいねえ、そっちの女の子の精霊もね

あ、そうか

君が遊城十代君、で君は石崎遊輝君だね」

「なんで俺たちの名前を？」

十代、その質問は愚問だと思うぞ

「僕は茂木もけ夫

突然だけど遊輝君、デュエルしようよ」

ああ、俺が代表になったから俺が先なのか

「いいぜ、そのデュエル受けて立つ

だけど、どうして急に

さっきは何もしたくないって言ってたのに？」

「それとは話が別

だってデュエルの精霊を知る人と一度はデュエルしてみたいじゃないか、ね」

そうゆうもんなのか

「じゃ、やろうぜ」

じゃあやる…

「あ、アニキと遊輝!!
やっぱりここにいた」

「え、なんでここが分かったんだ?」

いや、いつも行ってるならわかると思うぞ

「だってアニキ、授業サボると必ずここに
遊輝だっていつもここに飯食いに来てるじゃないっすか」

「どうしたんだ?」

「あいつとデュエルすることになっただけだけど」

「何?」「デュエルを?」

「まあいいや、とにかくやるぞ」

「うん」

「「デュエル!!」」

「僕の先行でドロー
僕はもけもけを守備表示で召喚するよ」

『もけもけ』

「「あーーーーかわいーーーー!!」」

翔と痴女一体何言ってんだか

「なあんか、のんびりしたモンスターだな」

のんびりしたモンスターってなんだ

「そうね
なんかこっちまでのほほんとしちゃうわね」

「胸がぽかぽかする」

「あ、ああ
あれ？なんか眠くなってきたんだなあ」

「おい、みんなどうしたんだ？」

十代は何ともないな
それにしても隼人だけこの反応って
もしかして精霊が見える人には効かないけど
中途半端に精霊がわかる人には威力が高いのか

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドだよ」

まあいいや、今は目の前のことだけを考えよう

「俺のターン、ドロー

俺は翻弄するエルフの剣士を攻撃表示で召喚
そして手札からマジックカード　融合を発動
手札のバスター・ブレイダーと沼地の魔神王をブラック・マジシャンの代わりに融合
来い　超魔道剣士－ブラック・パラディン」

「あはははは
すごい遊輝君、さすがだな」

なんじゃそりゃ
なんか、調子狂うな

「なんか見ているこっちまで調子が狂うな」

『クリクリー』

「確かにな
だがデュエルはデュエルだ
翻弄するエルフの剣士でもけもけに攻撃
神明流奥義　斬鉄閃」

「僕はトラップカードをオープンするよ!!人海戦術!!
このカードは各ターンのエンドフェイズにそのターン破壊されたレベル2以下の通常モンスターの数だけ
デッキから同じレベルのモンスターを特殊召喚するんだよ」

「だけどバトルは続行だ!!
行け　翻弄するエルフの剣士」

翻弄するエルフの剣士がもけもけの上半身と下半身にサヨナラをさ

せると
もけもけは消えていく

「次だ
超魔道剣士－ブラック・パラディンでプレイヤーにダイレクトアタック
超魔導無影斬（ちょうまどうむえいざん）」

４０００－２９００＝１１００

ブラック・パラディンがもけ夫の前に急に現れ攻撃をする
ありゃ瞬動か？

「うわぁ」

「カードを2枚伏せターンエンドだ」

「う、だけど
人海戦術の効果でハッピー・ラヴァーを攻撃表示で特殊召喚したよ
そして、僕のターンだからドロー
僕はもけもけを攻撃表示で召喚するよ」

『もけ』

「「「かわいい～～～～」」」

もう隼人は寝そうだから言ってないな

「もけもけいいな」

「私もデッキに入れてみようかしら」

無理だ、やめとけ
お前のデッキとは天と地がひっくり返ってもあわない

「いると嬉しいかも」

「はあああ」

「お前らほんとにどうしたんだよ」

全く十代の言うとおりだ
どうして、もけもけでこうなる
ってかどんな能力だ

「さらに、僕は手札から
怒れるもけもけを発動する
そしてハッピー・ラヴァーで翻弄するエルフの剣士を攻撃だよ」

「馬鹿な、翻弄するエルフの剣士のほうが攻撃力は上なんだぜ」

っち

「かまわない
ハッピー・バーニング！！」

おおい！
テキストに書かれたハートビームはどうした
そして、翻弄するエルフの剣士
ビームを切ったら相手にビームが向かっていくってなんだよ

１１００－（１４００－８００）＝５００

『あーあーあー！ぷぷぷぷぷぷぷ』

「「「きゃあーーーーーーー！
おこった顔もまた可愛いーーーーーーーーー！！」」」

「欲しいなあ、もけもけ」

「いいよねえ」

「おまえらなあ」

十代、やっぱり俺の味方はお前だけだ

「しかし、このとき
悪いけど、マジックカード　怒れるもけもけの効果が発動するよ
もけもけがフィールド上に存在しているときに、僕の天使族モンスターが破壊された場合
このターン、もけもけの攻撃力は３０００に上がるんだよ」

「３０００かあ～～～」

「もけもけちゃんってすごお～～い」

「かっこいい～～～～」

そうか？

『もけえーーーーーーーーーーーーー！！！』

「「「すごおーーーい！かっこいいーーーーーーーー！！」」」

「攻撃力３０００のもけもけかあ」

「「「っはっはっはっは」」」

うざい、拍手しながらその反応はうざい

「おまえらなあ、どっちの応援してるんだよ」

十代、よく言ってくれた

「そりゃあ・・・
どっちでもないよお」

ズコオオオン

俺と十代はひっくり返る
なんでやねん、どう考えてもお前らもけもけの応援してんじゃん

「あのいいかな？
あの僕はもけもけでブラック・パラディンを攻撃したいんだけど」

「よくないかな
俺はトラップカード発動　ガード・ブロック
今回の攻撃でのダメージはなくなり、俺はカードを一枚ドローする」

「だけど、ブラック・パラディンは破壊させてもらうよ

いけえもけもけ
もけもけウェ～～～～～ブ！！！」

『もけもけーーもけもけーー』

「「「もけもけーーー
もけもけーーーー」」」」

あ、隼人寝てる
おいおい

「おまえらなあ！！」

「ほんとにお前ら」

「まあだだよ
僕は手札から速攻魔法　神秘の中華鍋を発動するよ
これはフィールド上のモンスターを一体生け贄に捧げることで
そのモンスターの攻撃力か守備力を選択し
その数値分のライフを回復させるカードだよ
僕はもけもけを生け贄に捧げ
攻撃力３０００分のライフを回復するよ
さらにハッピー・ラヴァーが破壊されたことにより
人海戦術の効果を発動
僕ははにわを守備表示で特殊召喚するよ」

５００＋３０００＝３５００

「「はにわ？」」

はにわって
おいおい

「うん
はにわだよ」

「「はにわだ」」

「おおーい遊輝」

「なんだ」

「頑張ることないぞお」

「お前、それ本気で言ってんのか」

「そうよ、戦いは良くないわよ
ピースで行こうねえ」

「もけもけのように」

「おまえらなあ」

「「「もけもけーーー」」」

「十代、もう何を言っても無駄だ
無視するから気にするな」

「だけど
こ、これは」

「あ、あはははは」

「だから無駄だよ
こいつらに今何を言っても無駄だ」

「ほんと、なんなんだよお」

「もけもけー」

「「「もけもけーーーー」」」

「もけもけー」

「「「もけもけ～～」」」

「もけけのけ～～～なの～～ね
ひょい、いひひのひ～～
驚きました？
ドロップアウトボーイズ、石崎遊輝、遊城十代
これが茂木もけ夫の脱力デュエルなの～ね」

変な服を着たクロノスが現れた

「脱力デュエル？」

命名単純すぎんだろ

「そう、シニョール茂木は三年前
学園の誇るナンバーワンデュエリストだったの～ね！！

相手の戦術、伏せカードの読み
全てにおいて彼は天才的デュエリストだったの～ね」

「ナンバーワンデュエリスト？こいつが」

十代、戦ってみたいって顔になってるぞ

「しかぁーーし！！
ある日を境にシニョール茂木のデュエルが変わってしまったの～ね」

「デュエルが変わった？」

「そう、彼と対戦したデュエリスト全てがやる気をなくし
学園を辞め、島を去ってしまったの～ね」

「やる気をなくした？」

東方風に言うと
相手のやる気をなくす程度の能力か

「「「もけもけ～」」」

「よく分からないんだけど、もけもけと出会ってから
みんなこうなっちゃうんだよね」

「とにかく
シニョール茂木の力に気付いた我々は
学園のため、そしてデュエリストのため！！
彼を離れたところ
つまり、シニョール茂木専用の寮に入れたの～ね」

「ひでえことしやがる」

「全くだ
人間のことをなんだと思ってるんだ!!」

ほんとに
この学園の人間は

「ノン、ノン、ノンカンビ～ナ
何を言うの～ね
そこは天国!!茂木もけ夫だけの超豪華施設なの～ね」

「だったらなんで出てきやがった?」

「十代の言うとおりだ
デュエルなんてしたくないだろ」

「うん、でもクロノス教諭から君たちのことを聞いて
ある予感がしたんだ
ひょっとして君たちは僕と同じように
デュエルの精霊を扱えるんじゃないかってね」

精霊を扱う?

「精霊?」

「僕はねえ
君たちの可愛い精霊たちをデュエルから解放したいんだよ」

『クリクリ―！』

あいつは

「こうやってのほほ～んとしているほうが
精霊にとっては幸せだからねえ」

何を

『クリクリ―』

言ってるんだーーーーー！！

「ふざけたこと言ってんじゃねえ」

『そうよ、私は遊輝と一緒にいて楽しいんだから』

『クリクリ―』

「残念だけど
俺の相棒も楽しいと言っている
俺と一緒にデュエルできることを」

「そうかなあ？」

「俺のターン！！ドロー―！！
俺はエルフの剣士を攻撃表示で召喚
はにわを攻撃
秘剣　ツバメ返し」

振られた剣から三つの斬撃がはにわに向かって飛び
はにわを切り裂く

「そして、翻弄(ほんろう)するエルフの剣士でプレイヤーにダイレクトアタック
神明流奥義(しんめいりゅうおうぎ)　斬鉄閃(ざんてつせん)！！」

３５００－１４００＝２１００

「そしてターンエンドだ」

「じゃあ僕も
人海戦術の効果でハッピー・ラヴァーを攻撃表示で特殊召喚するよ」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっとまっちょーれ！！！
ドロップアウトボーイズったらまだ
やる気満々じゃないの～よ
なぜ？どうして？おせーてー
なんであいつらみたいにもけもけになっちゃわないの～ね
何故な～ぜ？どうしてなの～ね？」

当り前だろうが
そんなもんで俺の、いや俺たちのやる気が削げるわけねえだろうが

「僕のターン、ドロー
僕は強欲な壺を発動
それによりカードを２枚ドローするよ
さらに僕は手札から闇の量産工場を発動し
墓地から通常モンスターを二体選んで手札に加えるよ」

『もけ』

『もけ』

『もけ』

「そして手札のもけもけを合わせて三体融合して」

「ええ」

「うわあーー」

『キングもけもけ～～』

「「でかあ！！」」

なんじゃこりゃあ

でか過ぎるだろ

「キングもけもけ！！

キング・もけもけ・ウェーブでエルフの剣士を攻撃して！！」

『キングもけもけ～～～～』

「怯むな！！

ツバメ返しだ！エルフの剣士！！」

２１００－（１４００－３００）＝１０００

キングもけもけから3体のもけもけが落ちてくる

「キングもけもけの効果を発動するよ
キングもけもけが破壊された時
自分の墓地に存在するもけもけを可能な限り特殊召喚する事ができる」

「「また？」」

またかよ

『『『もけもけ～～～』』』

うわ、クロノスの来てた変な服の顔の部分だ砕けた
なんちゅう威力や

「僕はハッピー・ラヴァーでエルフの剣士を攻撃するよ
ハッピー・ラヴァー！！ハッピー・バーニング！！

だからハートビームはどうした

「無駄だ」

１０００－（１４００－８００）＝４００

三体のキレるもけもけ
だが

「この瞬間
怒れるもけもけの効果が発動
天使族モンスターが破壊されたことにより
もけもけの攻撃力は…」

「また３０００か、遊輝」

「大丈夫だもけもけ一号でエルフの剣士を攻撃」

「っく」

４０００－（３０００－１４００）＝２４００

「もけもけ二号ともけもけ三号で翻弄するエルフの剣士に攻撃」

「そうはさせない
ガード・ブロックを発動
もけもけ二号のダメージを０にし一枚ドローする」

「だけどもけもけ三号の攻撃は当たるよ」

２４００－（３０００－１４００）＝８００

「人海戦術の効果により
僕は再びハッピー・ラヴァーを守備表示で特殊召喚
さらに、トラップカード　ホーリーエルフの祝福を発動
フィールド上のモンスター一体につき３００ポイントライフを回復する」

４００＋３００×４＝１６００

「まだまだあ！！
俺のターン、ドロー」

「あれおかしいな？どうしてだろう？
なんでまだやる気があるんだ？」

「当ったり前だろ
こんな楽しいことやってるのにあくびしてる暇なんか遊輝にも俺にも無いっちゅうの」

「その通りだ
俺はビッグ・シールド・ガードナーを攻撃表示で召喚
さらにシールド・クラッシュを発動
ハッピー・ラヴァーを破壊」

「怒れるもけもけを発動
もけもけの攻撃力は３０００になる」

「そんなのかんけえねえ
俺は強制転移を発動
このカードの効果により俺はビッグ・シールド・ガードナーを選択する
お前のフィールドにはどっちにしろもけもけだけだけど
もけもけでビッグ・シールド・ガードナーにもけもけウェーブで攻撃」

「えーーー
（もけもけがあんなにやる気を出している）」

１６００－（３０００－１００）＝－１３００

「うわあああ」

「いいデュエルだったな
お前も結構熱くなってたじゃん」

「これでも楽じゃないんだ
力を抜くのもね」

「分かるぜ
デュエルってすっごく楽しいからな」

「確かに十代の言うとおりすっごく楽しいもんな」

「たまには君のように勝負に拘るのもいいもんだな」

「「だろ」」

「でも今は、頑張りすぎたんで眠くなってきちゃった
おやすみ」

「「えーーーーーー！！」」

お前はのび太か

「もう、なんでこうなる
十代、お前はももえとジュンコ呼んでくれ
痴女を運ばせる
こっちは大原と神楽坂と大徳寺先生を呼んで
クロノス先生と三沢ともけ夫を運ぶのを手伝ってもらう
呼んだメンバーが来たら俺が隼人、お前が翔を運んでくれ」

「ああ、分かった」

これからしばらくして来てくれた仲間にお礼を言いながら
俺らも隼人と翔を運んだあと寮に帰ったんだ
俺は昨日の夜と同じようにそのあと俺の精霊たちとパーティーを開いた
それから眠ったんだ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4604w/

転生物語

2011年12月24日11時57分発行